夢処刑人

タナペン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢処刑人

【Ｎコード】
Ｎ８７５３Ｗ

【作者名】
タナペン

【あらすじ】
人の悪夢を取り払う能力を持つ主人公、渋埼光一郎。
時間にシビアな彼は、常に一分単位で作られたスケジュール帳を基に行動をしている。
そんな彼が向かう先は、過去の事件の夢に悩まされる元刑事、色とりどりの部屋を巡る夢に悩まされる女、人を殺す夢に悩まされる男……。

『私に処刑できない悪夢などない。なぜならば、私は夢の中では神そのものだからだ』

ある元刑事の悪夢１

１

駅前のコーヒーショップにはそう長くは無い、しかし地味にイライラしそうなくらいの行列が出来ていた。
その最後尾に並ぼうか並ばないかを迷っているうちに、どんどんその行列は一人また一人と増えていく。今ここで並ばなければ後悔することになるかもと思い、五分ほど迷ったあげく来た時よりだいぶ長くなってしまった列に並んだ。
春先とはいえまだ肌寒い風が、並んでいる全員の体を舐める。そして全員が同じように身震いし先頭へ催促の目を向ける。それと同時に、早く店内で温かいコーヒーあるいはココアかホットミルクを飲んで体を休めたいと考える。
渋埼光一郎はしかし、そんな寒さよりも列に並ぶ決断を下すのに五分も掛かってしまったという不甲斐なさに苛立ちを覚え、思いっきり人目などを気にせず自分の頬を自分の拳で殴りつけてやりたい衝動に駆られていた。
彼は二十四時間という限られた時間を一分一秒あるいは一瞬の決断も無駄にしたくないのだ。それが彼のポリシーであり価値観であり生き方あるいは人生そのものだった。そうすることで誰よりもいや、地球上のどんな生物よりも時間を有意義に、そして丁寧に過ごしているのだという優越そして征服感に酔いしれるのだ。
腕時計を見ると午前七時二十四分三十六秒。今、三十七秒。彼の時計は正確に時を刻む。それは一秒の遅れもあってはならない。だから毎日、朝目覚めた時はラジオをつけてきちんと自分の時計が正確な時間を示しているかを確認する。
それでも心配だから電話の時刻合図で確認を取る。一秒でもずれていたらもちろん直す。いや、だいたいの場合その時計を捨ててしまう。一度狂ってしまった時計はまた狂う可能性がある。そんなもの

はただのガラクタにすぎない。だから新しい物に買い変える。それがたとえロレックスであったとしても。ただ正確に時を示してくれさえすれば、それが千円の物でもいいし、百万の物でもいい。キャラクターの物でもいいし、もちろんロレックスでもいいのだ。

今日はアメリカンコーヒーのトールサイズにシナモンロールを食べよう。シナモンロールは砂糖をたっぷり掛けてもらって温めてもらう。そして林檎の皮を剥くようにシナモンの表面をゆっくりと上から剥ぎ取り、すべて剥ぎ取った後でそれをフォークで崩し全体に砂糖がいきわたるようにする。そして冷めてしまわぬうちにスプーンですくい取って食べるのだ。カプチーノは少しぬるめにしてもらおう。行列のせいで（いや、自分が列に並ぶか否かの判断が遅れたからかもしれない）今日のスケジュールが間に合わなくなってしまうかもしれない。いつものペースで飲んでしまえば、これからの予定にずれが起きてしまう。だからその時間を埋めるためにぬるめのカプチーノをいつもよりペースを上げて飲むのだ。

しかし朝早くだというのにこの人の数はなんだ。よくもまあコーヒーを飲みたいがために寒い風を受け、身を震わせるものだ。

渋埼はこの店のコーヒーを一度も美味しいと思ったことがない。こんなインスタントを少し贅沢にしたような代物にコーヒーの魅力も奥深さもない。横断歩道を渡った所にある喫茶店『珈琲館』の方がよっぽどコーヒーと呼べたし、もちろんいつも挽きたてを提供してくれたし、その香りはどんな香水よりもあるいはどんな女性フォルモンよりも彼を興奮させそして落ち着かせた。

何故このコーヒーショップに並ぶかというのは、ただ朝早くからコーヒーを飲める場所がここしかないから。珈琲館は朝の十時から開店するのに対して、ここは六時半からコーヒーの香りを漂わせている。渋埼にとって朝のコーヒーはこれから仕事をするにあたっての儀式のようなものであり、カフェインを体の中に取り込むことによって活力をみなぎらせることができるのだ。つまりコーヒーを飲むという行為は、渋埼にとって野球選手がネクストバッターサークル

に入るのと同じくらい当然のことであり、赤子がミルクあるいは母乳を欲しがるのと同じくらい必要不可欠なものだった。
そしてそれは自動販売機にあるような缶コーヒーでは駄目なのだ。やはり喫茶店やこのようなファスト店で飲まなければならない。席に座り煙草を吸い、コーヒーをすすり今日の予定が書き込まれた手帳をゆっくり眺める。そうしなければコーヒーを飲んだ気にならない。

ようやく順番が回ってきたのでアメリカンとシナモンを注文する。シナモンロールを注文しようとした時、レジ横のショーケースに入ったレモンケーキが目に入る。レモンケーキはショーケースの照明を浴びてとても美しく光っていた。渋埼はシナモンと言うとした口をつぐみ「あとレモンケーキをくれ」と言った。

窓際の席へ腰掛ける。目覚めたばかりの街の景色を少しだけ眺めてからコーヒーを飲む。最初の何口かはブラックで飲み、それから砂糖を入れて飲む。その味に慣れてきたら最後にミルクを入れて味わう。やはりなんら品のない味だった。
レモンケーキをフォークでつつきながら、手帳を開いた。そこには事細かに（食事をする時間や休憩する時間はもちろんのことトイレへと行く時間まで書いてある。その時間になれば彼は出したくなくても用を足す。逆にいえば出したくても出さないのだ）ミミズが這ったような字で書かれている。
今日は二件。ややこしそうなのと簡単に終わりそうなの。夕食の時間には家へ戻れるだろう。晩御飯には鶏肉とピーマン、玉ねぎを買ってきてある。それらをブラックペッパーで炒めて赤ワインと一緒に堪能するつもりだ。

腕時計を見るとあと十六秒で仕事場へと向かわなければならなかった。慌ててコーヒーカップと皿を片付け、店外へと出た。

一件目はここから歩いて五分ほどの所にある。向かいながら煙草を吸った。コーヒーショップで吸う暇がなかったからだ。メンソー

ルの香りがコーヒーで満たされていた口あるいは鼻腔に滑らかにそして気持ちよく入っていく。じっくりと味わってから吐き出す。白い息に混じって煙がまるで霊魂のように抜けていく。

渋埼は黒のトレンチコートに黒のズボン、そして靴も黒の革靴を履いていた。遠くから見るとそれは一つの大きな影に見えたし、人々の悪がその一箇所だけに固まっているかのようにも見えた。彼が歩く度にその大きな影もしくは悪の塊が揺れた。あるいは街の中に突如現れた何故のブラックホール。ブラックホールは人々を飲み込むわけでも脅威をもたらすわけでもないが、それでも近付けば吸い込まれそうな、何か恐ろしいことが起きるのではないかと思わせるような存在感を出している。

顔は整っていて、何処かの国のちょっとばかり名の知れた彫刻家が、次の仕事が入るまでの間に暇潰しに彫り上げた決して価値があるとは思えないが、かといって安物ともいえない彫刻のような、そんな顔だ。鼻は天に向かって緩やかなカーブを描きながら伸び、その鼻を際立たせるかのように小さな口がある。

そして彼の特徴的な部分。鋭い眼光。獲物を詮索するかのようなあるいは睨み殺してしまうのではないかというほど鋭く恐ろしい目。黒目が大きく白目がほとんど見えない。虎のような目でもあったし鷲の目のようでもあった。あらゆる肉食動物の目であるとも言えた。

さほど大きくないそして何十年も前からあるようなビルの前で立ち止まる。

昇りきったばかりの熱い太陽の光を浴びているはずなのに、目の前のビルはその光を吸収し中へ押し込め、代わりに真夜中のひっそりとした闇を放出しているように見えた。それほど淀んでいたし古びていた。

三階建てのようで、それぞれの階には窓が見える。一階には不動産屋の看板が、二階にはテナント募集中の張り紙が、そして渋埼がこれから向かう三階には古本屋の看板が掛けられている。

エレベーターに乗り三階のボタンを押す。腰の悪い老人が椅子か

ら立ち上がるかのように、エレベーターはゆっくりと上昇していく。扉が開くと正面に短い廊下があり、突き当たりに『桑野書店』と書かれたドアがある。

渋埼は小さなそれでいて深い溜め息を一つ吐くとそのドアへ向かって歩き出す。時計を見ると八時五分二秒。時間ぴったりだ。

ドアを開けるとかびの臭いと異常なくらいの埃が鼻と目を攻撃してきて、渋埼は思わず顔をしかめた。咳とくしゃみを何度かして、ポケットから黒い色のハンカチを取り出し鼻水を拭いた後ようやく店内を見回す。

二本の本棚がこちらを向いた状態で横に並んでいる。その本棚の中には色あせた本が今にも飛び出さんばかりにぎっしりと並べられていて、それは渋埼に窮屈で息苦しい満員電車を思い出させた。無理矢理押し込められた本は、朝のラッシュのすし詰め状態の人々に似ている。

二本の本棚の後ろにもそれぞれ本棚が置いてある。合計で四本の本棚だった。それらを消えかけた蛍光ランプが照らし、それと同時にまるで雪のような埃を浮かび上がらせていた。

床にも本棚に収まりきらなかったのだろう、本が何冊も重ねて置いてある。枕に使えそうな高さに積み上げられたものから、ジェンガのようにちょっと間違えば崩れ落ちてしまいそうなほど積み上がったものもある。歩こうとするのだがただでさえ狭い店内にその本は邪魔で、重ねてあった本を何回か倒してしまった。

本棚を抜けるとそこには木製のかなり使い古された、というかもう使い物にならないくらい老朽化した机がある。やはりその机の上にも無数の本が重ねて置いてある。その机の前で椅子に座っている初老の男。白いシャツに赤いベストを着ている。少しだけ剥げた白髪混じりの髪。かなり年齢を重ねてはいるが、若い頃に何か運動をやっていたのだろうか、随分とがっしりした体付きをしている。辞書のように厚い本をまるで生きる意味を見出すかのように、必死に読んでいる。

渋埼の顔を見て「なんか用？」と低くて聞き取りにくい声で聞いた。男はこの場所に相応しい人物に思えた。いや、この埃とかびだらけの部屋が男を見るからに根暗な雰囲気に仕立て上げたのかもしれない。

「君には交渉する権限そして断る権限がる。もちろんその交渉は成立しない場合もあるしその断る権限もまったく無駄になってしまう場合もある。それはまず理解していただきたい」

渋埼はなんの意味もなさない参考書をなんの感情も込めずにただ淡々と読み上げるようにそう言った。

「何を言ってんだ？　冷やかしなら帰ってくれ」

男はそう言うと再び本に目を向ける。

「私の名前は渋埼光一郎。依頼を受けてここへやってきた」

渋埼がやはりなんの感情もまた抑揚もない声でそう言うと、男は眉間に皺を寄せまるで異物を見るかのような目で渋埼を見た。全身黒尽くめの渋埼は見ようによっては異物なのかもしれない。

「あんた頭がおかしいのか。追い出すぞ。私は誰にも何の依頼もしてはない」

「桑野幸平だな？」

「なんで俺の名前を知ってる？」

「私は警察でもなければ役所の人間でもない。私は……」

渋埼はそこで一旦言葉を切ると、自分という人間を再確認するかのようにあるいはこのような能力を持って生まれてきた自分を恨むかのように深く長く深呼吸をする。

そして「私は、君の夢を処刑しにきた、夢処刑人だ」と言った。

時が止まってしまったかのように、空気が移動するのをやめてしまったかのように重苦しい沈黙。しかし相変わらず埃は宙を舞っていたし、渋埼の腕時計は正確に時を刻んでいた。

「何を言っているのかさっぱり分からん。夢処刑人？　ふざけるのもほどほどにしろ」

桑野は一瞬だけ呆気に取られていたが、すぐに眉間に皺を寄せた。

渋埼が言う。
「お前が毎晩、悩まされている夢があるだろ？　ほら、あのお前が解決できなかった事件の夢だよ」
　その言葉を聞いた桑野幸平はしばらく瞬きもせずに渋埼を見つめていた。ゆっくりと唾を飲み込み、鼓膜の中へと入ってきた言葉を心の中で反芻する。口に入れたなんだか分からない物をゆっくりと舌で確認しながら噛み砕くかのように、あるいは聞き慣れない数式を何度も復唱するかのように。
そして何かを察したのかゆっくりと本を閉じると静かに立ち上がった。ふたたび唾を飲み込み、拳を固く握り締める。全てを物語るかのように一筋の汗が頬を伝う。
「なんでそのことを知っているんだ？」
　桑野幸平は喉奥から声を絞り出すようにそう言った。渋埼が答える。
「夢の中で私に出会ったはずだ。あるいは君は私が目の前に現れた時点で薄々察していたんじゃないのか？　夢の中の男がやって来たと。自分の悪夢を取り払ってくれるのだと」
　渋埼は両手を広げその黒ずくめの服装を桑野に見せびらかすように、あるいは夢の中の男と重ね合わせようとするかのようにくるりと一回転する。
「君が夢の中で出会った男はこの私だ。私は君に依頼されたからその通りに君の所へやってきたんだ」
　桑野は目を閉じ、昨夜の夢の中の出来事を思い出そうとした。毎日、同じ夢を見てきた。正確にいえば刑事を辞職したあの日から見るようになった。
人々に夢を見せる映写機が何処かにあって、その映写機がなにかの誤作動で（それはフィルムの痛みであったり、レンズの汚れだったりするのだ）自分にだけいつも同じ夢を見せている。他の者は毎日違う夢を見ているのに、自分にだけ繰り返し同じフィルムを流し、映写技師はそれにまったく気付かず、しかしフィルムを回す手が止

まることはない。そんな風に思えるほどいつも同じシチュエーション、同じ登場人物、同じ会話、そして同じところで目が覚める。頭の中で夢に出てくる人々の声が一言一句刻まれ、そしてそれはいつしか悪夢として桑野を苦しめた。

「そうだ、私は夢ではシルクハットを被っていた。もちろん色はブラックだ。そうだろ？」

渋埼は顎に手を当て桑野の様子を伺う。時計を見ると五分が過ぎていた。早く交渉に入らなくてはこの後の計画が狂ってしまう。

「意味が分からない、帰ってくれ」

桑野は震える声でそう言った。渋埼は肩をすくめ眉を吊り上げる。

「単刀直入に言う。君の悪夢を私が取り払ってやる」

渋埼はこれ以上時間を無駄に過ごしたくない思いと、時間に追われてしまっている自分に苛立ちを感じていた。そして仕方なくそう言った。

桑野はもう一度目を閉じる。そんな馬鹿な話があるものかと自分に言い聞かせながらも、昨夜夢の中に出てきた男の言葉が気になっていた。いつも見る夢。しかし昨夜の夢は少しだけ違っていた。

桑野は夢の中で紺色の背広を着て、赤のネクタイを首に巻いていた。胸のポケットには警察手帳。ポケットにはシャッポと手錠。そして少しだけ若かった。それでも今と同じように顔に紋章のような深い皺があったし、声もどこか疲れていた。

目の前には女性の遺体。仰向けに倒れている。真っ白なワンピースを着ている。そのワンピースの白を首から流れる赤い血が汚し、それはなにか貴重な芸術作品のようにも思えた。喉元には女性を死に至らしめた凶器（それはつまりナイフ）が、震え上がるほどの量の血を付着させたまま刺さっている。

それほど広くはない部屋。窓がドアを開けた正面にあって、レースのカーテンが風に揺れている。部屋の隅に子供用のベッドがある。枕元には両手に抱えるくらい大きなウサギのヌイグルミが置いてあ

る。その横に勉強机があり、上にピンクのランドセルが乗っている。小さな箪笥が置いてある。箪笥にはキャラクターのシールやプリクラが貼ってあり、そのうちの数枚かは剥がそうとした形跡があった。フローリングの床には像のキャラクターが描かれたカーペットが敷いてある。そのカーペットの上、ちょうど部屋の中央にその死体はあった。

『もうやめましょうよ。何度目ですか？　家の人も嫌がっているじゃないですか』

不意に後ろから声がする。センター分けした髪、顎がやたら細い顔、垂れ下がった目、流れ出る汗を背広の袖で拭い呆れた表情で桑野を見る。桑野の部下だった。

桑野がまだ証拠が何処かにあるはずだと返すと、部下は顔をしかめ部屋を出て行く。

桑野は床に伏せなにかないかと探し回る。髪の毛一本も見落とすまいと目を凝らす。光るものが視界に入るとじっと睨め付け、それが日の光によるただの見間違いだと気付くと肩を落とす。それを繰り返す。

頭上で声がする。顔を上げると五歳くらいの女の子が立っている。無邪気な笑顔でおじさん遊ぼうと言ってくる。そして桑野の返事を待たないまま箪笥の中から小さな箱を持ってきて、中からおもちゃの宝石やらお金やらを取り出し桑野に自慢げに見せる。桑野は女の子を相手にはせず作業を続ける。女の子はつまらなさそうな顔をして、その宝石やらお金を箱の中へと戻す。

『なにやってるの沙織ちゃん。こっちへ来なさい』

ドアが開き、険しい表情をした老婆が現れる。そして女の子の手を引っ張る。桑野のことを冷めた目で見下ろしていた。老婆は女の子と共に部屋を出て行く。

桑野の作業は止まらない。更に身を伏せ、その姿は床と一体化してしまうのではと思うほど密着している。大量の汗が頬をあるいは脇を伝っていく。目に入ってくるのはやはりカーペットの上を浮遊す

るわずかな埃だけ。
　そこで場面が一転する。しかし場所はやはり同じ部屋。違うのは目の前に倒れていた死体がそこに立っているということ。真っ白なワンピースに真っ黒な長い髪の女性は、死体としてそこには存在せず、まだ恐らくは殺される前の生存していた状態でそこに存在している。
女性は窓の外を眺めている。長いまつげが特徴的で、瞳は遠くの誰かを待っているかのように切なげで、桑野はその表情に一瞬だけ息を呑む。その顔はどこか先程の女の子に似ている。女性は窓から離れ、部屋をやはり切なげな表情で見回す。
誰かが部屋の中へ入ってくる。女性は頬を緩め相手を歓迎する。桑野の目には、その相手は影として映る。人の形をしているのに姿ましてや表情も読み取れない影。
影は女性へと歩み寄る。桑野は激しい声で逃げろと言うのだが、女性はそれを無視して影の方へと近付く。桑野の声は女性へと届くはずもないのだ。そこでの桑野はただの傍観者。ただ事実を事実として受け止めるだけのあるいはその事実を捻じ曲げてはならない存在なのだ。
影がなにか床に落としたのだろうか、気付いた女性が身を屈めそれを拾おうとする。その瞬間、影からナイフが伸び女性の喉下に突き刺す。女性は一瞬、なにが起きたのだろうと疑問の顔をした後、すぐに自分の喉にナイフが刺さっていることに気付く。声を上げようとするのだが、もちろんナイフのせいでそれは発せられることはない。
桑野はその一連の出来事が起きている間、何度も手を伸ばそうとした。何度も声を上げた。何度も影を取り押さえようとした。桑野は全身が恐怖と怒りで震えるのを感じながら、何もすることの出来なかった自分を悔やみ泣き濡れていた。
　そしてまた場面が変わる。死体の横でやはり桑野は証拠がないかと床を這いずり回っている。

『もう何も見付かるわけがないわ』
声がする。しかしそれは部下の声ではない。女の声。部屋を見回すが声の主は見付からない。
『いいかげんあきらめたら』
声は死体から発せられていた。桑野は耳を疑う。
仰向けに倒れていた死体が起き上がり桑野を切なげな目で見つめる。喉元からは大量の血を流している。しかしその発せられる声は美しく、血など出ていないかのようだった。そしてなにもかも遅いのだといった様子でかぶりを振ると、桑野がそうしていたように床を這いずり近付いてくる。そしてその青白い顔が桑野の目の前にくる。生前の面影はなく、紫色の唇、痩せこけた頬、枯れたまつげ、そして喉元から流れ出る血はその青白い顔のせいもあってかやけに綺麗にそして鮮明に赤く光っていた。
『もう遅いわ』
死体は桑野の耳元でそう言うと唇を吊り上げた。

そこでいつも目が覚める。全身は滝に打たれたかのようにぐっしょりと濡れ、高度の熱を帯びているはずなのに指先が震え、激しい喉の渇きに襲われ、涙が頬を伝い、そして現実に戻ってきたのだと自覚したところでようやく安堵の溜め息を付く。
そうやって何年も見続け、苦しんできた夢だったのだが、昨夜は少しだけ違っていた。目が覚める瞬間（死体が笑うあの瞬間）いつもなら叫び声あるいはうめき声を上げて起きるはずなのに、目が覚めなかった。実際、昨夜も桑野は叫び声を上げていた。映像が数秒真っ暗になり、次の瞬間、桑野は赤い絨毯の上に立っていた。
そしてそこは空の上だった。雲が眼下に見え、見惚れてしまうほど視界は真っ青で、風一つなく、思わず伸びをしたくなるほどだった。その上を赤い絨毯が果てしなく伸びている。振り返ってみてもやはり絨毯が伸びている。この空という世界を一周しているのではないかと思った。

絨毯は浮かび、桑野はその上に立ち、そして目の前には真っ黒な身なりをした男が立っていた。空の青と絨毯の赤と男の黒が妙なコントラストだった。しかしそれはあるべき形としてそこに存在しているのだと思った。空は青として、絨毯は赤として、もちろん男も黒として。

『苦しいか』

男は言った。桑野はその言わんとする意味がすぐに理解できたので、深くそして心から頷いて見せた。

『そうか。それならばお前の悪夢を取り払ってやろう』

男は被っていた黒のシルクハットを取りそう言った。そして深々とお辞儀をする。

『明日お前の元へと行く』

そこで目が覚めた。いつものように汗や涙あるいは手の震えがなかった。その代わりなんとも言いようのない憂鬱で落ち着かない気分があった。

ある元刑事の悪夢２

「さっきも言ったように君には交渉する権利も断る権利もある。私の話が信じられないのならそれでいい。この依頼を断ってもらってけっこうだ。あるいは君が仕事を依頼した場合、どの程度、夢を取り払っていいのかもしくはある部分をピンポイントで取り払って欲しいのか、そういう交渉をすることができる。そのことに関して私は最善の努力をするつもりだ。しかしかなりの労力と集中力を要することもあってか、難しいことではある。あるいは上手くいかないことだってある。それは前もって理解していただきたい。私からは以上だ。やるかやらないかは君が決めてくれ」

そこで渋埼は言葉を切り、一つくしゃみをする。そして「それと、やるかやらないかは、あと四分三十二秒で決めてもらいたい。それ以降は一切なにも受け付けない。ちなみになんの返事もない場合、わたしはやらないと判断する」

それから渋埼は腕時計をじっと見やり、確実に時を刻む針を目で追い掛け、鼻へと進入してくる埃をハンカチで防ぎ、相手の返事を待った。

桑野は何も言わなかった。迷っているのかあるいは渋埼の言葉をまだ疑っているのか、眉間に皺を寄せ、渋埼を睨み付け、口を一文字に結び、伝う汗を拭おうともせず、立ったまま身動きをしない。

そうやって二分ほどした経過した頃、桑野が言った。

「それは本当なのか？」

「というと？」

「私の夢を取り払ってくれるのか？」

「ああ、もちろんだ。そのために私はここへ来ている」

渋埼は時計を見たまま応える。あと一分五十二秒。こんなくだらない仕事などさっさと終わらせて、家に帰って昨夜録画しておいたワールドプロレスリングを見て、その芸術的なエンターテイメント

ショーに酔いしれて、村上春樹の『スプートニクの恋人』を読み（もう三回も読み返している）熱いシャワーを浴びて少しだけ早いがベッドの中で休みたかった。
そのためには、夕食を堪能する時間も含めて夕方の五時四十二分までに仕事を終わらせる必要があった。他人の夢になど実際は興味もなければ、救ってやろうという気もない。
しかし人の夢を救うことが彼の仕事だった。牧師が教えを説くことにいいかげんうんざりするように、役所の人間が書類に判子を押すことになんのやりがいも感じないように、渋埼もまた自分の仕事にうんざりし、やりがいも感じていなかった。
「質問がある」
桑野が言った。
「なんだ？」
「夢……は、どうやって取り払うのだ？」
「正確に言うと取り払うのではない。夢というのはそもそも見る人間の欲望だったり、しがらみだったり、憎悪だったり、様々な思いからなるものなんだ。禁煙を始めた奴が夢で煙草を吸う夢を見るというだろ？　つまりはそういうことだ。煙草を吸いたいという思いが夢の中で欲望となって出てくる。私はその欲望であったり憎悪だったりするものを満たしてやるまたは解消してやる役目なのだ。もちろん夢の中でだ。君の場合、君が定年前に解決できなかった事件（イコール現在も見続ける悪夢）を私が代わりに解決してやるのだ」
「夢の中で？」
「ああ」
「そんなことできるのか？」
「まあ、はっきり言うとできるかどうかはやってみなくちゃ分からん。君が見ている夢の情報を頼りに事件を解決するのだからな。まあ、安心しろ。過去にこういうケースがいくつもあったがどれもうまくいった。というか、失敗はありえない」
「うまくいく？」

「ああ、うまくいく」
「そんなわけがない」
桑野は机を思いっきり手で叩きそう叫んだ。老朽化した机が不穏な音をたてて激しく揺れる。机の表面を漂っていた埃がばね仕掛けの人形のように一気に飛び上がる。そしてその埃はしばらく宙をさ迷い、渋埼の鼻あるいは口へと侵入し、渋埼はまた咳とくしゃみをする。
「そんな簡単な事件ではなかった。あれは私が刑事として扱う最後の事件だった。それと同時に始めて屈辱と無念を感じる事件でもあった。長年刑事をやってきた私が解決できなかったというのに、お前ごときに解決できるわけがない」
興奮する桑野を冷ややかな目で渋埼は見つめ、だだをこねる子供を諭すようにゆっくりとした口調で返す。
「いいか？　私は夢を処刑し続けてきたプロフェッショナルだ。君がどういう刑事だったのかは知らんし、君が悪夢を見るほど苦しんだ事件がどれほど困難だったのかも知らん。しかし私に処刑できない夢など存在しない。それが例え眠るのが嫌になるほどの悪夢だったとしてもだ」
そこで時計を見る。あと三十四秒。タイムリミットが迫っている。
「ほら、時間がないぞ。やるのかやらないのか？」
唇が震え、滴る汗はいよいよ大粒に変わり、やはり桑野は渋埼の顔をじっと見る。
「私の夢に昨夜出てきた時、何故その時にやってくれなかったんだ？」
桑野が言う。渋埼はすぐに答える。
「ああ、その質問はよく受ける。私は人の夢の中に入れる。しかし言うなれば私は夢を見る者にとっては異物なのだ。夢の中に存在してはならない者なのだ。胃の中に異物が入ってきたら、人は吐き出そうとするだろ？　あれと一緒だ。人は自分の夢から私という異物を排除しようとする。たとえ夢に入れたとしても、もって数分しか

入っていることができない。だから相手の許可が必要なのだ。相手の許可があれば、夢の中にいくらでもいられるし、もちろん夢の中の物を触ったりまたは壊したりもできる」
そして渋埼があと十秒と言ったところで何かが吹っ切れたように、あるいは覚悟が決まったかのように桑野は椅子に腰を下ろすと「やれ」と低く重みのある声で言った。
「それは実行していいということだな？」
「ああ、そうだ」
渋埼は時計から目を離すと、唇を吊り上げた。その顔があの悪夢に出てくる死体の笑い方に似ていて、桑野は唾を飲み込む。
「どうやればいい？」
「ああ、簡単だ。別に眠る必要もない。ただ私が夢の中に入るということは、君を強制的に夢の中へ連れ込むということだ。意識はなくなる。そして意識がなくなる代わりに君自身も君の夢の中へ入ることになる」
「私自信が夢の中へ？」
「なにも心配いらない。痛くも痒くもない。なんせ君が生み出した想像上のものなんだからな。さあ、目をつぶりいつも見ている悪夢のことを頭に思い浮かべてくれ。そうすれば私はすんなりと中へ入っていける」
桑野は言われた通りに目を閉じ悪夢を想像する。額に渋埼の指先が触れる。
「一つ言い忘れたことがある。目を閉じたまま聞いていてくれ。私は夢とは別に君の記憶の中を探る場合がある。この場合も特に痛みなどはないが、少しだけ息苦しく感じるかもしれない。しかし悪夢を処刑するために必要なことだから理解してもらいたい」
「ああ、分かった。いいから早くやってくれ」
半信半疑だった。突然現れた得体の知れない男に夢を取り払ってやると言われて、はいそうですかよろしくお願いしますと簡単に信じるわけもなかった。しかし、そんな不気味な男の存在以上に、自

分が見る悪夢は苦しくそして絶望的で、あるいはこのままこの得体の知れない人物に殺されてもいいとさえ思っていた。悪夢をもう見ずにいられるのならどんなに楽だろう、どんなに幸せだろうと考えると、心の奥底で反抗する己の理性を振り払い、身を任せるしかなかったのだ。

「それでは始める」

その声が耳に届くか届かないかのうちに意識が遠くなる。それはまるで麻酔を打たれたかのように安らかで、もしかすると本当にこのまま死んでしまうのではないかと思った。

ある元刑事の悪夢３

憂鬱だった。あの様子ならきっと断るだろうと思っていたからだ。まさかやるはめになるとは。渋埼は今日何度目か分からない溜め息を吐くと、彼、桑野の夢の中へと入っていく。

視界が埃まみれの部屋から一瞬にして、桑野が見ていた夢の部屋へと移動する。

窓がドアを開けた正面にあり、レースのカーテンが風に揺れている。それは爽やかとは言い難い生ぬるい風だった。部屋の隅に子供用のベッドがある。枕元には両手に抱えるくらい大きなウサギのヌイグルミが置いてある。その横に勉強机があり、上にピンクのランドセルが乗っている。小さな筆筒が置いてある。筆筒にはキャラクターのシールやプリクラが貼ってあり、そのうちの数枚かは剥がそうとした形跡があった。フローリングの床には像のキャラクターが描かれたカーペットが敷いてある。そのカーペットの上、ちょうど部屋の中央にその死体はあった。

渋埼は身を屈め死体を観察する。喉元にナイフが突き刺さっている。あまり深くは突き刺さっていないが、それでも充分に女性を死に至らしめるだけの深さはあった。

一通り見渡してみたがそれらしき証拠はない。まあ、桑野があれだけ必死に探し回っていたのだから、証拠があればとっくに見付かっているはずなのだが。

ところでここは見た所、子供部屋のようだ。恐らく桑野に遊んでくれと懇願したあの女の子の部屋だろう。随分とさっぱりした部屋だ。確かに子供の部屋だとは見て分かるし、机の上にあるピンクのランドセルから女の子の部屋なのだということも分かる。しかしもっと子供らしさあるいは女の子らしさがあってもいいのではないか。人形なんかが床に散らばっていて、やりかけの宿題が机の上で散乱している。そんな小学生の女の子ならではの風景がこの部屋にはな

い。まるで何処かのモデルルームに来ているみたいだ。唯一、女の子らしいのはベッドにあるウサギのヌイグルミくらいなものだ。

渋埼は夢を移動してみることにする。今度は女性が殺されてしまうあの場面だ。実際に桑野は殺人が行われる瞬間を見てはいないのだろうが、捜査に関するあらゆる証言や情報が彼の頭の中で混濁し、夢としてあのような悲惨な光景を生み出してしまったのだろう。しかし彼は数多くの情報を元に殺人の瞬間を頭の中で作り出したのだと考えられる。その殺人の瞬間はまったくその通りではないが、かなり実際に近い殺人の瞬間であると捉えなくてはならない。つまり事件を解決する上で充分に役立つ情報のはずだった。

夢はちょうど女性が犯人を出迎える瞬間から始まっていた。女性は微笑み、影（イコール犯人）に近付いていく。そして女性は何故だか急に身を屈める。腰を折りまるで床に落ちた何かを拾おうとしているようだ。渋埼も同じように腰を落とし、女性の視線を確かめた。やはり女性は下を向いている。カーペットを見てみたが何かが落ちているようではない。それでは何故、女性は下を見ているのか？　思考を巡らせていると、いきなり目の前にナイフが突き出る。それは渋埼の目の前であたかも現実のように光り、次の瞬間には女性の首元に突き刺さっていた。

身を硬直させる女性。自分の首に突きたてられたナイフを驚きと恐怖が混ざり合った目で見ている。突き刺さった首元からは血がゆっくりと広がっていく。そして女性は身を屈めた状態のままカーペットへ崩れ落ちる。

ここまで見て分からないことがいくつかあった。一つ、女性は殺される瞬間、何を拾おうとしていたのか。女性の首元を確実に狙うためにつまり確実に息の根を止めるために、犯人はわざと何かを落とし女性に拾わせようとした。その瞬間を犯人は狙ってナイフを突き立てた。充分に考えられるがまだ推測の域を出ていないのは確かだ。

そして二つ目が、何故、女性は子供部屋で殺されたのか。つまり女性は子供部屋で何をしていたのか。子供の帰りを待っていたとも考えられるし、部屋の片付けをしていたとも考えられる。それを知っていたあるいは部屋に入っていく姿を目撃した犯人が女性を殺しに行った。

とにかく桑野の夢だけでは情報が足りない。彼の記憶に入らなくてはならなかった。

時計を見ると夢に入ってから六分三十四秒が経過していた。夢の中でもやはり時は進む。人が眠りに就いている間も時は進むように人が見る夢も同じように進む。夢を見るということは当然ながら現実と一緒で常に進行形であり、止まることもましてや逆戻りすることもない。

少女の部屋を出ると目の前に桑野が立っていた。紺色の背広に赤のネクタイ。額に汗を浮かべその唇は若干だが紫色になっている。血走った目に微かに震える体。怯えているあるいは戸惑っているような様子だった。無理もなかった。自分がいつも見ている夢の中に自分が入っているのだから。それは例えるなら自分の体の中を自分の手でかき回し、中にある肝臓や胃や腸を取り出すかのような気持ちの悪さ。そしてそれはレントゲンに写った自身の骨を見るかのような違和感と不思議な気持ちにも似ている。

「高校の頃、柔道をやっていた」

桑野は乾いた唇を舌で濡らし、唾を一つ飲み込んでからそう言った。それはからからに乾いた雑巾を無理矢理絞り上げ、なんとか一滴の水を落としたかのような声だった。

「練習中に何度か受身に失敗して脳震盪を起こしたことがある。今、その時のなんとも言えない頭の痛みと、ふらつきに似た感覚があるんだ。そう、たとえるならこれは……」

「夢の中にいるよう」

渋埼は指をぱちんと桑野の目の前で鳴らし、そう挟んだ。

「まさしくここは夢の中だ。どうだ？　心地良いだろ？」

「心地良いわけがない。早く夢を取り除いてくれ」
「ああ、私も早く終わらせたい。そのために今から君の記憶を探る。君も一緒に着いて来てもらいたい。心配しなくても大丈夫だ、夢と記憶を連動させて、事件に関する記憶だけを探るようにする」
そして次の瞬間に場面は一転し、二人は別の部屋に立っていた。桑野はしばらく周りを見渡してから覚えのあるその風景にしばし驚きの表情をした後、事件の記憶を鮮明に思い出してしまったのか非常に具合が悪そうに指で眉間を強く押さえた。あるいは記憶を探ったせいで多少の息苦しさを感じているのかもしれない。
どうやらここはダイニングキッチンのようだった。四人用のテーブルが部屋の中央にある。レースのテーブルクロスが引かれ、その上に花を活けた花瓶が置いてある。活けてあるのが何の種類の花なのか渋埼には分からなかったが、とても綺麗な色だと思った。造花ではないかと思うほど鮮やかな黄色だ。
テーブルには椅子が四つ。綺麗に整理されたシンクには水垢どころか、使った形跡すらない。しかしフックに下がったフライパンはわずかに汚れていたし、その横に下がっているフライ返しも焦げた後つまり使った形跡がある。水道の蛇口はしっかりと閉められている。捻ってみようとしたが、水一滴落としてはならないといったように随分と強く閉まっていた。
椅子に腰掛ける者が四人。一人はあの少女。一人は桑野を睨み付けた老婆。薄くなった頭にパーマを当てている。一人は丸眼鏡を掛けた中年の男。四十代半ばといったところだろうか、頬がこけていて目が大きいその顔はまるで骸骨のようだった。一人は黒髪をポニーテールに結んだ若い女。歳は二十代後半。美しくはないが、それなりの容姿をしている。二重で綺麗な瞳をしているのに、その下にまるでうじ虫が侵食しているかのような大きな隈がある。そのせいで綺麗な瞳は台無しなっている。うつむいているせいもあるのだろうか、まるで広い草原にぽっかりと空いた暗い穴のように特徴的だった。あるいはその隈さえなければ随分と男にもてるかもしれない。

薄いピンクのエプロンを羽織、その下に黄色のセーターを着ている。
「こいつらが容疑者ということだな？」
渋埼が桑野にそう質問すると、しばしの沈黙があってから「ああ」と返ってくる。
「男は殺された女の夫。少女はその二人の子供。老婆の方は夫か妻の母親だろう。分からないのがこの若い女だ」
渋埼はそう言いながら若い女の顔を覗き込む。よくよく見てもやはり隈が非常に目立つ。そして唇は若干紫色をしている。全体的にとても健康とは言えない顔だ。
「そいつは家政婦としてこの家に雇われているんだ」
「なるほど。それでは事件の概要を説明してくれないか。君の記憶から引っ張り出すよりも君自身から聞いたほうが早い」
「なあ、本当にこの事件を解決できるのか？」
「もちろんだ。夢の中で私に不可能は無い」
「さっきも言ったが私、いや警察が必死になって捜査しても何の証拠も見付からなかった事件なんだぞ？　それをあんた一人の力でどうこうできると思っているのか？」
渋埼は桑野を睨み付け、人差し指を突き立てる。その突き立つ指を桑野へと向ける。
「また同じことを言わせる気か？　夢の中において私という存在は神そのものといっていい。つまり今この瞬間、私に不可能なことはない、いや、不可能という言葉自体が夢の中において相応しいものではない。とにかくそこまで信用がないのなら、ここで中断してもいいのだぞ？　それに君は私のことを疑っていたが、実際こうやって夢の中へきているじゃないか。ここまできて今更そんなくだらんことを言われても困る。なあ、私を信用していいとは思わないか」
桑野は返す言葉が見付からず「すまなかった。君の好きなようにやってくれ」と言った。
「分かればよろしい。さあ、事件について話してくれ。ああ、言っとくが余計なことは話さないでくれ。簡潔に頼む。なにせ時間がな

い」

渋埼がそう言うと桑野は容疑者達を一人ずつまるで今から取調べするみたいに見回した後、ゆっくりとやはり枯れた声で話し出した。

ある元刑事の悪夢４

「事件が起きたのは六年前の七月だった。まだ夏はこれからだというのに、やけに蒸し暑くてイライラしていたのを覚えてる。殺されたのはこの家に住む笹野啓子。二階にある啓子の娘、沙織の部屋で死体となって発見される。見たとは思うが、首をナイフで一突きにされている。争った形跡はなかった。ただ膝が少しだけ折れ曲がった状態で倒れていたため、殺される直前まで身を屈めていたと思われる。何か探し物をしていたのか、あるいは何かを拾おうとしていたのかは分からないが、犯人は下を向いている無防備な被疑者をナイフで突き刺したんだ。」

桑野はそこで息を一つ吐く。思い出したくない事件の記憶を自分の記憶の中で喋っているというなんとも奇妙な感覚。頭のてっぺんをくり抜かれて、手で脳みそをぐりぐりと押さえつけられているかのような気分だった。

「最初に死体を発見したのは？」

渋埼が先を促す。桑野が苦しんでいる様子を横目で見ながら、自分は涼しい顔でテーブルの上へ腰掛けている。

「家政婦の女だ。清水洋子。キッチンで晩御飯の支度をしていたら、二階の部屋で何か倒れる音がしたので様子を見に行ったところ、死体を発見した。慌てて一階で仕事をしていた夫、笹野浩太を呼びに行った。そして清水は警察と救急車の手配をするため電話があるキッチンへ向かい、夫の浩太は二階へ行く。浩太が二階へ行くのと同じ頃に当時、小学一年生だった娘の沙織が学校から帰って来る。異変を察知した沙織は父親の浩太と一緒に二階へ上がろうとするが、もちろん浩太はそれを止めた。ここで浩太の母親、静代が駆けつけたので、沙織を静代に任せて自分は二階へと上がった」

「その静代はずっと何をしていたんだ？」

「庭の方で花に水をやっていたそうだ。妙に騒がしいので何事かと

思って様子を見にきたらしい」
「父親は？」
「家政婦が呼びに来るまで、一階にある書斎にこもって会議で使う書類をまとめていたそうだ」
　渋埼は天井を仰ぎながら桑野の話を聞き、時折質問をした。それはたいていしばらく話を聞いていればそのうち出てくるような内容ばかりの質問だった。よほど時間が無いのか、渋埼は先へ先へと話を持っていこうとする。どうしてそんなに急ぐのかと桑野は問いたかったが、余計な事を喋ると怒り出しそうなのでやめた。
「笹野啓子は、なんで子供部屋で殺されたんだ？」
「子供の帰りを待っていたらしい。その日はちょうどテストの答案が返ってくるので、早く点数を見たかったのだろう。テストが返ってくる日はいつも子供部屋で子供、沙織の帰りを待っていたそうだ。啓子は教育熱心だったらしく、習い事はもちろん家庭教師も沙織につけていた。一切の娯楽は許さず、ただひたすらに勉強だけをさせていた」
　どうりで子供らしさのない部屋だと渋埼は思った。ゲームはもちろんのこと、人形で遊ぶことも漫画を読むことも許されなかったのだろう。少しだけ沙織という子供が可哀想に思った。
　渋埼は椅子に腰掛けた幼い少女を見る。母親にとても似ている。特に目元がそっくりで、まるでそのまま母親のものをコピーしたのではないかと思うほどだ。まだ小学校に上がったばかりなのだろうが、とても整った美しい顔だ。
「そんな生活、子供は息が詰まるな」
　渋埼が言った。「何もこんなに小さい頃から勉強を熱心にやらせなくてもいいとは思うが。それよりも、とても綺麗な顔をしているから、どこかの芸能事務所に入れたほうがいいんじゃないか」
「やらされている本人はさほど苦ではなかったようだったな。取調べの時も勉強が大好きと言っていたし、母親が死んだからもう習い事はできなくなるかもと泣いていたからな。世の中にはそういう変

わった子供もいるんだ。実際かなり頭は良かったようだな。母親に見せるつもりだったテストの答案もなかなかいい点数だったし、他の答案も見せてもらったが、どれも百点ばかりで驚いた」
「夫はどこかの社長か？」
「社長ではない。それよりは少し地位の低い役職だ。まあいずれは社長になるのだろうが、それでもなかなかの財産家だ。聞いての通り、子供を数々の習い事に通わせる金もあったし、家政婦を雇う金もあった。車は仕事用と家庭用にそれぞれ一台ずつ。その他に夫のコレクションとして数台持っている車もある。もちろん乗ることはない。家はそんなに大きくないのにガレージだけはやたらとばかでかかったのを覚えてるよ。金が有り余って困ってますといった感じだったな」
「凶器は何処にあった物だ？」
「一階のキッチンにあった物だ。ガスコンロの下の引き出しに仕舞ってあったものだ。もちろん誰でも出し入れは出来る」
「部屋は密室だったのか？」
少し間がある。桑野は言いたくないのか餌を求めて水面に浮かぶ金魚のように口を開けたり閉めたりしていた。まるで自分の墓まで持って行きたい秘密を大勢の前で話さなければならないといった深刻な顔。
「密室だったんだな？」
渋埼がもう一度同じ質問をすると桑野はゆっくりと頷きながら「ああ。部屋には鍵が掛かっていたそうだ。部屋の鍵を持っているのは殺された啓子と家政婦の清水だけだった。とは言え、窓は開いていたそうだが」と言った。
「おい、お前」
渋埼が鋭い声を上げる。
「きちんと事件の話をしろ。確かに簡潔に話をしろとはいったが、大事な部分を抜かしてもらっちゃ困る。お前、本当に夢を取り払いたいのか？」

「もちろんだ。ただ、なんというか、密室だということを言ってしまえば、そこで何もかもが分からないまま終わってしまうのではないかと思って。言わなかったんじゃないんだ、ただ話そうとした瞬間に頭の中でその事実だけがどこか違う場所へ飛ばされたように無くなっていたんだ」

「まあ、いい。それでは、家政婦が死体を発見するまでの過程が変わってくるな」

「ああ。二階の部屋で何か倒れる音を聞いた家政婦は、様子を見に二階へと上がった。これも言っていなかったが、二階といってもあるのは子供部屋が一つと、トイレ、あとは物置部屋と空き部屋なんだ。家政婦は最初に物置部屋を確認した。何かが倒れた様子はなかった。空き部屋の方は滅多に誰も入らなかったし、普段は鍵が掛かっているからまさかここで音はしていないだろうと、その空き部屋は確認しなかった。残った子供部屋をノックしてみた。家政婦は啓子が娘の帰りを待っていることを知っていたからな。そしてノブを回してみたが開かなかった。声を掛けてみたが返事はない。それを繰り返しているうちになにかおかしいと思った家政婦は持っていた鍵を使って部屋を開けた。そこで死体を発見し、慌てて夫の浩太を呼びに言った。ちなみにもう一つの鍵は母親のつまり死体のポケットに入っていた」

桑野は一気にそう喋ると、首に巻かれた赤のネクタイを少しだけ緩めた。夢の中というのはこういう所なのだろうか、妙に息苦しい。それに我慢できないほどではないのだが蒸し暑い。首元と脇の下に微量の汗が滲み出ている。

「ところでこの女、足に怪我をしているな」

渋埼はそう言いながら家政婦の女、清水洋子の足元を指差す。椅子から伸びたその足の先端、指の部分が包帯で覆われている。人差し指、中指、薬指の三本が包帯によって一箇所に集められ、何重にも巻かれている。

「洗い物をしているときに誤って食器を落としてしまったらしい」

桑野も家政婦の足先を見ている。
「それはいつのことだ？」
渋埼がそう尋ねると桑野はやはり家政婦の足先を見たまま「事件が起きるほんの前のことだったそうだ」と言った。
ここで沈黙。テーブルに座る笹野家の人々は皆、虚ろな目をしている。それはなんの感情も持たない蝋人形を思わせた。
「もちろん最初にこの家政婦を疑ったよな？」
それからしばらくして渋埼はそう桑野に尋ねた。ゆっくりと頷く桑野。頷いた時、首筋が軋み声を上げた。痛みを感じたので音が鳴った首筋をゆっくりと揉んだ。そしてたとえ夢の中でも痛みは感じるものなんだと思った。そういえば暑さも感じている。
「ああ、疑ったどころか私は家政婦を重要参考人として署まで連れていったよ。しかし証拠不十分ですぐに釈放された。家政婦が怪しいとあらゆる物事がそう言っているのに、それを裏付けるものがなかったんだ」桑野は言った。
「凶器は家政婦がいたキッチンにあり、閉まっていた子供部屋の鍵は家政婦が持っていて、最初に死体を発見したのは家政婦であり、足に怪我をしている。殺された啓子が身を屈めていた理由も説明がつく。怪我をしている家政婦の足を見るために目を近づけようとすれば、おのずとああいう体制になる」渋埼は確かめるように言った。
そして渋埼はテーブルから立ち上がり大きな伸びをする。それから腰を左右に振り、屈伸をする。まるでこれから激しい運動をするかのように、それは随分と丁寧に行われた。
渋埼は桑野よりはまだ若いから、軋む音はどこを動かしても聞こえてこない。関節は正確に曲がり、腰はしっかりと上半身を支えている。その変わりに渋埼の口からきつそうな声が漏れる。
「しかしこの事件はそんな簡単なものではなかった」
渋埼がそう言うと桑野はしばらく宙を仰いだ後、まるで誰かに無理矢理そうさせられているかのように、ぎこちない様子で首をまた縦に振った。

「その空き部屋が気になるな。見てみたい」
渋埼がそういい終わらないうちに場面は一転する。そこは窓があるだけの随分と殺風景な場所だった。
「この家は生活感のない部屋ばかりだな」
「ああ、なにせ殺された啓子がかなりの綺麗好きだったらしく、常に部屋は片付いていないと気がすまない性格だったらしい。汚れはもちろんのこと整理整頓は常にしてあり埃一つあっただけでも大騒ぎしていたようだ。清水もよく啓子に呼び出されてここが汚いだとか、ここをもっと掃除しろ、だとかを言われうんざりしていたそうだ。その異常なまでのこだわりは家族の者も付いていけないほどだった」
「なるほど。家政婦の女は動機も充分だったというわけか」
「ああ」
余計な物が何もない子供部屋。まるで使った跡がないキッチン。言われてみればどの部屋も完璧なまでに片付いていた。それは啓子によるものだったのだ。
「家政婦の女はかなり気が弱い性格で、啓子があまりにも毎日うるさく言うものだから随分と怯えていたようだな。そんな家政婦の清水を夫の浩太はかばっていたりしていたようだ。これは静代から聞いたんだが」桑野がそう言うと渋埼は「もしかすると夫の浩太と家政婦は密かに出来ていたのかもな。それを妻に悟られたので殺すことにした」と言ったのだが、どうもしっくりこないようで、その考えを振り払うかのように頭を拳で三度軽く殴った。

ある元刑事の悪夢５

また場面は一転し、今度は夫の書斎に二人は立っていた。
桑野はあまりにも唐突に場所が変わるものだから、目をきょろきょろさせ、落ち着きの無い子供のように体を左右に揺らしていた。まるで大きな箱の中に入れられてぐるぐると回されているかのような感覚だった。
今までの部屋とは違って、夫の書斎はわりといろいろな物が混雑していて、それは渋埼に始めてこの家には本当に人が住んでいるのだと認識させた。
大人二人が横に並んで両手を広げたくらいの大きなディスクがあり、その上には辞書だったり書類だったり本だったりが乱雑に置かれている。吸殻が山盛りになった灰皿もある。ディスクの真ん中にはパソコンが置いてある。床にもディスクに置ききらなかった書類や本が所狭と置いてある。そのなんの脈絡もなく置かれた本の山が桑野のいた古本屋を連想させた。
ディスクの後ろには窓があり、ベージュ色のカーテンが掛かっている。
「ここは散らかっているんだな」
部屋を見回しながら渋埼が言った。桑野も同じように部屋を見回しながら応える。
「この部屋は夫の浩太だけが使っていたからな。それに仕事場としても使っていたらしいから、啓子はあまりうるさく言わなかったのだろう」
渋埼は何を思ったのか窓の方へ歩み寄りカーテンを引いた。部屋の中に光りが差し込む。その光りはまるで現実への誘いであるかのように渋埼、桑野の目を刺激する。渋埼は窓を開けて空を見上げる。ちょうど真上に子供部屋の窓が見えた。
「もちろんその可能性も考えた」

そう言った桑野の声は、渋埼の考えを読み取ったかのように落ち着いていた。
「啓子を殺して子供部屋の窓から飛び降りて、この書斎の窓から入る。さほど高くはないから飛び降りても問題はない。まあ、下手すれば捻挫くらいはするだろうが。そしてそんなことが出来るのは夫の浩太しかいない。しかしこれも証拠がない。あくまでそれは可能性でしかなかった」
渋埼は唸り声を小さく漏らし腕組みをした。それは考えるためというよりも、お手上げといった様子に見えた。
「ほら、だから言ったんだ。この事件は簡単なものではないと」
さげすむような表情で桑野はそう言うと、腕組みをしたまま動こうとしない渋埼に向かって何度か咳払いをした。もういいから早く夢から出してくれという意味だろう。しかし渋埼はそんな桑野の様子に気付いているのかいないのか、やはり腕組みをしたまま天井を見上げ思考を巡らせていた。
「そんなところで考えても何も出てこないと思うぞ」
渋埼がいつまでも動こうとしないので、いいかげんうんざりしてきた桑野はそう言った。やはり自分の悪夢は消えないのだ。一生この悪夢に悩まされなければならないのだ。落胆はなかった。あるのは最初から期待などせず、さっさとこの目の前の男を店から追い出しておけばよかったという後悔だけ。それだけだった。
そしてもう何度目か分からない場面転換がある。場所は先程のダイニングキッチン。四人の笹野家の人間。やはりその目は誰もが虚ろ。しかしその中に何かに怯えるかのような恐怖が含まれているのが分かる。それはこの中に、もしかしたら啓子を殺した犯人がいるのではないかという怯えと恐怖そして混乱だった。
「まだ続ける気か？」
桑野がそう尋ねると渋埼は当然といった様子で言った。
「もちろんだ。私に任せておけば悪夢を見ることも悩まされることもなくなる。しかし君が私を信用していないのも分かるぞ。私はま

だ君の期待に応えられていないし、それどころかこれといった糸口も見つけていない。ただ場所を移動し質問し、ある程度の予測をしてはみるが全て否定され、最終的には腕を組んで何もしなくなった。あるいは最初から期待などしていなかったのか、期待はしていなかったがとりあえず取り払ってもらえるのなら任せるだけ任せようと思ったのか、それは分からないが」

桑野は何の返事もしない。渋埼は続ける。

「しかし私がやっていることは大事なことなのだ。たとえそれが後から思い返せば無駄なことだったとしてもだ。何故だか分かるか？

夢というのはそういうものだからだ。夢というものは人間が作り出す心の廃棄物と言ってもいい。やましいことや腹の立つことあるいは傷付いたことがあればそれは心の中で真っ黒な、見るからに邪悪な塊となる。それは廃棄物として外へ吐き出さなくてはならない。それではどうやって吐き出すか？　ストレス発散という言葉があるだろ？　心の中の廃棄物を一掃するために人は自然とそして生きるための義務のように趣味や娯楽によってそれを外へと吐きだしているんだよ。それは夢も一緒なんだ。娯楽や趣味ではどうにも処理し切れなかった廃棄物は、今度は体が勝手に処理してくれるようになる。夢を見せることによって、それを外へと吐き出す。分かるか？つまり君が悩まされ続けているこの夢は、普段ではどうしようもない邪悪の塊を体が夢を見せることによって吐き出そうとしているんだ。しかし君の場合それはあまりにも大きく果てのない作業なんだ。そこで私が吐き出す塊をもっと小さくしてやろうとしているのだ。つまり私が行っていることは決して意味のないことでも無駄なことでもない。君は気付いてはいないだろうが、私が何か行動をする度に廃棄物はどんどん小さくなっている」

そこで渋埼は少し喋り過ぎたことに気付き、慌てて時計を見た。短くそして苛立ちのこもった舌打ちを一つ。そして別に言わなくてもいいことをわざわざ言ってしまった自分に怒りを覚えた。しかしこうやっている間も時間は過ぎていくばかりで、眉間に皺を寄せ、

そして思考を切り替えるつもりで、テーブルの周りに腰掛ける四人の容疑者達を見た。
「この母親の静代はずっと庭にいたのか？」
桑野は最初それが自分に問われた言葉だと思わず、ましてや急に話が変わったのでしばらく黙ったままでいたが、ここには渋埼と自分しかいないのだということに気付くと、少し慌てた様子で「ああ、庭にいたようだ」と返した。
「家政婦の目を盗んで二階の啓子がいる部屋に行き、先程のように窓から飛び降りて部屋を出て、まあこの場合、高齢だからかなりのリスクがあるし、うまく降り立ったとしてもすぐ側の部屋にいた浩太に気付かれるかもしれないが、そのまま何事もなかったかのように庭に戻ることもできたわけだ」
渋埼がそう言うと桑野は濁った表情のまま返す。
「また落胆するかもしれないが、その可能性ももちろん考えた。しかしやはりと言うべきか、これも証拠がない」
「落胆はしていないよ。そう返ってくるのは分かっていた。しかしどうしても理解できないことがある。これだけ証拠を残さない犯人だ。あるいは上手くやれば外部犯の仕業にすることも出来た。しかしあえてと言うべきなのか、そこに意図があるとするのなら何のためなのか、わざわざ家の中にあったナイフを使いわざわざ密室にして、まるで内部の犯行だと犯人がそう言っているみたいだ。いや、もしかすると犯人はそう言いたいのかもしれない」
「何故？」
「我々に何かを伝えようとしているのかもしれない。しかしそれが何なのかが分からない」
渋埼は四人の容疑者を改めて眺め、顎に手をやり唸るような声を上げたかと思うと、今度はテーブルの周りをぐるぐると周りはじめた。
桑野はくるくると周る渋埼を目で追い掛けてはいたが、何も声を掛けなかったし、先程のように早く夢から出してくれという催促もし

なかった。短い時間ではあるが彼、渋埼と話したり行動を共にしたりしてみて、彼には鋭い観察力と推理力があり、もしかするとほつれた糸を解くようにあるいは放られた数式を暗算で解くように、意図も簡単にこの事件を解決してくれるかもしれないと桑野は思っていた。それは期待ではなく確信だった。このありえない状況で自分は頭がおかしくなっているのかもしれないし、精神に少なからずの障害が出ているのかもしれなかったが、それでも渋埼に託してみよう、彼に託せば全てが上手くいくという自信があったのだ。

「ここで問題点を整理しよう。問題といってもあまり難しく考えては駄目だ。頭に浮かんだ言葉を自然と口に出すような、そんな簡単な問題点だ」

渋埼は動きを止めそう言った。

「まず一つ。犯人は啓子を殺した後どうやって部屋から出たのか。（この場合、部屋に鍵が掛かっていたという家政婦の証言を信じたうえでの疑問になる）そして二つ目が、犯人は何故こうも分かりやすく内部犯の仕業に見せているのか。かといって外部犯が内部犯に見せかけたとも思えない。それにまだある。いくらそれぞれが別のことをやっていたとはいえ、誰にも気付かれず啓子を殺すことは本当に可能なのだろうか。それに物音を聞いた家政婦が部屋に入ってくるまでそう長い時間はなかったはずだ。そんな短時間で部屋から脱出できたのだろうか」

その渋埼の意見も桑野はやはり黙って聞いていた。渋埼が今言っていることは、もちろん自分も考えた。あらゆる疑問点がまるで落下の予測がつかない隕石のように次から次へと降りかかり、精神に衝撃的なダメージを与える。桑野はそのダメージを存分に味わい、そして屈辱を感じたまま刑事から身を引いたのだ。それは自分の刑事生活いや人生そのものを否定されたような気分だった。それが現在もこうして悪夢として桑野の身を蝕み、悩ませていた。

「君の意見を聞かせてほしい」

頭を抱えていた渋埼が桑野の方を見て言う。

「君が今言ったことは我々も考えた。あらゆる証言がこの事件をより複雑にし、それは奥深さでもあり、その奥深さは底の見えないもしかすると底なしのものにしているのかもしれない。しかし私も改めて事件を振り返ってみたが、君の言ったとおり、これは他の者の目を盗んでできるようなことじゃない。あるいは共犯という可能性もある。先程も言ったようにそんなに広くはない家だから、誰かが目立った行動をすれば必ず他の誰かが気付くはずなんだ。しかし共犯であれば話は違ってくる。問題は誰と誰が手を取り合っているかということだ」

渋埼は思ったよりも的確な答えが返ってきたので満足したのか、少しだけ頬を緩ませ指をパチンと鳴らした。そしてパズルの最後の一ピースをはめた時のような爽快感に満ちた表情をつくった。

「ああ、この事件は共犯の可能性がある。しかし共犯という説は合っているようで合っていないかもな」

「どういうことだ？」

「つまり共犯という言い方はあまりこの場合、相応しくないということだ」

渋埼は何かを悟ったかのようにその鋭い眼を輝かせた。それはまさしく獲物を狙う獣のようだ。

「相応しくない？」

桑野は確かに聞こえた渋埼の言葉をもう一度聞きたくてそう言った。

「ああ。共犯と言えば共犯なのだが、この場合ここにいる全員が犯人と言ったほうがいいだろう。全員が共謀して妻の啓子を殺したんだ」

その渋埼の言葉に桑野はしばらく口を開けたまま、何も喋ることも何かを考えることもできなかった。それはあまりに唐突で衝撃的でうまく桑野の頭が取り入れようとしなかった。いや、実は桑野も少しは考えていたことではあった。しかし、それはあまりにも突拍子な考えだった。だから知らないうちに、頭の中から消し去ってい

た考えだった。
「まさかそんなこと」
「むしろそう考えなければおかしいのだよ。ちなみに分かっているとは思うが、さすがにその全員という中に子供は含まれていないぞ？」
「当たり前だ。あんな小さな子供に母親が殺せるわけがない」
桑野は渋埼の衝撃的で大胆な推理をそのまま鵜呑みにすることはできなかった。しかし冷静に考えてみると、あるいはそうなのかもしれないとも思った。実はしっかりと目にしていたものなのだが、それを無理に見ようとしていなかっただけなのかもしれない。誰かが、ちゃんとこれを見るんだと言って桑野の頭をしっかりと持ち、指でその場所を指し示してくれなければ桑野は決して見ようとはしなかった。

ある元刑事の悪夢６

うまく頭が回らない。足元がおぼつかない。歯ががたがたと震える。呼吸がうまくできず鼻の穴を何度も広げる。目を閉じる。ゆっくりと呼吸を整える。それを何度も繰り返す。乾いた唇に舌を這わせ潤いを与える。

それでどうにか落ち着いた桑野は、渋埼を見たのだが、渋埼はまるで擦りガラス越しに見ているかのようにぼやけていて、それは自分が錯覚しているのか、本当に渋埼がガラス越しにいるのか分からず、徐々に視界が狭まりついにはここが上なのか下なのかあるいは立っているのか座っているのかも分からない状態になった。

「落ち着け。お前が心を乱せばお前の記憶であるこの空間が歪んでしまう」

遠くから渋埼の声がする。それは桑野の耳の中で反響し、決して忘れてはならない言葉であるかのように脳裏に深く刻まれていく。しっかりしなくてはと自分に言い聞かすのだが、体は宙を漂ったまま。

気が付くと見覚えのある場所に立っていた。それはあの殺人現場でもダイニングキッチンでもなかった。

ここは……俺の家？

そこには桑野の妻がいた。二人の娘と息子がいた。娘が抱いているのは、二歳になる孫。全員が笑顔でこちらを見ている。それぞれテーブルの前に座りそのテーブルには妻がこしらえた料理が並んでいる。桑野が好きなひじきを絡ませた肉団子もある。息子が席を立ち桑野を促す。さあ、一緒にご飯食べよう。今夜は久し振りに酒でも交わそうじゃないか。

桑野は頷きテーブルに着く。娘が、それじゃあ全員揃ったみたいだから食べましょうかと言うと、いただきますという心に染み渡るそれでいて胸の奥にあるドロドロした憎悪を綺麗に掬い取ってくれる

かのような気持ちのいい声が次から次へと聞こえてくる。孫もまだつたないがいただきますと言っている。桑野も倣っていただきますと言うとおかずに手を伸ばす。おのおのが好きな物を食べ好きなことを喋った。
まるで風が運ぶ春の便りを全身で受け止めるかのようなあたたかな気持ちだった。娘の冗談に桑野も思わず頬を緩ます。息子の手酌を黙って受け取る。孫の頬を撫でてやる。あとで一緒に遊ぼうと誘うと嬉しそうに手を叩いた。
「現実逃避したか……」
背後から声がする。その声は桑野の緩んでいた精神を一瞬にして強張らせた。振り向きたくないしかし振り向かなければならない。そんな葛藤をする桑野に背後からの声。
「よくあることだ。受け入れたくないあるいは信じたくない事実を知った人間は、自分の一番落ち着く場所、空間に逃げようとする。君の場合これは家族みたいだな？」
振り向くとこの温かい空間にはまるで場違いな全身真っ黒な男が立っていた。そしてその人物が渋埼だと分かった瞬間、今までそこにいた家族が波にさらわれる砂山のように足元からゆっくりと消えていく。慌てて妻を、息子を、娘を、孫を抱き寄せようとしたが、感じるはずの肌の温もりがなく、それどころか雲を掴むかのようになんの手応えもなく、そして家族全員が桑野の手の中で消えていった。
「家族を何処へやった？」
立ち上がり渋埼に吠える。しかし渋埼は涼しい顔で、肩をすくめている。
「別に何処へもやっていないよ。ここは君の記憶の中なんだから、むしろ自分自身に尋ねてみてはどうかね？　まあ、そんなことはどうでもいい。早く元の場所へ戻るぞ」
状況が飲み込めない桑野はやはり怒りを露にしたまま「一体これはどうなっているんだ？」と言った。

「だから言っただろ？　君は私の推理に驚いて思わずあの場所から逃げてしまったんだ。大丈夫、誰にでもあることだ」
「私は決して逃げてなどいない。ただあまりにも突拍子のない推理に戸惑っただけだ。それなのに……」
「だから誰にでもあることだと言っているだろ。人は恐怖を感じた時、鳥肌が立ったり息を呑んだりあるいは足がすくんだりする。それと同じことだ。自然現象と言っていいかもしれないな。さあ、早く戻るぞ。さっきのダイニングキッチンを思い浮かべてくれ」
目の前で家族が煙のように消えたことに桑野はまだショックを受けていた。これは現実ではないのだ、実際に私の家族は傷一つ負ってはいないと自分に言い聞かすのだが、それでも本当にいなくなってしまったかのような喪失感が体中を支配し、どうにも落ち着かない気分だった。しかし渋埼が催促の目をこちらに向けているので、頷かないわけにはいかず、目を閉じ先程の場所を思い浮かべる。
「今度は落ち着いて聞いてくれよ」
渋埼の声がしたので目を開けると、元のダイニングキッチンに戻っていた。そこにはやはり冷え切った台所がありテーブルがあり、それら以上に容疑者達の冷めた表情がある。
「混乱されると私はどうにもできなくなるからな。いいか？」
渋埼がそう言うと、少しの間を置いてから桑野が頷く。
「よし。それでは続きを話そう。夫の浩太、その母親、そして家政婦の三人が共謀して啓子を殺したんだ。子供のテストが返ってくる日に啓子が子供部屋に行くことを知っていた三人はそこを狙った。直接殺したのは家政婦の清水だろうな。足の指に包帯を巻いて、啓子がいる子供部屋に向かう。啓子が足に気を取られている隙を狙ってナイフをつき立てる。その後、恐らくは外部から誰かが侵入して（物取りにでも見せかけるつもりだったのか）啓子を殺したことにするつもりだったんだろう。家にたまたま啓子しかいなかったことにしてな。しかし、ここで問題が起きた。啓子を殺してさあこれからが本番だと思った矢先に、思いのほか娘の沙織が早く帰宅してし

まった。早くテストを母親に見せようと駆け足で帰って来たのか、そのせいで全ての段取りがめちゃくちゃになってしまった。玄関に立つ娘を見た三人の心境は凄まじいものだったんじゃないか、頭が文字通り真っ白になったに違いない。そしてまさかまだ幼い娘に自分達が殺したと言えるはずもなく、仕方なしに急遽計画を変更した。即興で口車を合わせたせたんだろうな」

桑野は怒りとも取れる虚脱とも取れるなんとも複雑な表情で渋埼の話しを聞いていた。また混乱してしまわぬよう注意しながら彼の言葉を聞いているのだが、今にも精神のたかが外れて今度は目の前の空間が歪むどころか、消滅してしまうのではないかと思った。

「どうだ私の推理は？　当たっているとは思わないか？」

満足そうに渋埼は、それでもやはり時間を気にしている。腕時計に目をやりながら桑野の同意を得ようと「当たっているだろう？」と何度も聞き、桑野が応えないでいるとイライラしながら秒針を指でなぞっていく。

「証拠はないんだろ？」

桑野がそう尋ねると渋埼は目を時計から桑野に移し「そんなものはいらない」

「いらない？　証拠がなければどうしようもないじゃないか。それではお前の言ったことはただの空想でしかない」

「私は刑事でもなければ探偵でもない。そして今、私達が向き合っているのは現実に起きてはいたが、すっかり埃を被ってしまった事件なんだ。君の本屋にあるあの古本のように誰の目にもふれないそれでも埃だけは積もっていくようなそんな事件だ。私が目的としているのはそんな未解決の事件を解決することではなく、君の満足を得られるかどうか、そして私が夢というものを処刑できるかどうかなんだ。君がこれですっきりしてくれれば私も仕事が終えられる。しかしそのように現実と夢とをごちゃ混ぜにしてもらっては困る。この夢の世界では証拠なんて物は必要ない。そんなに欲しければ君が想像して作ればいい。なんせ夢なんだからそんなこと簡単にでき

る。しかし言っておくが私の推理は正しいぞ。ただ君が言う証拠という物がないだけ。ただそれだけのことだ」
「満足などできるわけがない。それでは何故わざわざ子供部屋で殺す必要があったのだ。共謀してやるならいくらでもチャンスはあったはずなんだ。なにも子供部屋に行くまで待っていなくてもいいだろ」
声を荒げる桑野。その顔はかつての刑事の頃に戻りつつあった。桑野の目は悪を見逃さない鋭い（まるで渋埼の目のような）ものになり、額には触れれば破裂するのではないかと思うほど血管が浮かび上がっている。その血管を伝って汗がゆっくりと流れていく。
「その堅苦しい考え方、夢の中ではやめてくれるか？　言っちゃ悪いがそんな性格だからいつまでも同じ悪夢を見続けるんだぞ。いいか？　頭をからっぽにするんだ。何も考えるな、何かを突き詰めようとするな、何かにこだわるな。それが君の悪夢を取り払う一番の方法なんだ。子供部屋で殺したのはいろいろとその後の作業に都合がよかったんだよ。特に意味は無い。ほらこれで満足か？」
渋埼は肩をすくめながらそう言った。
桑野は後悔していた。渋埼の鋭さを見込んでいたのだが、どうも見当違いだったようだ。確かに的を射ていたかもしれない渋埼の推理は、だんだんと雑なものになり最後には自分が納得してすっきりすることで全て丸く収まると言い出した。怒りを通り越して呆れ返ってしまいそうだ。
桑野はもう何も言い返すことはしなくなり、ただ露骨に不満の滲んだ顔で渋埼を見ていた。
しかし渋埼はそんな桑野の表情など気にも止めず、満足気に口笛を吹きつつ煙草を取り出しそれを吸った。そして腕時計を見る。
「納得したなら、そろそろ悪夢の除去に入るぞ」
渋埼は煙草をくわえたままそう言った。それでも納得した表情を作らない桑野を見て溜め息と一緒に煙草の煙を吐き、「無理に納得するんだよ。そうしなければ一生苦しみ続けるのは自分だぞ？　君

が納得するかあるいは気持ちをすっきりさせてくれなければ夢は取り払えない。これまでの私の苦労が無駄になってしまうんだ」
「長年刑事として苦労してきた私をこの事件は屈辱し、あざ笑った。簡単に忘れるわけがないだろ」
「なにも忘れろとは言っていない。君の記憶を抹消するわけじゃないんだからな。君の夢を抹消するだけなんだ。なあもっと楽に考えてくれ。悪夢を取り払うきっかけだと思ってくれればいい。そのことについていえば、君を侮辱したりあざ笑うということにはならないだろ？　君の生き方を否定しようとも思わんし、さげすむつもりもない。むしろ君を救ってやりたいがこそのことなんだ。分かってくれ」
　渋埼は必死だった。終了の時間までもう何分もない。ここで彼が納得しなければ諦めてこの夢から出て行ってしまおうと思った。その後、彼がどうなろうと再び悪夢に悩まされようと知ったことではないし、だからといって自分が罪悪感を持つこともない。私は最大限の努力と最善を依頼人に尽くした。しかし今回はうまくいかなかった。ただそれだけのことだ。失敗したのではない。ただ彼、桑野との話し合いがこじれてしまいうまくいかなかっただけなのだ。
しかし桑野は少しだけ考えてから、ゆっくりと「分かった」と言った。
「確かに私は深く考えすぎていたようだ。久しぶりに現場をこの目で見て、刑事の頃の気持ちが戻ってきていただけなのかもしれない。なにも今更この事件を解決しようなどとは思ってはいないんだ。むしろ君には感謝しなくてはならん。こんな老いぼれが見る夢なんかに付き合ってくれたのだからな」
「それが私の仕事だ。そして私のやるべきことでもあるのだ」
「ああ、そうだったな。さあこの夢いや悪夢を取り払ってくれ」
　その言葉を聞いた渋埼は頷くとテーブルの上で煙草をもみ消し、首を何度か振って、屈伸と背伸びを二回ずつやって、それから夢の中に入った時と同様に、桑野の額に自分の人差し指を乗せた。

「それでは君の夢を処刑する。全ての夢を取り払ってかまわないな？」
「ああ、全て無くしてくれ」
「分かった。それでは目を閉じ何度か深呼吸をしてくれ。次に目を開ける時、君は現実の世界へと戻っているはずだ。それと同時に悪夢も、もう二度と見なくなっている。今夜からゆっくりとした夜を過ごせるぞ」
「本当に見なくなるんだな？」
「もちろんだ。ただ君の事件に対する執念が再び燃え上がったりしてしまえば、それが蓄積されまた見てしまうとも限らん。その時はまた取り払うしかないのだが」
「いや、もう事件のことは思い出さないことにするよ。君が記憶も処刑できるんだったらどれだけいいだろうとさえ思っている。私には可愛い孫がいて好きだった古本屋で働けているという幸せもある。それだけで充分だ」

ある元刑事の悪夢7

そして目を閉じようとした桑野だったが、半ばほどで瞼を持ち上げ、
「ちょっと最後に現場を見ておきたいのだが」と言った。
「現場？　何を今更。もう無駄な詮索などせんぞ」
「ああ、分かってる。ただもう二度と見れなくなるのがなんだか惜しいような気がして。最後にもう一度だけいいだろ？」
渋い顔をした渋埼だったが、それでも桑野がしつこく懇願してくるので仕方なく応じることにする。
場面は子供部屋。死体はやはりそこにあり、家具もベッドももちろんそのまま。それらを一つ一つ丁寧に眺めていく桑野。開け放たれた窓から外を眺め、机の引き出しを開け中の物を取り出し眺め、箪笥を開け、ベッドのシーツをなぞり、そして最後に死体に目を向ける。そして夢の中でそうしたいたように四つん這いになり床をじっくりと眺める。
その様子を呆れながら見ていた渋埼は、ふと勉強机の上にあるものに気を止めた。それは桑野が机の引き出しから取り出し眺めてそのままにしていた数枚の紙切れだった。沙織の学校での答案用紙だった。桑野が言った通りどれも満点ばかりだった。しかしその中に一枚だけ九十八点と記されたテストがあった。よく見ると国語のテストらしく漢字の送り仮名の間違いでペケになっているところがあった。そして渋埼はある重大な事実に突き当たる。
「おい、啓子が殺されたのは何月何日だったか覚えているか？」
渋埼は声を荒上げそう尋ねる。
渋埼の頭の中で桑野の言葉が蘇る。
『母親に見せるつもりだったテストの答案もなかなかいい点数だったし、他の答案も見せてもらったが、どれも百点ばかりで驚いた』
母親に見せるはずだったテストは確かにいい点数だったのだが、満点ではなかったのだ。だから桑野はあのような言い方をした。

空気を切り裂くような渋埼の声に桑野は一瞬体を強張らせたが「たしか七月四日だったな。それがどうかしたのか？」と返した。
「もしかしてこの九十八点と書かれたテストは、啓子に見せるつもりだったテストではないのか？」
「ああ、それだな。おいどうしたんだ？」
渋埼はそのテストを桑野に手渡す。渡されたテスト用紙を見た桑野だったが、意味が分からないといった様子で首を捻る。すかさず渋埼が「日付だ。テストが行われた日がその一番上に書いてあるだろ」と言った。
確かにテストの名前を記入する蘭の上のほうに日付が書かれている。そこには六月十五日と記されていた。
再び桑野の言葉が蘇る。
『啓子はかなり教育熱心だったらしく、習い事はもちろん家庭教師も娘につけていた。一切の娯楽は許さず、ただ勉強だけをさせていたらしい』
テストが行われ、返されるまでに二週間以上も間があるのだ。そんなに問題数の多いテストには見えないし、ましてや小学一年生に出すテストなのだからたかが知れている。桑野も気付いたようだった。そしてまさかそんなことはありえないといった顔になる。
「二週間もテストを返さないわけがない」
渋埼はゆっくりとまるで何か難しい書物を読み上げるように言った。そしてやはり同じ口調で続ける。
「テストは母親に見せる日（つまり母親が殺される日）よりもずっと前に返されていたんだ。いつも満点ばかりのテストがちょっとした凡ミスで九十八点だった。沙織は深く落ち込みそしてどうしようか悩んだはずだ」
「それでも九十八点だぞ？　決して悪い点数ではない」
「お前も言っていたじゃないか。母親は神経質で教育熱心で。もちろん今回のテストも満点を期待して待っていたはずなんだ。沙織はそのテストをなかなか見せることはできず、しかしそう長くテスト

を見せないと不審に思われる。もしかすると学校に電話をして確認するかもしれない。そして怒られることを恐れた沙織は母親を殺すことを思いつく」
「話が飛躍しすぎだぞ。それだけで殺すなんておかしい。ましてや小学校に上がったばかりの子供なんだ」
「異常なほど綺麗好きな母親だったんだ。教育に対してもそれくらい異常だったと考えてもいいんじゃないか。何事にも神経質でちょっとの汚れも見逃さない母親が、勉強に対しては甘いとは思えない。ちょっとした凡ミスだったのだが、沙織にとってみればそれは重大なミスであり母親にしてみればあり得ないミスなんだ。沙織は母親を殺す前日、キッチンにあるナイフを盗み、そして母親に明日テストが返ってくると言う。テストが返ってくる日は自分の部屋で自分の帰りを待っていると知っていたからな。そして当日。こっそり家に帰って来た沙織は自分の部屋に行く。そして恐らくは……」
　空間が歪む。桑野が混乱している。
しかし渋埼は話を続ける。
「啓子が身を屈めていたのは、子供の目線になるためだったんだ。子供と話すとき大人は誰もが、そうする。そうやって身を屈めてきたところを沙織は隠し持っていたナイフで首元を突き刺す」
　部屋にある全ての物が一体となる。そしてその一体となった物が今度は螺旋状になって桑野の目に映る。もちろん渋埼もその一部となっている。しかし渋埼の声だけはやけに鮮明に届く。足がふらつき立っていられなくなる。すると今度は膝を就いた床がまるで蟻地獄のように大きな穴を作り、吸い込まれそうになる。渋埼に助けてと懇願しようとするのだが、声が出ない。声の出し方を忘れてしまったかのように、喉が震えることをしない。歯をこじ開けられそのまま固定されたかのようだ。
そこでようやく渋埼が近付いてくる気配があって、手を掴まれる。蟻地獄から引きずり出され、そして耳元で「私の話はまだ終わっていないぞ」とやけに落ち着いた声でそう囁かれる。それは真相に辿

り着いた喜びというよりも、また面倒なものを見つけてしまったという後悔の声だった。
頭を何度か小突かれようやく空間の歪みがなくなった。しかし部屋は一つの物体としてではなく、いくつかの固体が集合したかのような妙な見え方をしている。まだ混乱は完全に解けてはいない。口内がねっとりと粘つき、そのせいで声がうまく出せない。しかし声を出さなくてはならなかった。
「ちょっと待て。だとしたら部屋には鍵が掛かっていたいたんだ。どうやってその部屋から抜け出したんだ」
　それはうまく声になっているのかどうか分からなかったが、渋埼には伝わったようですぐに返事がある。
「私もそれを考えていたところだ。君の知恵を借りたいんだ。だから気を確かに持ってくれ」
　桑野は何度か頭を振り、込み上げてくる吐き気を抑え、ゆっくりとまるで赤子が始めて一人で立ち上がるときのように地を両手で触り、そこに何の歪みも空間もないことを確認した。鼻を使って息を吸い、その吸い込んだ空気を口から吐き出す。その桑野の行動が合図であったかのように、部屋が元の状態に戻る。
ようやく落ち着きを取り戻した桑野は、「突拍子もないことを言わないでくれるか。ようやく私も事件に見切りを付けようとしていたんだ」
「見つけてしまったものは仕方ない。小さな疑問はやがて大きな疑問へと変わり、そしてそれが解けたとき本当の真相が見えてくる。時間がないが、まあ仕方ない。さあ、部屋をもう一度調べるぞ」
　そう言った渋埼は部屋を改めて見回す。窓から逃げたとは考えにくく（いくらさほど高くないとはいえ子供が飛び降りるには危険すぎる）かといって抜け道がどこかにあるようなかんじではない。もちろん隠れるような場所もない。
もしかすると沙織に協力した人物がいるのかもしれない。悩んでいた沙織が気の知れた相手に相談し、協力を求めた可能性もある。だ

としたらそれは誰か。沙織と仲が良かったといえば夢の中にも出てきた祖母の静代はどうだろう。それとも家政婦かもしれない。
そんなことを考えながら桑野を見る。しかし桑野はある一点を見つめたまま固まっていた。まだ頭が混乱しているのかと思い、「おい、しっかりしろ」と声を掛けたがそれでも反応しない。
「おい、お前も手伝え。きっと何かあるはずだ」
渋埼がそう言うのだが、桑野はやはり一点を見つめ、まるでそこに何かがあるみたいにあるいは何かが起きるはずと信じているみたいに瞬きもせず、そして震える声で言った。
「沙織は、もしかすると部屋から出てはいないんじゃないか」
「何を言っているんだ？　頭がおかしくなったか」
「いや、おかしくなってなどいない。冷静だ。むしろ今が一番落ち着いているかもしれない」
「何か分かったのか」
「ああ。沙織はこの部屋にずっといたんだよ。家政婦が入ってきたときも。そして家政婦が死体を発見して出て行った後、自分も同じくして部屋を出た。一階に下りて今帰ってきたことを装うため玄関に立っていた」
疑問が渋埼の中に浮かんでいたが、あえて何も言わなかった。ただその口元を見つめ、次の言葉が出てくるのを待った。それを悟ったかのようにすぐに桑野は続ける。
「沙織は家政婦が気弱な性格だということを利用した。二階で物音がした時まっさきに気付くのは家政婦だ。祖母は玄関とは反対側の庭にいたし、父親は音の届かない奥の部屋にいたからな。死体を発見し、混乱した家政婦が真っ先にすることは、いつも頼りにしている浩太の所へ向かうことだ。沙織は部屋を出て行った家政婦を見届け、自分も一階へと降りていく。ただそれだけなんだ」
「そうだとして沙織は何処に隠れていたんだ？」
桑野はそれに応えず、やはり先程と同じ場所をじっと見つめ、そのまま何も言わなくなった。

渋埼は桑野の視線の先を追ったのだが、そこにはやはり何ら変わりのない風景があるばかり。
しかし、それは動きだした。部屋の隅にある子供用のベッド。その枕元に置かれたウサギのヌイグルミ。そのヌイグルミが意思を持ったかのようにあるいは見えない糸で誰かに操られているかのように突然自ら立ち上がり、ベッドから舞い降りたのだ。そしてこちらへと歩いて来る。二人の目の前で立ち止まる。長い耳に真っ赤な目。ピンク色の生地で作られている。ウサギの頭からナイフが生えてくる。先端が赤く染まった、恐らくは殺人に使われたであろうナイフ。いや、それは生えてきたのではない。中から突き出されたのだ。その突き出たナイフはそのまま縦に切り裂かれる。布を切り裂く音が二人の耳を破壊する。二つに割れるヌイグルミ。そして中からナイフを持った無邪気な笑顔をした女の子が現れる。そして、『おじさん遊ぼう』と屈託のない声でそう言った。
　両手に抱えるくらい大きなヌイグルミ。それはちょうど小学校低学年くらいの子供の大きさ。
彼女は見ていた。家政婦が部屋に入ってくる所を。あらかじめ綿を抜き簡単に着脱できるようにしていたヌイグルミの中で。
彼女はただ身を隠すことだけを考えた。あとのことなど何も考えていない。
彼女は頭が良くしかしやはり子供だった。その発想は子供にしか思い付くことは出来ない。
そして彼女は何もかもをうまくやってみせた。全てが偶然というわけではなかったが、それでも運は彼女に味方した。
　桑野の視界が割れたガラスのようにバラバラになる。
もはや喋ることも考えることも動くことも出来なかった。そしてもうこの悪夢は二度と見なくなるだろうと桑野は思った。

ある元刑事の悪夢７（後書き）

いかがでしたでしょうか？
感想などをぜひお聞かせください。

Ｃｏｌｏｒ～カラー～１

「コーヒーには煙草とジャズが似合う」
マスターがそう言うと渋埼は深く心から頷いた。
「まったくその通りだ。しかし似合うという表現は少し違うかもしれない。煙草とジャズでなければならないと言った方が正しい。マイルスデイヴィスはトランペットではなくてはならないということと同じことだ」
コーヒーの香りを鼻で存分に楽しんだ後、ゆっくりとそれを口の中に入れる。最初は少量だけを入れ、舌先でその繊細さそして味を確かめる。それはワインのテイスティングに似ている。それからまた少しだけ口に入れてそれを喉の奥へと流し込む。煙草を吸いコーヒーの香りを存分に堪能した鼻腔から吐き出す。最後に店内に流れるトランペットの音に耳を傾ける。
「私はこの瞬間、死んでもいいとさえ思う」
コーヒーカップを置き煙草を灰皿に押し付けた渋埼はそう言った。薄明かりの店内に客は渋埼一人だけだった。カウンターに椅子が五脚あるだけの小さな店だったが、センスのいいジャズをいつも流していて時には渋埼の知らないミュージックも聞かせてくれた。そしてなによりもコーヒーが美味かった。特にブレンドは渋埼のお気に入りで、毎日飲んでも飽きるどころかその魅力にどっぷりとはまってしまいそうなくらい奥の深い味だった。毎朝起き抜けのコーヒーを届けに来てくれとマスターに本気で言ったこともある。
「このコーヒーにはあらゆる幸せが含まれているような気がする。それは私を存分に堪能させてくれ、悩み事を解消してくれることはもちろん、これからの人生への道を切り開いてくれているんだ。こんなに素晴らしいコーヒーはここにしかないだろう。そしてこのコーヒー以上に美味いものに私は出会うことはないだろう。それはもしかすると残念なことかもしれないが、しかしその落胆すらも綺麗

に拭い去ってくれる力がこのコーヒーにはある」
　渋埼はその独自の理論を言い終わると、一気にコーヒーを口へ入れた。口の中にしばらくコーヒーを閉じ込め一分ほど転がした後、だいぶ冷めた頃にようやく飲む。渋埼にとってそのコーヒーを飲み込むことは勿体無いという気持ちがあり、それでも込み上げてくる喉奥あるいは胃からの要求に応えないわけにはいかず、惜しみながらもコーヒーを体の中へ入れるのだ。
　マスターがレコードを変える。渋埼が一杯飲み終わるとマスターはいつもそうする。しかし渋埼はその変わったばかりの音を最後まで聞き終えたことはない。途中で腕時計を見て席を立つ。たとえこの後の仕事がなくてもあるいは休日だったとしても、彼には決められた時間というものが存在した。この『珈琲館』に滞在するのは十五分。それより短かったこともないし長かったこともない。一日のスケジュールを組む上で、そしてなるべく『珈琲館』にいられるように考えて時間を調整した結果、その十五分というのが最もベストだった。食事する時間も仕事をする時間も趣味を楽しむ時間も、常にびっしりと書き込まれたスケジュール帳によって渋埼は管理されている。しかし彼は時間に縛り付けられているという気持ちはもっていない。むしろ自分が時間というものを支配しているのだと思っている。時間通りに動くということは無駄を無くすということ。時間を持て余している人間ほど時間に束縛されているのだ。
　そしてやはりこの日も曲の途中で渋埼は席を立つ。黒のトレンチコートに黒のズボン、そして靴も黒の革靴。その全身真っ黒な中で、鋭い眼光だけが光沢のあるものに見える。
「今日も仕事なのかい？」
　マスターがそう尋ねると渋埼は短く「ああ」と返事をする。
「ありがとう。今日も素敵なコーヒーに出会えて嬉しかったよ。それと私のために早くから店を開けてくれて感謝している」
　そう渋埼は残して店を後にした。

今日の一件目はバスに乗って三十分ほどの所にある。しかし渋埼はバスというものが嫌いだった。いやバスに限ったことではなく、あらゆる交通機関が嫌いだった。
たとえばバス停の時刻表に載っている時間にバスが一分も狂わず時刻通りにやって来たのなら、渋埼は何の文句もない。しかし今まで利用した中でただの一度もそういうことはなかった。早く来る分にはまだ許せるのだが、遅れて来るのはどうしても許せなかった。そのことで何度か運転手と言い争いをしたことがあるし、料金を払わなかったこともある。運転手が言うには、客の乗り降りで時間を食い、信号で時間を食い、日や時間帯によっては渋滞に巻き込まれることもある。だから五分くらいの時間の遅れは仕方がないということだった。
それならば時刻表というものを取り払ってしまえばいい。時間通りに動くということがどれだけ大事なことなのかを分かっていない。いや分かろうとしていない。少しの遅れがまるでドミノ倒しのように次から次へと一秒単位で遅れ、最終的に時間から完全に孤立してしまいどうしようもできなくなる。それがどれだけ恐ろしくてあってはならないことなのかを理解していないのだ。今この瞬間も我々の寿命は短くなり、死へと真っ直ぐに何のぶれもなく進んでいる。つまり時間を無駄にするということは自分の死を無駄にしているということなのだ。生きているならば何故もっと計画性をもって動こうとしない、何故もっと有効に時間を使おうとしない、何故時間に遅れることが許されるんだ。
やはりバスは二分遅れでやって来た。運転手は悪びれる様子もなくましてや『お待たせいたしました』の一言もなくただ無言でドアを開け、そしてやはり無言でバスを走らせた。
渋埼はそのバスがやって来るまで何度も時計に目をやり舌打ちをし、これではせっかく堪能したコーヒーの喜びが怒りで掠れてしまうと思い気持ちを落ち着かせようとしたのだが、それでも込み上げてくるものを抑えきれず、煙草を何本も吸った。

車内では数人の客がそれぞれバスでの時間を思い思いに過ごしていた。渋埼のようにバスが遅れていることに対して怒っている者はいない。携帯電話をいじる者、隣同士で話す者、窓の外をぼんやりと眺める者、眠っている者。

渋埼は一番前の席に座り、信号で停車した時にでも文句を運転手に言ってやろうと思ったのが、その運転手の顔を見てやめた。前にも文句を言ったことがある相手でその時は苦い顔をされて、まるで渋埼をたちの悪い酔っ払いのように扱ったのだ。これは言っても無駄だと思い、黙ってバスに揺られることにする。しかしどうにも収まらなかったので、降り際に百九十円の金を叩きつけてやった。

目覚めたばかりの街の景色というのは、物悲しくありそれでいて夜の喧騒をまだ残している。その華やかさを切なさや悲しさが覆い隠してしまっていて、まるでそれは人間の内に秘める心の悩みのように深く、観察しなければ読み取ることができない。しかし何故か気持ちを落ち着かせてくれる。

アーケード内に入ると形の違うしかし同じ顔色をした幾つものシャッターが並んでいた。まるで誰かを閉じ込めているみたいに無機質で冷たくそして重い。もちろんこんな早朝に開いている店などない。渋埼はそれらを見てなんだか世界に自分だけが取り残されたような気分になった。薄暗い道、シャッターの続く道を歩き、そして煙草を吸う。煙がまだ薄明かりアーケードの空に消えていく。時折、人とすれ違う。誰もが疲労に満ちた顔をして前を見て歩く。彼らはきっとひどい悪夢に悩まされているんだと渋埼は思う。それも飛びっきりややこしいあるいはいらつくほど長ったらしい悪夢に違いない。考えただけで憂鬱な気分になった。

しばらく歩くと横断歩道に出る。車の通る気配はないのでそのまま渡る。そして渡った所、コンビニの隣にある五階建てのアパート。華やかな建物の隣に建っているせいか、そのビルは誰もが見過ごしてしまいそうなほど暗く陰湿に見えた。

時計を見ると六時五分。計画より一分遅れ。やはりあのバスのせいだ。
エレベーターに乗り最上階のボタンを押す。降りて右手に進んだ所。蹴り飛ばせばすぐに壊れてしまいそうな木製のドア。そしてインターホン。押してみたが中で鳴っている様子はない。表札には『木本』の文字。木本加奈子。
ドアを叩くとしばらくして中から魚眼レンズでこちらを伺う人の気配があった。
「どちら様ですか？」
酷く震えた声だ。それがドア越しに伝わってきて渋埼は少しだけ笑みを零す。
夢に怯える人間は実におもしろい。渋埼にとってみればまさしく夢のような世界のはずなのに、彼あるいは彼女らは未知の生命体でも出会ったかのように怯え混乱する。夢の中では無抵抗。見ている本人の感情あるいは本能になんの影響も受けず、ただ淡々と進んでいく。たとえばそれが映画の一場面だったとしたなら、目を背けることが出来るのかもしれないが、もちろんそんなことは無理である。だからおもしろい。やはり自分は神なのだと思う。
「木本加奈子だな？　君には交渉する権限そして断る権限がる。もちろんその交渉は成立しない場合もあるしその断る権限もまったく無駄になってしまう場合もある。それはまず理解していただきたい」
ドア越しの相手、木本加奈子は何も言わない。ただ身を震わせているのが気配で分かる。
「私は夢処刑人だ。君の悪夢を処刑しにやって来た。君が悩まされている悪夢を私が取り払ってやる」
渋埼が続けてそう言ったのだがやはり何の返事もない。ドア一枚隔てた所に相手がいるのだけは分かる。こちらの様子を伺っている。
「帰ってください」
しばらくしてから返事があった。先程よりも声は震え、それに加えて混乱もあった。

渋埼は首を左右に五回振り屈伸を三回してから「いいからここを開けろ。君の悪夢はよく知っている。それを私が取り払ってやると言っているんだ。開けないならこのまま帰るぞ。次の依頼者が待っているからな」

そこまで言ったところでようやくドアが開く。静かな早朝のせいで、そのドアの音はひどく大きく聞こえた。まるで調弦されていないギターを力任せに引くような不快な音。

中から顔が出てくる。肩まで伸びた黒髪はなんの手入れもされていないことが一目で分かるほど、ばさばさで汚らしい。狐のような目に厚い唇。こけた頬。まるで墓場から這い出てきた死体のような顔をしている。青白さを通り越してその肌は完全なる青になりつつあった。ブラックライトを当てれば更に青さを増しそうだ。上下ピンクのパジャマを身に付けている。もちろん化粧はしていない。

「あなた誰なの？」

女が言った。詳しく言えば木本加奈子が言った。

「今も言っただろう？私は夢処刑人、渋埼光一郎。君の悪夢を処刑しにやって来たんだ」

「私の夢に出てきた人……？」

木本加奈子は半信半疑でそう尋ねた。

「その通りだ。ここでは私の詮索などなしだ。それと朝早くに来たことに関しては詫びを言う。今日はいつも以上に客が多いのでな、なるべくそれを夕方の五時までに（まだ太陽が昇りきってもいないのに太陽が沈む頃の話をしてもあまりぴんとこないだろうが）終わらせないといけないのだ。そのためには一件あたりの仕事をだいたい平均して二時間前後で片付けないといけない。君のケースの場合は、二時間二分五十七秒で終わらせる、終わらせなければならない。だからさっそくで悪いのだが、やるかやらないか決めてくれ」

渋埼はそれだけ言ってしまうとまるでもう自分のやるべきことはやったという様子で、煙草に火を点けた。

「どういうことか説明していただけませんか？」

木本がそう言うと渋埼は顔をしかめ「私の言ったことが理解できていないのか？　お前の夢を消し去ってやると言っているんだ。これ以上の説明はいらないだろう」
「夢というのは、つまり、私が見ている夢ですよね？」
「ああ、その通りだ。他に誰がいる」
「どうやって消し去ってくれるのですか？」
「お前の夢の中に私が入る。そして何故このような夢を見るのかを探る。そしてその原因を突き止める。ただそれだけだ」
「夢の中に入れるということ？」
「当たり前だろう。げんに君の夢の中に私はいたじゃないか。まさか覚えていないわけじゃないだろう？」
木本加奈子は思い出していた。昨夜見た夢のことを。夢の中だからはっきりとは覚えていないけれど、確かに目の前の男だったような気もする。
夢の中で彼女は真っ白な部屋の中にいた。見渡す限りの白。完璧な白。白のペンキを刷毛で少しのむれもわずかなずれもないように、決められた量で決められた長さだけ塗り、位置を変えてそれを何度も繰り返し作り上げたような完璧な白だ。壁に目をこらして見るとその白に吸い込まれそうになった。
部屋の中には何も無い。ただ白が全体に広がっているだけ。その部屋の中央に彼女は立っている。それほど大きくはない部屋なのだろうが、色のせいですごく奥行きがあるように見える。しかし実際のところ八畳くらいの広さだ。その八畳の中に彼女はただ一人でいる。しばらく佇んでいるとなんだかミルクの中に放られたような気分になった。私はクリスピーあるいはフレンチトースト。それともまだここは牛のお乳の中なのかしら。
部屋の中にしばらくいると自分自身も白になってしまったような感覚になった。ミルクの中に放られたのではない。彼女自身がミルクになったのだ。体が床や壁あるいは天井に張り付いていつの間にか体中が白に染められているのだ。それは自分が白になったという

不思議な感覚だ。
　そのうちドアがあることに気付く。もちろんノブも白だったから最初は気付かない。目が白という色に慣れてきた頃に気付く。ドアには鍵が掛かっていないようで、簡単にノブが回った。押せば簡単に開くのだけれど、どうしようか迷う。開けてはいけないような気がしたからだ。しかし、このままここにいても仕方がないと思ってノブを回す。足をドアの向こうへ踏み出す。
　真っ暗だった。今まで白の世界にいたせいでその黒はより一層深く見えた。いや、黒というよりも闇だった。まったくの闇だ。しばらく手探りで歩いていると次第に目が慣れてきて、真っ黒な部屋にいるのだと気付く。今度は黒のペンキが部屋中に塗られているのだ。今度も白と同じように丁寧に。気分が悪くなる。呼吸がうまく出来ない。黒は彼女にとって負のイメージであり、体が受け付けない色だった。ドアを探すのだけれどさっきのように簡単には見付からなかった。白の部屋に戻ろうと思ったがドアは閉まっていてそれすらも出来ない。この黒に慣れるまでかなり時間が必要だと思った。あるいは慣れることなんてないのかもしれないとも思った。歩いていると壁にぶつかった。方向を変えて歩くとしばらくしてまた壁にぶつかる。それを何度か繰り返しているうちに、ドアのノブらしくものが手に当たる。捻ると今度も簡単にドアが開いた。白の部屋を出るときのような躊躇はなかった。
「青だ」
　思わずそう声に出していた。今度は青の部屋だった。不気味な色だと思った。歩くと何故だか宙に浮いているような感覚になった。もちろん青の部屋も完璧な青だった。彼女が見てきたどの青よりも青らしくありこの色こそが青と呼ぶに相応しいと思った。しかし不気味な色に変わりない。
私は何を試されているのだろうと思う。あるいは何か実験的なことに無理矢理付き合わされているのではないかとも考える。しかし何の実験であるかまでは分からない。色とりどりの部屋を巡ることで

人間の心理にどう変化があるか。色が人間の体にどう影響するのか。いくら考えても答えは出ない。

今度は簡単にノブが見付かった。迷わずドアを開け次の部屋へと入る。

今度は赤色。もちろん完璧な赤。部屋の中央に小さな赤い色の机があった。あるいはそれは赤色ではないのかもしれない。全体が赤に染められているせいでそう見えるだけなのかもしれなかった。本当は杉の木が材料になっていて、それを職人が丁寧に組み立て最後に脚の下の方まで綺麗にむらのないようニスを塗って完成させた、誰が見ても惚れこむようなそんな素敵な机なのかもしれない。しかしそれは赤に完全に侵食されていた。ニスのきらめきも杉の木の年輪も見えない。

机の上に何かが乗っている。それがなんであるか最初分からなかった。赤色のせいではない。恐らく今まで一度も見たことがない物だったからだ。これは偽物？それとも本物？

机の上に乗っていたのは目玉だった。目玉が一つ。人間の目玉なのか、あるいは動物の目玉なのか。目玉は彼女のことを見ていた。すごく澄んだ瞳だと思った。白目は先程の白い部屋のように完璧に白であり、黒目は黒い部屋のように闇そのものだった。黒目の中で瞳孔が僅かに揺れているのが分かった。その中に彼女の顔が映っている。彼女の顔は赤だった。

彼女は目玉を手に取って見る。赤色に染められた目玉は表面がぬるりとしていて、今取り出されたばかりではないかと思うほど暖かかった。やはり目玉は彼女を見ている。

彼女はその目玉に何故だか親しみを感じた。目玉に親しみを持つなんて変だと思ったが、不思議と気持ち悪いだとか不気味だとかいう気持ちはなかった。前からこの目玉を知っているような気がしたのだ。

誰か知り合いの目玉なのだろうか？　だとしたら何故こんな所に目玉を置いているんだろう。あるいは殺されて目玉をくり抜かれたの

かもしれない。それは一体誰？
背筋を目玉が転がっていく。幾つも幾つも転がっていく。それは足元まで転がり今度は登ってくる。頭のてっぺんまでくるとまた足元を目指して転がる。ぬるぬるした感触が何度も背中あるいは脚を舐めていく。
彼女は悲鳴を上げる。けれどそれは声にならない。声が出ないのだ。喉仏が目玉になっているのだ。だから声が出ない。指を喉奥に突っ込んで目玉を吐き出そうとする。しかし出てくるのは唾あるいは胃液。目玉は喉の中でゆっくりと転がっている。まるで彼女の呼吸に合わせて動いているかのように、口から吐き出されるのを嫌がるかのように。あるいは目玉には意識があって（つまりそれは目玉が生きているということ）わざところころと転がり彼女のことを笑っているのかもしれなかった。
手の中にあった目玉が無くなっている。ああ、そうか。今、私の喉の中にいるのか。
『見ている。ずっと見ている』
何処からか声がする。辺りを見渡すが何もない。その声は体の中から聞こえてくるような気がしたし、違う所から聞こえてくるような気もした。目玉が喉奥で速さを増しながら転がっている。まるでその声に反応しているかのようだ。
『君のことをずっと見ている』
辺りを見回す。誰もいない。あるのは完全なる赤。そして喉奥の目玉。
「誰？　誰なの？」
声が出た。しかしその声は自分の声ではないかのように酷く濁っていて、きっと転がっている目玉のせいだと思った。がんばれば目玉を取り出せるかもと思い、先程と同じように指を喉奥に突っ込み吐き出そうとする。するとまるでそれが合図だったみたいに目玉が口から飛び出してきた。真っ赤な床に目玉が落ちる。ゆっくりと、ゆっくりと。

そこで目覚める。気持ちが悪い夢。もう二度と見たくない夢。いつもそう思う。そしてまだ目玉が喉奥に転がっているような感覚に襲われる。トイレにいって吐く。出てくるのは夢の時と同じように唾液と胃液だけ。目玉が喉に入っているわけがない。

「大丈夫。もうあんなひどい夢二度と見ないから」

つい言葉にしている。それはここが現実だとしっかり確かめる意味もあったし、絶対にもう見てはいけない夢だと自分の脳に訴えかける意味もあった。

しかし彼女は見てしまう。次の夜も次の夜も。まるで彼女の意識の中に植え込まれたかのように、その夢を見ることが彼女の義務であるかのように。

「本当に私の夢を取り払ってくれるの？　あの悪夢をもう見なくてすむの？」

木本が渋埼にそう尋ねる。

「ああ、もちろんだ。正確には取り払うのではない。君が何故そんな夢を見るのかを突き止めるんだ。それはもしかすると君の奥底に眠る邪悪な心がそうさせているのかもしれない。あるいは君の悩みやストレスが満杯になってしまい意味の分からないあのような夢を見ているのかもしれない。いずれにしろ原因を突き止めそれをどうにかして夢を処刑する。それだけだ。つまり君がいつも見ているあの赤い部屋の夢を見なくてすむということだ」

木本はじっと渋埼を見つめしばらくしてから「中へどうぞ」と言った。渋埼は煙草を玄関口に捨てそれを革靴の踵で踏み潰した。

確かにそっくりだと木本は思った。いつも見る悪夢の最後の方に出てきた全身黒ずくめの男。体系、喋り方、あるいは雰囲気もそのまま。そして彼は夢の中で言った。『苦しいか？』と。木下はその意味をもちろん理解し頷き、もし救ってくれるのなら、この悪夢を取り払ってくれるのならどんなにいいだろういう思いを懇願に変え

男に訴えた。すると男は深々とまるで何かの儀式みたいにお辞儀をし『君の悪夢を処刑に行く』と言った。

渋埼は部屋を見渡す。まるで女のその味気ない雰囲気を象徴しているかのように質素で、古びた部屋だった。台所とリビング。そして浴室とトイレ。部屋を支えている木製の柱は汚れた油をぶちまけて何年もそのままにしていたかのような色をしている。一人で住むにはちょうどいいのかもしれないが、それでも何故かこの部屋には胸を圧迫されるようなあるいは息苦しくなるような雰囲気があった。あまりにも中が簡素すぎるせいかもしれない。ベッドと一人用の机。本棚と箪笥。それだけ。

渋埼は机の前に座り木下に断りもなく煙草を吸った。

「きちんと説明してください。あなたが何者なのか、そして私の見る夢とどう関係しているのか。もちろんあなたを部屋の中に上げたということは、あなたを信用したということ。しかし信用したけれどまだその信用は確信ではない。もしかすると私の中にある警戒心みたいなものが、あなたは大丈夫だと判断しただけかもしれない」

木本は煙草を吸う渋崎を見下しながら言った。溜め息を吐く渋埼。

「私には時間がない。だから先程の私の説明で理解してほしかった。しかし君はあくまで依頼者であり私はその依頼を引き受けた者だ。君との信頼関係を最初で築く必要があるし、これから短い間だが君と同じ時間を共有するのだから、理解し合うことは大切だ」

渋埼はそう返すと灰皿はないかと木本に聞き、木本が灰皿を差し出すと持っていた煙草を押し付けた。木本もテーブルの上にあった煙草を取り吸った。彼女の煙草は薔薇の香りがした。

「私は人の夢の中に入れる。そして人の夢を解消してやる。それが仕事だ」

煙草の煙（正確には薔薇の香り）に嫌悪感を抱きながら渋埼は言った。木本はそんなことは分かっているとでも言いたげに首を左右に振り、煙を天井に吹きかけながら「あなたが夢の中に入れること

は分かりました。そう簡単に信じられるようなことではないけど、あなたは確かに私の夢の中に出てきたし、私の夢のことも言い当てた」
「ああ、その通りだ。なあもう充分だろ？　早く決めてくれ」
しかし木本は考えている様子だ。薔薇の煙が彼女の痩せ細った顔を覆っている。
何を躊躇う必要があるのだと渋埼は思う。納得のいかないことあるいは恐怖があるというのなら拒否してもらっても構わない。いや渋埼にとってはそれが一番いいことだ。そうすることで時間の余裕が出てくるしこの後の仕事もスムーズにいく。バスが遅れたことだって気にすることもなくなる。
「一つだけ聞いていいですか？」
木本が言った。
「なんだ？」
「私の夢を見てどう思いましたか？　その、つまり私は精神に異常があると思いましたか？」
「精神に異常があるとは思わなかった。何故そんなことを聞く？」
「だってそうじゃないですか。こんなに毎晩、毎晩同じ夢を見るなんて頭がおかしくなったのかもと思うでしょ？　それも決して気持ちのいい夢ではない。むしろ気持ち悪い。不気味だし」
渋埼は顎に手を当てて何かを考えている。そして「恐らくお前が見ている夢は、誰かの気持ちあるいは感情が創り出したものだろう」
木本は渋埼のその言葉を理解しようと眉間に皺を寄せたが、どうもうまく飲み込めないので「どういうことですか？」と聞いた。
「周りにお前のことを恨んだり妬んだりしている奴はいないか？　いや、実際に分からなくてもいい。なんだかそんな気がするという奴はいないか？　友達でも職場の人間でも誰でもいい」
「そんな人いません。私は誰かに妬まれたりするほど何かに長けているわけでもありませんし、容姿も見ての通り良くありません。仕事だって出来る方でもないし」

「それでは恨んだりする奴は？」
「絶対にいないとは言い切れませんが、たぶんいないと思います。人はほんのちょっとしたことで人を恨みます。そうでしょう？　ただ肩がぶつかっただけで殺意を抱く人もいれば、見た目が気に入らないというだけで怒りを露にする人もいる。そんな世の中にいれば逆に誰からも恨まれないなんてありえません」
　そう言うと木本は煙草を灰皿に押し付けた。薔薇の煙が最後の悪あがきみたいに灰皿の中で舞い上がる。それは彼女の腕をあるいは彼女の顔を舐めるように広がっていったが、手で三回ほどあおぐとすぐに消えていった。木本は煙がしっかりと空気の中に溶け込むのを確認してから「何故そんなことを聞くんですか？」と渋埼に尋ねた。
「お前を恨んでいる奴がいたとする。お前のことを殴ってやりたい、困らせてやりたいあるいは殺してやりたいとそいつは常日頃思っている。その感情が知らず知らずのうちにお前の中に入っていく」
「私の中に感情が入る？」
「ああそうだ。それはもちろん目には見えないし感じ取ることも出来ない。しかしその感情は確実にお前の中へと入っていくんだ。風邪のウィルスのようなものだな。気付いたら喉が痛いあるいはくしゃみが止まらないということと一緒だ。その感情は、お前の中で膨れ上がり夢という自身では制御できない世界へと誘われる。つまりそれが現在見ている夢なんだ」
「つまり誰かの感情が私にうつってしまいそれが夢になっていると？　まさかそんなことありえないでしょ」
「いや、ありえないことではない。むしろそういう事例は今まで幾つもあった。現実では絶対に起こり得ないことが簡単に起きてしまう。それが夢というものなんだ。今回のお前の夢も、そんな他人の感情が夢の中に入り込んできているようだ」
「そんなこと分かるのですか？」
「ああ。これはただの悪夢とは少し違う。どう違うかと言われれば

うまく説明できないんだが、例えるなら体に伝わってくる空気みたいなものが違うんだ。普通の夢が爽やかな風だとしたら、お前のような夢の場合は少しだけじっとりとしてるんだ。湿気を帯びていると言えばいいかな」

木本は目を閉じた。そして一体誰が自分のことを恨んでいるのか考えてみた。しかし誰一人として頭には浮かんでこなかった。何よりも自分が社交的ではなく友達もあまりいないことを分かっていたし、その友達でさえも最近では（最近といっても一年もの間）連絡を取った記憶がない。仕事仲間とも遠からず近からずの付き合いをし、誘われれば飲みに行くこともあったが、楽しいと思ったことは一度もなかった。集団でいるのが苦痛だったし、その集団の中で感じる異常な孤独感がたまらなかった。つまらない人間だといつも思う。たとえば身近に自分のような人間がいたとしたら（あるいは自分を客観視したとして）決して近付こうとは思わないし、どうしようもない人間だとも思う。もしかしたらこんな私の暗くて憂鬱な性格が誰かの怒りを買っているのではないだろうか？見ているだけでイライラする、あるいは顔を見ただけで仕事のやる気がなくなるなんて思っている人がいないとは限らない。いやむしろそういう人はきっといるはずなのだ。

渋埼はそんな木本の感情を読み取ったかのように言った。

「君の中に入り込むくらいだから、それはとてつもなく大きくて強い感情なんだ。」

「大きくて強い感情？」

「ああ、どうしようもなくな。だからほんのちょっとした日頃のイライラでは駄目なんだ。お前が考えているよりもそれは大きなものだ」

そう言われて木本は更に分からなくなってしまった。果たして自分を恨んでいる（それもとてつもないほど大きい。自分が考えているよりも遥かに大きい）人物は誰なのか。

「分かりました。私の夢を取り払ってください」

木本は言った。渋埼が本当にいいのか？　と訪ねると木本は強く首を縦に振った。

渋埼は「そうか、分かった。それでは目を閉じ夢の中のことを思い浮かべてくれ。そうすれば私は夢の中へすんなりと入っていける。それとあと一つだけ言っておく。私は夢とは別に君の記憶の中を探る場合がある。特に痛みなどはないが、少しだけ息苦しく感じるかもしれない。しかし悪夢を処刑するために必要なことだから理解してもらいたい」

木本は返事もせずただ目を閉じている。その表情は渋埼の言葉を聞いていないようにも見えたし、理解したうえでの表情にも見えた。念のため渋埼が同じことをまた言うと、今度はゆっくりと先程の頷きとはまた違った（覚悟を決めたようなあるいは死を覚悟したようにも見えた）首の振りをした。ゆっくりと縦に顔が動く。ゆっくりと、ゆっくりと。

Ｃｏｌｏｒ～カラー～２

「目を開けていいぞ」
渋埼がそう言ったので木本は目を開けた。夢に見たあの真っ白な部屋だ。やはり完璧な白だ。その中に佇む渋埼の黒が霞んで見えるくらいの白さ。そのまま渋埼を見続けていれば彼は白の中に溶け込んでしまいまた自分は一人になってしまうのではないかと思い、渋埼から目を離す。離した先にもあるのはやはり完璧な白。他に何も無い。じっとしていると目眩がしたので、とりあえず歩き回ってみる。しかし歩き回ってみても本当に自分は歩いているのかと思ってしまう。意識だけが動いているだけで、本当はじっと同じ所に立っているだけなのではないかと思う。それを確かめるつもりで少し先にいる渋埼を目指して歩く。ゆっくりではあったが、黒い色が徐々にはっきりと目に入ってきたのできちんと自分は歩けているのだと安心する。
「何もないな」
渋埼が言った。「しかし芸術的なほど白い。こんなに美しい白は今まで見たことがない」
渋埼は辺りを三回ほど見渡した後で、顎に手を当て眉間に皺を寄せた。それからその格好のまま壁の方へ顔を寄せる。目を細め壁をじっと見ている。まるで美術館の絵を丹念に見ているかのようだ。
「何を見ているんです？」
木本がそう尋ねると渋埼は何をくだらない質問をしているんだといった表情で木本を見た。そして「決まっているだろう。この美しい白を見ているんだ。この部屋に他に見るものがあるか？」
渋埼はそれだけ言ってしまうとまた壁に目を向けた。
木本は夢の中でのあの感覚を味わっていた。白と一体となっていくような感じ。いや、これは一体になるというよりも、もともと一つだったものが分裂してしまい、また元の一つに戻ろうとするよう

な感覚。
渋埼が指を鳴らす。その音は、天井を突き抜けるかのように高く響いた。
真っ暗な部屋に木本は立っていた。いや、これは夢で見た第二の部屋。つまり真っ暗なのではなく真っ黒なのだ。完全なる闇ではなく暗幕。目を閉じているのではなく目を塞がれたのだ。
「何も見えないな。さっきの部屋が白すぎたせいで目が痛い」
渋埼の声がする。それは何処か遠くから（あるいは先程の白い部屋から）聞こえてくるようでもあったし、すぐ近くから聞こえてくるようでもあった。感覚がおかしくなっていると木本は思った。体中の感覚がそれこそ暗闇をさ迷っているかのように狂ってきている。聴覚は音の区別をつけられず、視覚は色の変化に怯え、指先あるいは足先の感覚は何を頼っていいのかと混乱している。
「何か分かりましたか？」
渋埼にそう尋ねてみる。それは渋埼が自分の近くにいるのかあるいは遠くにいるのかをもう一度確かめる意味もあった。
「何も分からないよ。この部屋が何を意味するのか検討もつかん」
その声は木本のすぐ横で聞こえた。
「何も分からないんですか？」
「ああ、分からん。だが心配するな。私はもっと不可解な夢と対峙してきた。どの夢も全て私が処刑してきた。時間が限られているといっても焦る必要はない。じっくりと考えるんだ。しかしここは真っ暗で何も見えないな。場所を変えよう」
渋埼がそう言うと、また指を鳴らす音がした。やはりそれは高く響く。
海の底はもしかしたらこんな色をしているのかもしれないと木本は思った。どの色にも汚されていない純粋な青が彼女の周りにはあった。歩くと床の軋む音がした。足裏に青色が付いているのではないかと思ってしまい、足を持ち上げ目で確認する。靴底に青色は付

いていないのだが、それでも歩く度に気になってしまい、その動きを何度もしてしまう。その姿は下手くそなダンスのステップを踏んでいるように見えた。うまく音楽に合わせて体を動かそうとするのだが、バランスを崩して足を持ち上げてしまう。そんな風に見える。

青色は塗りたてのペンキを連想させるんだと木本は思った。思い込みというやつだ。

「お前の話を聞かせてくれるか」

渋埼が言う。木本と同じく足裏が気になっているようで、下手くそなステップを踏んでいる。

「私の話ですか？」

木本がそう聞き返すと渋埼は足の動きを止めて「ああ、そうだ」と言った。

「私の話というのはどういうことですか？」

「お前の話だよ。最近あったことや、昔の思い出でもいい。幼い頃どんな子供だったとか、どんなことをして遊んでいただとか、どんなアニメが好きだったとか、あるいは学生の頃の恋話でもいい。もちろん仕事場で失敗したことや褒められたことでもいい。誰にでもそういう話は一つや二つある。とにかくお前の話を聞きたいんだ」

「私は平凡な女です。お話できるような思い出はありません」

「平凡なら尚更だ。平凡な人間にこそ多くの思い出がある。なにも恥ずかしい思い出を要求しているわけではないし、難しい問題を出しているわけでもない。自分のことについて話すだけでいいんだ」

「私の話を聞いてどうするつもりなんですか？」

「お前の思い出の中から夢を解決する糸口を見付けるんだよ」

「そう言われても本当に何もありません」

「それならばこちらから問いかけるとしよう。お前は男を何人知っている？」

「男？」

「ああ、そうだ。何人の男と寝たことがある？」

木本は何も返さない。ただ黙っている。何か言おうと口を動かす

のだが、そこから声は出てこない。出てこないというより、出すタイミングがないといった様子だ。
「お前、男を知らないのか？」
渋埼がそう質問すると、木本は顔を強張らせ俯き、青色の床に向かって鋭い眼光を送った。そして「私を見れば分かるでしょ？こんな暗くて美しくない女を誰が相手してくれると思います？」
「それならば恋をしたことはあるか？」
「恋ですか？」
木本には恋という言葉がひどく自分に相応しくないようなあるいは対極に位置しているような気がした。初めて聞かされた言葉であるかのように、うまく耳へあるいは脳の中へ入っていかない。しばらく恋について考えを巡らせていたが、うまくまとまらず木本は何も応えることが出来なかった。そこで渋埼が質問を変える。
「男に惚れたことがあるのか？」
そこでようやく木本は言葉の意味をうまく理解できたかのように、何度か頷いた後「ええ、それはもちろん。私も女ですから」
「告白したことは？」
「ありませんよ。告白したところで返事は決まっているのですから」
「どういう答えが返ってくると？」
「もちろんノーです。いい答えが返ってくるとは思いません」
「何故だ？　告白もしていないのに」
「だから言ったでしょ？私は見ての通りの女。誰も相手になんかしてくれません」
いつの間にか木本は赤い部屋に立っていた。そして目玉を手に持っている。それはやはり生暖かくて独特のぬめりがあった。木本のことをじっと見つめている。
背中を目玉が這いずり回る感覚があった。一個ではない。二個や三個でもない。背中の感覚を頼る限りでは、数十個はある。それが背中を行ったり来たり。生暖かくて、ぬるぬるした目玉が背中を嘗め回していく。鳥肌が全身に立ち、木本は声を上げる。目玉はまる

で這いずり回ることが義務であるかのように、あるいは木本の苦しみを楽しんでいるかのように、転がり続ける。木本は持っていた目玉を落とす。目玉は赤い床を転がり渋埼の足元で止まる。
「夢の中にいても何も見付かりそうもないな」
苦しむ木本など気にも止めず渋埼は言った。そしてしばらく腕を組んで考えていたが、何か思い付いたのか指を一つぱちんと鳴らした。

木本はベンチに座っていた。二人が座れるくらいの小さなベンチ。元が何色だったのかは分からないが、ペンキは綺麗に剥げ落ち、変わりに赤茶色の錆がベンチを侵食している。背中を探ってみたがもう目玉はないようだ。目の前に広がる光景があまりにも現実的すぎて、本当に目玉など背中にあったのだろうかと疑問に思う。
太陽が眩しい。その眩しさは確実に肌に染み渡り瞼を焼き、届くはずもないのに思わず太陽に手を伸ばしていた。木の葉が揺れる音がする。生物の呼吸の音がする。風が体をゆっくりと撫でていく。すぐ近くにブランコがある。四歳くらいの女の子がブランコを漕いでいる。後ろには母親がいて、女の子の背中を押してやっている。女の子がもっと強く押さないと高く漕げないよと言うと、母親が危ないから駄目よと優しく叱った。側には小さな砂場があって、男の子二人が山を作って遊んでいる。一人が頂上へ何度も砂を乗せ、もう一人はきっとその山にトンネルを開通させたいのだろう、崩れないように様子を伺いながらそっと中心めがけて穴を広げていく。開通計画はどうやら上手くいったようで、山を拡大していた方の子供が綺麗に空いたトンネルを見て歓声を上げる。それにつられてもう一人も誇らしげに笑う。
ここは、公園。それも見知った公園だ。仕事の昼休憩はこのベンチに腰掛けて買ってきたサンドウィッチを食べる。今見ている光景もいつもと同じだ。午後の何の変哲もない穏やかな光景。
会社から歩いて五分も掛からない小さな公園なのだが、彼女にとっ

てはここが安息の場所であり、会社という檻の中から解放されその羽を伸ばせる場所でもあった。
会社の人々は誰もが神経質な顔をしながら書類に目を通し、申し合わせたかのように舌打ちや歯軋りをしている。そして書類を見ている時よりも更に不機嫌な顔をして木本を呼ぶ。彼女が呼ばれる時は、だいたい誰もがやりたがらないような雑用を頼むときだ。残業を頼んだりもする。他にも女子社員はいるはずなのに、決まって彼らは木本を呼ぶ。きっと私は文句も言わないし、残業をしたところで特になんの支障もないと思われているのだ。それに顔も悪いから男もいないと思われている。実際にそうだし、たとえ文句を言ったところで彼らはもう私のことを見てはいない。また神経質そうな顔で書類を見るのだ。木本はきっと彼らは機械なのではないかと思った。決められた書類を見て、決められた通りに舌打ちや歯軋りをする。そして木本を呼んで仕事を任せる。そうプログラムされているのだ。それに目だって冷え切っている。冷凍庫の扉を開けて一晩中その前にいたのではないかと思うほど、冷たくて怖い。そしてその瞳の中にはまるで潤いなどなく、絶望的なほど広い砂漠のような乾きだけ。きっと彼らはロボットなのだ。誰がなんのためにそうプログラムしているのか分からないが、そうじゃなくてはおかしいと思った。
しかし、と思う。そのロボットに言われるがままに行動する私もまたロボットなのではないか。私もまたロボットの一部なのかもしれない。考えはいつも堂々巡り。だから昼休憩になると彼女はこの公園にやってくる。ロボット以外の生身の人間を見たいと思うからだ。それはこういった公園が一番いい。公園には会社には絶対にないあらゆるぬくもりがある。それは母親のぬくもりであったり、子供のぬくもりであったりする。そしてそのぬくもりに触れてみて自分は決してロボットなどではないのだと確認する。ロボットは人間のぬくもりに触れることはできても、それを心に感じ取ることはできない。
遠くの方には小さな池がある。綺麗な池とはいえないが、貸しボ

ートがあったし、鯉も数匹泳いでいる。腰の曲がった老婆が池に餌を投げ込んでいるのが見える。老婆が餌を投げる度に水が大きく跳ねる音がした。キャンバスに池を写生している青年がいる。あんな汚い池をよく書こうと思うものだ。

「ここはお前の記憶の中だ」

いつの間にか渋埼が横に座っていた。脚を組んで煙草を吸っている。煙草を口にくわえたまま大きな伸びを一回する。それから太陽を見上げそこに向かって煙を吐きかける。それは本当に午後の時間を堪能しているかのように見えた。

「私の記憶の中なのか分かりますけど、どうしてこの場所なんです？　もっと他の記憶があるでしょう？　こんな所よりも私と直接的に関わりのある場所へ行きましょうよ。例えば仕事場とか。ここは昼休みのちょっとした時間しか利用しないんですから」

木本がそう言うと渋埼は煙草を地面へ投げ捨て、それから首をゆっくりと横に振った。木本の意見を否定していた。

「どうやらこの場所が重要らしいんだ」

渋埼が言った。

「この場所が重要？」

「そうだ。さっきも言っただろ？　誰かがお前のことを強く恨んでいると。その恨みがどこからきているのかを辿ってみた。するとこの場所が出てきた」

そう言われた木本は改めて辺りを見渡してみた。特に変わったところはなく、いつも見ている光景が平和にそして平凡にあるだけだった。自分の見ているあの不気味な夢とはどうにも結びつかない。老婆は餌をまいているし、青年はキャンパスに絵を描いているし、子供は無邪気に遊んでいたし、風もなだらかに流れている。

「少し歩いてみよう。何か分かるかもしれない」

渋埼はそう言って立ち上がる。木本もそれに倣って立ち上がる。少しだけ目眩がした。

二人はまず砂場で遊ぶ子供達の所へ向かった。やはり子供達は楽

しそうに砂山を作っている。子供が作ったものだけあって、形もトンネルも上手いものとは言えなかったが、それでも彼らにしてみれば充分に満足したものなのだろう。なんども土を貼り付けて傾斜をつけたのか、山の至る所に小さな手形が残っていた。

ブランコに乗る少女の喜ぶ声が聞こえた。少女があまりにもせがむのでとうとう根負けした母親は、少女の背中を思い切り押してやっていた。少女を乗せたブランコは大きな弧を描きながら空へ向かって飛び出していく。それを心配そうに母親が見つめる。

木本は普段の自分自身を思い浮かべていた。目は先程まで座っていたベンチに向けられる。昼休みに一人で公園のベンチに座りサンドウィッチを頬張る姿は客観的に見てどうなのだろう。それは決して昼のわずかな時間を楽しんでいるあるいは有意義に過ごそうとしているようにはどうしても見えない。誰かと待ち合わせをしているようにも見えない。

それから二人は池の方へと向かった。池は綺麗とはとても言い難かった。水底の苔だったり、あらゆる食べ物のカスだったり、誰かが酔っ払って放出した小便だったりが、不気味に混ざり合った色をしている。その中を奇妙な形と色をした数匹の鯉がさ迷っている。ある鯉はある鯉の尾をずっと追い掛け、ある鯉は餌もないのに口をパクパクと動かし、ある鯉はその場で何度も周っている。鯉が動き回る度にあちこちで波紋が蜘蛛の糸のように広がる。太陽の光がそれらを一瞬だけ、しかしその一瞬を繰り返し光り輝かせている。

袋を持った老婆がその池に向かって餌を放ると、波紋は一箇所に大きく広がりなかなか消えることはなく、ようやく消えそうになったところでまた同じ場所に餌が投げ込まれ、波紋はまた広がる。

「すごく汚い池。だけどなんだか見ていてほっとします」

木本はそう言いながら渋埼の方を見た。しかし渋埼は木本の言葉など聞いておらず、別の場所に気を取られているようだった。

「どうかしたんですか？」

「ああ、あいつが気になるな」

そう言って渋埼は、池を写生している青年を指差した。
「どうして気になるんです？」
「あいつはいつもあそこにいるのか？」
「ええ、だいたいいつも。あそこで池の写生をしています」
青年は見たところ二十代前半といった感じだ。黒のパンツに青のパーカーを着ている。キャンバスに向かって真剣に筆を動かしている。細かい部分でも塗っているのか、とても神経質に目が動いている。眉間に皺も寄っている。しかし気に食わないのか、舌打ちをする。筆を折らんばかりに強く握りしめキャンバスを睨みつけ、少ししてからまた色を塗り始める。
「あいつ池なんか一度も見てないぞ」
渋埼の言うように、キャンバスと青年の体は池の方に向いているのだが、青年は一度も池に目を向けていない。しかし時々キャンバスから顔を逸らせて、何処かを見ているような素振りはある。目を細めているので遠くの風景でも描いているのだろうかと木本は思ったが、どうやらその目は公園で遊ぶ子供達に向けられているようだった。視線を追うと砂山の子供あるいはブランコで遊ぶ少女にぶつかる。
「子供達を描こうとしているんですかね？　それならもっと近くに寄ればいいのに」
木本がそう言うと渋埼が「いや違う」と否定した。
「恐らく描いているのは子供ではない」
「それじゃあ何を描いているんです？　まさかあの鯉に餌をあげているお婆さんではありませんよね？」
渋埼は青年の視線を注意深く追っている。顎に手を当てている。眉間に皺を寄せる。そしてゆっくりと言った。それは午後の緩やかな日差しに乗って、あるいは暖かで滑らかな公園の風に乗って木本の耳に届いた。
「老人ではない。描いているのは恐らくお前だ」
「私を描いている？」

「ああ、お前だよ」
「どうして私を？」
「どうやら私は勘違いしていたようだ。私はお前が誰かに恨まれているのではないかと考えていたんだが、どうもその逆だったようだな。お前は好かれていたんだ」
「好かれていた？」
木本は首を捻る。上手く理解出来ないので渋埼の次の言葉を黙って待つ。
「お前はあの青年に気に入られていたんだよ」
青年を見たまま渋埼が言う。
「彼はお前のことが好きだったんだ。そしてお前の姿を絵に描こうとした。一人でベンチに座る寂しげな女性の絵。なんだか哀愁のある絵が出来そうな気がしないか？」
木本は絵のことなど何も分からなかったから、ただ首を傾げるばかりで、そして何よりもこんな容姿の悪い自分を気に掛けてくれている人物がいたということに驚いていて、もしそれが本当であるならば果たして私はどうすればいいのかと考えていた。
「見たことのある白。あれはキャンバスの白だ。つまりお前を白いキャンバスに描きたいという欲望が創り出したもの。あの白い部屋にはそんな意味があったんだ」
渋埼が得意げな顔で言う。思っていたよりも早く終わりそうなので安心しているようだ。
「それじゃあ、あの黒い部屋、青い部屋、赤い部屋はどういう意味があるんです？」
木本がそう質問すると、渋埼は簡単だと言って唇を吊り上げた。
「あの部屋は色を象徴したものだ。つまり黒はそのまま黒色を、青はそのまま青色を、そしてもちろん赤は赤色を」
「それではあの不気味な目玉は？」
「あれはお前の目だ」
「私の目？」

「ああ、そうだ。彼はお前の目がすごく気に入ったんだ。お前の姿を描きたいのはもちろんだが、その中でも特に目を描きたかった。その思いが彼の中で強くなり、あのような奇妙な夢になってしまった」

木本は思わず自分の目を（詳しくは瞼の上を）触っていた。こんなみっともない目を好きでいてくれる人がいるなんてとても信じられなかったからだ。それにこの狐のように釣りあがった目は、木本が顔の中で最も嫌っている箇所でもあった。鏡をなるべく見ないように日頃からしてはいるのだが、それでも絶対に見ないというわけにもいかず、ついなにかのはずみで鏡を見てしまうことがある。それは公衆便所の鏡であったり、店の中の鏡だったりする。そしてその鏡に映った自分の顔を見る度に、木本はこの釣り上がった目を憎く思うのだった。そう思えば思うほど鏡の中の自分は、ひどく歪んでいくのだ。

「私の目を描きたいなら、あんな遠くからでは何も分かりませんよ？もっと近くに来て描かなくては」

手を瞼に当てたまま木本が言う。

「それが出来たら彼の思いはこんなに強くなったりはしない。お前の周りには親子連れがいる。男が一人でそんな場所に行ってみろ、いくら絵を描いているとはいえ不審者と思われ警戒されてしまう。親に警戒されるということは、つまりお前にも警戒されるということだ。そんなことになったらもうベンチには座ってくれないかもと思ってしまう。だからといって、いきなりあなたの絵を描かせて下さいと言うもの変だ。だからあの場所で絵を描いている。遠くからしか見えないから、どうしてもああいう歯痒い顔になってしまう」

確かに青年の顔は絵が上手く描けないというよりかは、描こうとしている対象をきちんと見てみたいあるいは近くで見てみたいという欲望の顔に見えなくもなかった。

「それでは私はどうすればいいんでしょうか？」

木本は青年のその歯痒そうな顔を見ながら言った。

「簡単なことだ。彼の元まで行ってどうぞ私を描いて下さいと言うんだ」
「彼、戸惑ったりしませんかね？」
「きっと戸惑うだろうな。思いを寄せている人からいきなり声を掛けられるんだから驚きもするだろう。だからいきなり私を描いて下さいと言うのではなく、何をいつも描いているんですか？　と尋ねてみるんだ。彼は当然慌てるだろう。そこでお前が言うんだ。もし私を描いているのなら何も気にすることはありません。私を描いていることは知っていました。そしてそのことについて私は気分を害したりだとか、やめてほしいと思ったことはありません。だからどうぞ続けてくださいと」
　渋埼がそう言ったのだが木本はなにか迷っているようだった。
「どうした？　それとも本当は描いて欲しくはないのか？」
「いえ、そうじゃないんです。私を描いて下さっているのはすごく嬉しいんです。なんだか本当に夢みたいで。私を気に入ってくれているのも恥ずかしいけれど、嬉しいですし」
「それではなにをそんなに迷っている？」
「どんな顔で彼の元へ行けばいいのか分からないんです。私あまり人から好かれたことがないものですから。嫌われている人に対して向ける表情の作り方は知っていますが、好かれている人に向ける顔はどうすればいいのかなって。もちろんそのままの自分の顔で行けばいいのは分かっているのですが、それがうまくいくかどうか」
　渋埼はしばらく腕を組んだまま考えていた。うまい答えが出てこないようでそれはしばらく続いた。そして結局何も思い付かなかった渋埼は、「とりあえず声を掛けてみろ。表情など気にするな。声を掛けてみれば案外うまくいくかもしれない」
「そんな無責任な」
「無責任ではない。お前はきっとうまい表情など作れるわけがないんだ。分かるか？　どんなに頑張っても野球少年はメジャーリーグへは行けないし、どんなに速く走ろうとしても人はチーターには勝

てない。出来ないことを無理にする必要はないし、無理にしたところで失敗することは分かっているのだから、ありのままの自分でいくことが大事なんだ」
「ありのままの自分」
「そうだ。ありのままの自分だ」
「それでうまくいくのでしょうか？」
「うまくいくかいかないかは問題ではない。お前が一つ勇気を出して彼に声を掛けることによって、悪夢が消えて無くなるんだ。彼が逃げ出してもあるいは避けられてもそれはそれで仕方がないと思わないと何も解決しない。それはそれ、これはこれなんだ」
「それはそれ、これはこれ」
木本は渋埼の言葉を注意深く聞いていた。まるで裁判所書記官みたいに一言一句を聞き逃すまいとしていた。今にも鉛筆かペンを持って目眩がするほど細かい字で、渋埼の言葉を紙に書きだしそうだ。
「とにかく彼の元へ行くんだ。結果は後から付いてくる。しかしその結果を決して期待してはいけない。悪い方に転がることもあればいい方に転がることもある。勝負は時の運だ」
「勝負は時の運」
木本はその言葉を口の中で三回唱えてから、彼の方へと向かって行った。その歩き方はすごく不器用で、なんだか後ろから支えてやらねばひっくり返るのではないかと思うほどだったが、渋埼がしっかりしろと声を掛けてやるとそれで気合が入ったのか、足はしっかりと地に付き、きちんとした歩き方になった。その後姿は、初めて異性に告白する女子中学生のような緊張感が漂っていて、その肩に触れればたちまち場面は学校の体育館裏に変わり、遠くで待つのは学ランを着て同じく緊張緊している坊主頭の少年に変わってしまいそうだった。
渋埼はきっとうまくいくだろうと思っていたから、夢を取り払った後、向かうべき次の依頼人の場所を調べるため胸元のポケットから手帳を開いてページをめくった。次は歩いて十分もない場所だ。

依頼人が多い場合、どの依頼人から済ませていくかで時間はかなり違ってくる。やっかいだと思うものを先に済ませておくのか、それとも後にしておくのか、あるいは後日にまわすのか。その判断を一つ間違えるだけで時間は大幅に狂ってくるし、そうなると手帳に書いた一日のスケジュールの意味がなくなってしまう。つまり時間を支配しているのではなく、支配されてしまうことになってしまうのだ。そんなこと決してあってはならない。そう思いながら渋埼は時計を見た。そして木本の方へ目を向ける。

彼女は首を絞められていた。青年によって。

木本の顔は驚きと絶望が混じっていた。顔色が次第に青くそして赤くなっていくのが分かった。目は瞬きすることなく強く大きく開かれ、そこから涙が溢れている。その目は青年を見ようと必死なのだが、恐らく映っているのは遠くそして青い空だけだろう。そして最後にその顔はまるで夢の中の白い部屋のように真っ白に、鮮やかなほど真っ白になった。それは皮肉にも今までの木本加奈子が渋埼に見せたどの顔よりも美しかった。体がゆっくりと倒れる。真っ黒で長い髪が彼女の顔を覆い尽くしていく。

そうか、あの部屋は彼女の死（もっと詳しく言えば彼女が死んでいく顔の色）を現していたのか。つまり、あの青年は木本を殺したいほど憎んでいたということか。しかし何故こんなことになってしまった。そう思い渋埼は青年が向かっていたキャンパスを見た。

そこにはブランコに乗る少女の背中を、微笑みながら押している母親の姿が描かれていた。その表情もそうだったが、瞳が見惚れてしまうほど美しく描かれている。

渋埼は公園の方を見る。そうだったのか。彼はあの母親を描きたかったのか。彼の視界にはいつも木本が入っていた。母親とその子供を描きたいのに余計な者が被写体に入っている。

「邪魔なんだよ、お前。ベンチに座るんじゃない」

そう青年が言った。

地が揺るぎ空間が歪む。渋埼はここから出て行かなくはならなか

った。そして指を鳴らす。

アスパラガスの微笑み１（前書き）

偶然が必然か、夢処刑人である渋崎は、たまたま立ち寄った図書館で夢に悩まされている男に出会う。
男は毎晩、人を殺す夢を見ているという。
興味は持った渋崎は、男の話を聞いてみることにする。

アスパラガスの微笑み1

「もうどうしていいのかまったく分かりませんよ」
男はそう言って明日で世界が終わるみたいな絶望的な顔をした。男にとってみればあるいはそれは世界の終わりなのかもしれなかった。
「それはいつから見るようになったのだ？」
渋埼がそう質問すると男は少しだけ考えてから「一ヶ月ほど前からです。最初はただ悪い夢を見てしまったっということだけでたいして気にはしなかったのですが、こう毎日続くとさすがに精神的にといいますか、頭の血管が切れてしまいそうなほど神経質になりました。仕事も手に付かないし家族にも冷たくしてしまい、これではいけないと思っているのですが、やはり……」
「病院に行ってみたのか」
「ええ、もちろん。けれど先生はただのストレスだろうって。あまり仕事に一生懸命にならずに、いろいろな趣味を持つようにしなさいと言われました。確かに仕事が私の生きがいでしたから、先生の言うことを聞いてあらゆることにチャレンジしてみました。もちろん無理をしない程度にですよ。読書から始めてパチンコ、ゴルフ、音楽も聞くようにしたし、なるべく何も考えない時間を作るようにもしました。頭の中をリフレッシュさせるつもりでね。しかしどれも何の効果もなかったんです。いや、実際には私の肉体、精神は随分と癒されました。それは確かなんです。けれどやはりあの夢を見てしまう。もう最近ではその夢を見なければ何かが起きるのではないかと思っているほどです。なんだか変な話ですよね」
男はそこまで言うと麦茶の入った紙コップを持ってそれを飲んだ。随分と喉元に汗を掻いている。それが雫となり、顎のあたりからまるで閉め損ねた蛇口みたいに何滴も垂れ落ちる。
渋埼も麦茶を飲みながら、男と同じように首筋に浮かんだ汗をハ

ンカチで拭っていた。何故こんなに暑いのかと思っていたら、誰かがクーラーをオフにしてしまったらしく、しかしまた電源を入れにいくのも面倒なくらい暑くなってしまっていた。かといってこのまま汗を流し続けるのはどうしても嫌だったので、近くをたまたま通りかかった青年にクーラーを点けるように渋埼は頼んだ。しばらくして冷たい風が二人を包み込んだ。途端に汗が拭われ、渋埼はもう必要としなくなったハンカチをポケットにしまった。汗が引くのと同時に渋埼が話し出す。

「それでは具体的にどういう夢を見るのか教えてくれるかな」

男はその渋埼の言葉に少しだけ躊躇いを見せ、眉間に皺を寄せ、まるでそれはそこまであなたに言う必要があるのか？　という顔に見えた。しかししばらくして一言。

「人を殺しているんです」

「人を殺している」

渋埼が繰り返してそう言うと男は深く頷いた。そして「それも一人じゃない。何人も、何人も。ある場所で、たとえばバスルームで女の首を絞め殺しているのですが、その女を殺してしまうとすぐに場面が変わり今度はビルの屋上で男を突き落としているんです。そして今度はコンビニで店員の胸元をナイフで突き刺している。その次は車に乗って道を歩く老人を轢き殺している。こんなかんじで何度も場面が変わり、その度に私が人を殺し続けているんです。頭がおかしくなるのは当然です」

男はその夢を思い浮かべているのかすっかり涼しくなったはずなのに、先程よりも一層の汗をかいてそれを拭おうともしなかった。着ていたシャツは乾燥機に入れる前の洗濯物みたいに濡れている。男は残った麦茶を全て飲み干した。

「夢占いってありますよね？」

男がそう言った。「知り合いの占い師さんにその夢について相談したんです。そしたら、人を殺す夢は現実で何かいいことが起こる前触れだって言うんですよ。けれどこんなに連夜見ているにも関わ

らず一つもいいことなんか起きないんです」
「そんなもの信じるな。夢のことを占い師に話してどうなるもんでもないだろう。そいつがどういう奴なのかは知らんが、適当に言っただけだ。それに人を殺す夢は何かいいことが起きる前触れだなんて安っぽい夢占い本にも書いてあるぞ」
渋埼はそう言うと男はやっぱりそうですよねと肩を落とした。
「殺している相手というのは見覚えがあるのか？」
渋埼が質問する。男はしばらく考えてから「まったく見たこともない人ばかりです。恐らく道ですれ違ったとか、挨拶を交わしただけという人でもありません。本当の他人なんです」
「なるほど。君はその夢を見る原因がもしあるとすればそれは何だと思う？」
「分かりません。人を恨んだことが今まで一度もないと言えば嘘になりますが、それでも殺したいほど憎んだことはありません」
「では、その夢はいつから見るようになった？」
「確かではないのですが、二ヶ月ほど前からでしょうか」
「その夢を見始めるようになった前になにか精神的あるいは肉体的に大きな出来事はあったか？」
「特には……仕事も順調でしたし、プライベートでも変わったことは」
しばらくの沈黙。二人が黙っている間も館内は人の息遣い、あるいは本のページをめくる音が聞こえてくる。
見渡せるくらいの広さの館内には本棚が十本と読書用、学生が勉強する用の木製の机が五つある。それと渋埼と男が座っている二人用の小さな机（これも木製。しかし随分と古びていて少しでも体重を掛ければ脚が折れてしまいそう）が窓際に三つ。麦茶とミネラルウォーターの入ったタンク。その横にカウンターが一つ。カウンターには昼下がりの庭で日向ぼっこをしている猫のような顔をした老人が座っていて、ずれ落ちる眼鏡を何度も指で押し上げながら本を読んでいる。平日ということもあってか館内にはわずかな客しかい

ない。机に向かって本を読んでいる女性。友達なのだろうか、その隣で頬杖を付いている女性は、つまらなそうに本を広げている。ノートと参考書を広げまるで何かの音楽を奏でているかのように鉛筆の音を鳴らす学生。欠伸をしながらそれでも本を読む中年の男性。先程、渋埼がクーラーを付けてくれと頼んだ青年（赤と白のラガーシャツにジーパンを履いている）は本棚を物色している。そして渋埼と男。

「ところで君は何という名だ」

渋埼が男にそう質問すると、男は重大なミスを犯したかのような驚きの顔になり慌てて「これは失礼しました。すっかり話しに夢中になってしまって名乗るのを忘れていました。あなたとは初対面のような気がしないもんで、私は小田といいます。小さいに田んぼの田。今は役所勤めをしています」と早口で言った。

「そうか。私は渋埼光一郎だ」

「何をされている方なんですか？」

しかし渋埼はそれには答えず、窓の外へ目を向けた。

「いや、言いたくなければ構わないです。すいません、今も言いましたけどあなたとは何処かで会ったような気がしてならないんですよ。それでついつい深い入りしてしまって」

「いいんだ。気にすることはない。話の続きを聞かせてくれるかな」

「はい……いや、よく考えれば初対面のあなたにこれ以上の話をするのは気が引けます。これくらいにしておきます。話を聞いてくれてありがとうございました。」

そう言って小田は立ち上がろうとした。渋埼が、やはり外へ顔を向けたままそれを手で制した。小田はまるで飼い慣らされた犬のように素直に従う。浮いた腰をまた椅子に戻し、咳払いを一つ。

「聞いてもいいですか？」

小田が言う。渋埼が頷くと「私の夢の話なんかを聞いて楽しいですか？」

「楽しいか楽しくないかと問われれば、それはもちろん楽しくなど

ない」
「それではなぜ？　ただの暇つぶしですか」
「私はもっといい暇のつぶし方を知っている。私は君の夢にひどく興味を抱いているんだ。気まぐれで寄った図書館でこんなにいい出会いがあるとは思わなかった。やはり普段の私の行いがいいからなのか、それとも君が私を引きつけたのかは分からないが、とにかく君は私にもっと夢の話をすべきなんだ。そして君は運がいい。今日の私は仕事もなく午後からの一時、本を読んで過ごそうと思っていた。君の夢の話は、ここの本棚に差してあるどの本よりも魅力的だ」
　渋埼は立ち上がり飲み終えた空のコップを持ってタンクへ向かう。カウンターにいる老人にコーヒーは無いのかと問うと渋い顔をされた。渋埼は肩をすくめ仕方ないといった様子でコップに麦茶を注ぐ。席に戻った渋埼は煙草を取り出しくわえたのだが、館内が禁煙なのを思いだし舌打ちをするとフィルターを歯で噛み切った。
「君は何か猟奇的ことに興味はあるか？　たとえば人の血を見ると興奮するとか、血を見るとワクワクするとか、あるいは動物を殺したい衝動に駆られるとか」
　麦茶を不味そうに一口飲んでから渋埼はそう小田に言った。
「まさかそんなこと。血を見るのも怖いですし、動物は大好きですし、逆に僕は狂気じみたことには程遠い存在ですよ。さっきも言いましたけど、人を恨んだことはあっても殺したいなんて思ったこともないです。どうしてそんなことを」
「いや、君がたとえば殺人に興味があるとするならば、その欲望が夢になって出てきたと考えられるのでね。些細なことでもいいんだ。たとえば映画に出てくる殺人鬼が血を浴びながらあるいは悲鳴を聞きながら人を殺している姿を格好いいと思ったり、漫画や小説に出てくる主人公が敵を殺した瞬間に快楽に浸ったり、そういうことなんだが」
「それはもしかするとあるのかもしれませんが……しかし夢に見るまでとは……ありえませんよ」

「そうか。それでは質問を変えよう。君が夢の中で殺しているのは全く知らない相手、他人だと言ったな？」
「ええ、そうです」
「それでは、殺している場所はどうだ？やはり知らない所なのか？」
小田は渋埼の持つ麦茶の入ったコップを見つめながらしばらく考えていた。その視線が渋埼のくわえる煙草に移った時、小田は答えた。
「そういえば何処も知っている場所だ。うん。バスルームもビルの屋上もコンビニも乗っていた車も見たことある、いや、知っている場所です」
「それらの場所に統一性はあるか？」
「いや、ないと思います。確かに僕の身近な場所ではありますが、統一性はあるかと聞かれたら無いとしか」
渋埼は麦茶の入ったコップを机の上に置くと、顎に手を当て眉を上下に動かし、それは随分と滑稽な仕草に見えた。
「私はよく人の夢の話を聞く」
渋埼がやはり同じ仕草でそう言う。
「それは職業柄ということですか」
小田がそう聞き返すと、渋埼は否定とも推定もとも取れる曖昧な表情を作り「職業柄というより人の夢とは私にとって人生のようなものだ。あるいは夢がなければ私という存在はないのかもしれないし、私がいなければ夢という存在はなかったかもしれない。それだけ私と夢とは強く繋がっている」
今度はクーラーが随分と利きすぎているようだ。まるでもう夏は終わりだと告げる秋風のようにそれは渋埼の体の奥を冷やし、それは他の客も同じようで、本棚を歩き回っていた青年がクーラーを調節するリモコンの所へ行き風量を一番弱くした。
「つまりあなたが言うことをそのまま鵜呑みにするのなら、あなたは私の夢とも関わりがあると？」
小田が言う。

「そういうことになるな。だからといって君が何故夢を見るのか、その原因までは分からない」
「それはもちろん。けれどあなたなら私の夢を解消することも出来るのでは？」
「分からない。だがそう私に期待することは正しいことだ。本来なら私はプライベートの時間を楽しんでいるところだが、やはり体の奥が震えるんだ。まるで体の中に私を奮い立たす生物でもいるんじゃないかと思うほど、私の気持ちは非常に高まっている。そして君は私にその全てを託すべきだ」
「全てとは？」
「全てだよ。その悪夢を私が取り払えるかもしれないんだ」
「本当ですか？」
「ああ、本当だ」
小田は期待に満ちた表情で渋埼を見ながら「どうやって取り払うつもりなんですか？」
「ひとまずお前の夢の話をもっと詳しく聞かせてくれないか」
「ええ、それはもちろん。しかしそれは本当ですか？」
「それとは？」
「私の夢を取り払うことですよ。しかし夢を取り払うっていう言い方がどうもしっくりこない。普通は私が夢を見るようになったきっかけを追求して、その上で何らかの対策をして夢を見ないようにさせる。つまり、悩みを（夢を）解消するという言い方が正しいと思うのですが。いや、私はあなたがどんな人か知りませんし、もしかすると夢に詳しい人あるいは専門家なのかもしれません。だから専門用語で夢を取り払うという言い方があるのなら、それはそれでいいのですが」
「随分と細かいことを気にするな」
「すいません。気になったもので。歯と歯の間に挟まってしまったゴマのような小さな疑問だったのですが」
「しかしそのゴマは小さいけれど気になってしまう存在ではある。

大袈裟な言い方をすれば、その後の用事が思い出せないくらいに」
「ええ、そういうことなんです」
渋埼は麦茶を飲み干すと、空になった紙コップをしばらく眺めてから答えた。
「夢を取り払うというのは、専門的な言葉ではない。しかし、私の中でその言葉は専門的な言葉として存在している。先程も言ったが、私はよく人の夢の話を聞く。その夢の話を聞く中で私が使っている言葉だ。意味はない」
「そうですか……」
小田は空の紙コップを手に席を立ち上がると、タンクへ向かった。渋埼にもう一杯どうですか？　と尋ねたが渋埼は首を横に振った。

アスパラガスの微笑み2

「何処から話せばいいですかね？」
席に戻った小田は、並々と注がれた麦茶のコップを口ですすり上げながら飲みそう言った。
「なるべく最初からだ。思い出せる範囲でいい」
小田は頬を流れる汗をシャツの袖で拭ってから「私は自分の部屋の中にいるんです。目の前には若い女性が立っています。もちろん見たこともない人です。ピンクのアンダーシャツに青のパンツを穿いています。髪は肩まであって少しだけ茶色が入っています。彼女は私に気付いていないのか、私に背を向けたまま少しも動こうとしません。マネキンかと思うほどです。しかしわずかですか肩が上下に揺れていて呼吸をしている、つまり生きているということが分かります。私は手にナイフを持っています。恐らく果物ナイフのような物です。そして私は背を向ける彼女にゆっくりと近付き、腰のあたりに持っていたナイフを突き刺すんです。もちろん私の意志ではありません。女性は悲鳴を上げることもなく、床に倒れました」
小田はそこで一呼吸置き、そしてまた話し出す。
「次に私はバスルームで女性の首を絞めています。この両手を力いっぱい使って。腕の血管が異常なくらいに浮き出ているのが分かり、女性はまるで私に身を任せているかのように何の対抗もしません。表情が赤くなり青くなり、最後には真っ白になって、彼女の首からまるで魂が抜けるかのように、死という恐ろしさを私に教えるかのように大量の血が溢れ出てきます。それでも力は弱まるどころか更に強くなり、女性は遂には泡を吹き始め、その泡に混じって汚物が出ていて私は目を背けたい気持ち、いやそれよりも早く彼女を解放してやりたい気持ちでいっぱいになるのですが、しかし私は私の言うことを聞こうとはしません。ようやく力が弱まった時には、女性はもう最初から生きていたのかも分からないほど顔が変形し、白目

をむき、見るに耐えない姿になっていました」
小田はそして次の場面を思い出そうとしたが、うまくいかないようで随分と間を置いた。
「少し外の空気を吸ってみないか？私も煙草が吸いたくてどうにかなりそうだ」
渋埼がそう提案すると小田は「ええ、そうしましょう」とすぐに返した。

渋埼は煙草を吸いながら辺りを見回す。自動販売機があれば缶コーヒーを買おうと思った。しかし見渡す限りではありそうもなく、なければないで一層コーヒーを飲みたい気分になってしまい、苛立ちが腹の底をあるいは喉の奥を叩いているのが分かった。
「すっかり夏なんですね」
小田が言う。それは夏という季節の訪れを歓迎しているのか嫌に思っているのか、あるいはそのどちらでもないのか渋埼には分からなかったが、とりあえず適当に頷く。
セミの鳴き声が暑さに拍車を掛け、その鳴き声は青い空へと溶け込んでいく。空はまるで元からそんなセミの鳴き声は聞こえていないかのように静かにゆっくりと白い雲を浮かばせ、そして圧倒的な広さ（その広さは地球の中に存在することが、地球から見たらひどく小さいことであると改めて認識させるくらい広い）を二人に見せ付ける。
渋埼は胸元のポケットから手帳を取り出す。そこにはミミズが這ったような字で、細かいスケジュールが組み込まれている。午前中の仕事が以外と早く片付き、午後からの予定がまったくないこともあって（それでもトイレへ行く時間、食事の時間はしっかり組み込まれている）、渋埼は予定にはなかった図書館へ行くことにした。たまには予定を無視することも悪くないと思ってはいたが、やはり時間を支配できていないという苛立ちと焦りが、渋埼を落ち着かせなかった。せっかく広げた本を読んでいても、内容が頭の中に入っ

てこない。仕方なく図書館を出ようとした時、目の前の男、小田が現れた。まるで余命を宣告されたかのようにその顔はひどく暗く、そして何も受け付けていないかのように絶望的に痩せ細っていた。男は受付カウンターに置いてある朝日新聞を手に取ると、椅子に座ってそれを読み始めた。一面に海岸に打ち出された鯨が無事、海に返されたという記事が載っているのが見えた。しかし男は新聞を読んでいるというよりも、その新聞を透かして何処か別の遠くの場所を見ているのではないかというほど、目が虚ろだった。渋埼はその男を見てすぐに夢に悩まされている者だと悟った。あのような顔をした人間を何人も見てきた。彼ら、彼女らはまさしく絶望に溢れた顔をしているのだ。渋埼は吸い寄せられるかのように男の元へ行き、そして単刀直入に夢に悩まされているんだろ？と尋ねた。

渋埼は手帳を胸ポケットに仕舞う。

「あなたはとても不思議な人だ」

小田が言う。

「そもそも何故、私が夢のことで悩んでいることが分かったのか、そして私の夢をこんなに真剣に聞いてくれるのか。精神科の先生だってこんなに親身になって聞いてはくれなかった。精神安定剤を出しておきますからの一言でしたよ」

渋埼はしかし煙草を吸うことに集中しているようで、その小田の問いには答えず、非常に美味そうに、幸せそうに煙を吐いている。

館内に戻ると、カウンターにいた老人がまた来たのかという怪訝な顔を二人に向けた。渋埼は無視して先程の二人掛けのテーブルに着く。暑さのせいだろう軽い眩暈を覚えた。それは小田も同じようで眉間に皺を寄せながら数回頭を振り、それから目頭を指で強く押さえつけた。

「続きを聞かせてくれるか」

渋埼が言う。小田は頷き、テーブルに残しておいた麦茶を飲み干した。

「次に私がいる場所は、ビルの屋上です。恐らく私が働く会社のビ

ルの屋上です。そこには中年の男性が立っています。私は男に近付いて、男の体を押します。そんなに強い力で押しているはずではないのに、男は勢いよくまるでそうすることを望んでいたかのように、落下していきました。私が下を覗き込もうとした瞬間に、また場面が変わります。私はコンビニにいます。ナイフを持っています。最初の女性を殺した時と一緒で果物ナイフです。私は適当に商品を選んでレジへ行くと、会計をする青年の胸元に持っていたナイフを突き立てていました。レジのカウンターを挟んでいたし、私がナイフを振りかざす瞬間を青年は見ていましたから、充分に避けられたはずなのに、やはり青年はそうせず、（むしろ胸を突き出していたような気がします）ナイフを迎い入れていました。

次に私は車に乗っています。自分が普段乗っている車です。パジェロミニなんですが、私はそれに乗って夜の道を走っています。私がスーパーなどに行く時よく利用している道です。街灯が少なくそれでいて周りに民家があまりないので、随分と真っ暗な道です。車で走るにはアップライトにしなければなりません。その道を走っていると目の前に老人が現れます。私はアクセルを思い切り踏み込み老人に突進します。老人は少しも動こうとはしません。むしろ私を待っているようでもありました。ライトに照らされた老人の顔は随分と落ち着いていてまるで可愛い子供を招き入れるかのように両手を広げています。あるいはその顔は幸せそうにも見えました。そして私は老人を轢き殺しました」

小田は一気に喋ってしまい疲れたのか、しばらく深呼吸を繰り返していた。渋埼がそれで終わりか？　と尋ねると首を縦に振った。

「一つだけ共通することがある」

渋埼がそう言うと、小田はやはり気付きましたかという表情になり「誰もが殺されることに何の抵抗もしない、あるいは殺されることを望んでいる」

「ああ、そうだ。お前が殺しているというよりも、彼らが自ら死に向かっているという言い方が正しいのかもしれない。それでは何故、

彼らは君に死を委ねるのか。なんらかの理由があるとすればそれはなんなのか」
「渋埼さん、前世というものを信じていますか？」
小田が言う。
「私は誰にでも前世というものが存在していると思っています。実は私の前世は殺人鬼だったのではないのでしょうか。何人もの人々を殺してきた異常者。そして前世で私に殺された人々が現世で恨みを晴らすために夢を使って私を苦しめているとしたら」
渋埼は最初小田がふざけてそう言っているのだと思ったが、どうやら小田はかなり本気のようで、渋埼の意見を聞きたいらしく真剣な眼差でいる。
「くだらん妄想だな。お前の言う前世というものが存在するとして、何故その人々はわざわざ夢の中で復讐しようとする？　まわりくどいというか、意味が分からない。もっと確実な復讐の方法があるはずだ」
「そうでしょうか。夢の中で復讐するからこそ意味があるのではないかと思います。夢の中で私に殺人をやらせることで、お前はこんなに酷いことをやっていたんだ、こんなに何人も殺してきたんだと自覚させるために、あるいはそうやって私を苦しめることで復讐をしているのかも」
「考えすぎだ。まわりくどすぎる」
「まわりくどいからこそいいんですよ。そうやってじわじわと私を苦しめていくんです。そして最後には私が発狂するのを望んでいるんですよあいつら」
「それでは聞くが、その君に殺された人々というのは全員、前世の記憶を持ったまま現世に生まれてきたということか？」
「もちろんそうですよ。恨みというものは世代いや次元をも超える莫大なパワーを持っています。誰かを恨めば恨むほどそれはあらゆるものを超越するだけの力を持つことになる」
「それではどうやって君の夢の中へ入り込んでいるんだ？」

「それは分かりません。しかし私の考えは間違ってはいません」
「合っているとも思わんがな」
随分と突拍子もないことを言いだしたものだと渋埼は思い、半ば呆れた表情で窓の外へ目を向ける。世界中の「暑さ」を集めたのではないかと思えるほど、外は異常なくらいに歪んで見えて、それは渋埼が夢の世界へ入り込む瞬間の映像に似ていた。じっと見つめているだけでも手に汗が滲んでくる。二人が外にいた時よりもその暑さは増しているようだった。その熱は遂には周りの物体を全て溶かしてしまい、解き放たれた熱は地球を包み込んで、地球という星は太陽と類似した（あるいはまったく同じ恒星として）存在してしまうかのような、それくらいひどい熱だ。
「これでは外に出られそうもありませんね」
同じく窓の外へ目を向けていた小田が言った。渋埼は頷くと「ましてやこんなに冷房の効いた部屋の中にいるんだ。外に出た途端に氷みたいに溶けてしまうかもしれん」
「それでは渋埼さんはどう考えているのですか？」
「なにがだ？」
「私のいう前世というものがありえないとするなら、他にどんな可能性があると考えているのですか？」
「別に前世の存在を否定しているつもりはない。しかし、この場合その考えは当てはまらないと思う。ただそれだけのことだ。君の見るその夢は随分と特殊で、他の人ならばまず見ることの無い夢だ。君はなにかしらの悩み事を抱えているんだ。その悩みは些細なことであり、君自身も気付いてはいない。しかし精神がその悩みに対してひどいストレスを抱えてしまっている。夢というものは人間が作り出す心の廃棄物と言ってもいい。やましいことや腹の立つことあるいは傷付いたことがあれば、それは心の中で邪悪な塊となる。それは廃棄物として外へ吐き出さなくてはならない。それではどうやって吐き出すか？心の中の廃棄物を一掃するために人は自然とそして生きるための義務のように趣味や娯楽によってそれを外へと吐き

だしているんだよ。それがストレス発散というやつだ。その娯楽や趣味ではどうにも処理し切れなかった廃棄物は、今度は体が勝手に処理してくれるようになる。夢を見せることによって、それを外へと吐き出す。つまりお前が見ている夢は、普段ではどうしようもない邪悪の塊を体が夢を見せることによって吐き出そうとしているんだ」

「つまり私はやはり何かしらの悩みを抱えていると？　しかもその悩みは自分でも気付いていないと？」

「ああ、そうだ。よく思い返してみろ。ほんの些細なことでいいんだ。例えばずっと習慣にしていたことがここ何ヶ月か出来ていないだとか、履きなれたはずの靴がここ最近足に馴染まないだとか、忘れっぽくなっただとか、そんな小さなことなんだ。一つもないか？」

小田はしばらく考えていたが、何も浮かばないのか首を傾げた。しばらくして何かを思いついたようだったが、納得のいかない様子でやはり首を傾げている。

「悩みというわけではないのですが・・・・ちょっと嫌なことがありまして。いや、いい大人がこれを嫌なことだと言うのは随分と情けない気がします。きっと違います」

「いいから言ってみろ。悩みだと自分で思っていなかったとしても、そこから何か解決の糸口が掴めるかもしれん」

渋埼にそう促された小田は、それでもすぐに喋ろうとしなかった。しかし言って損はないだろうと思い直し口を開いた。

「私……アスパラガスが嫌いなんです」

「アスパラガス？」

渋埼が眉間に皺を寄せる。

「ええ、昔からアスパラガスが苦手でして。あの姿形もそうですが、味が嫌でして。なんだか歯ごたえのある草を食べているみたいなそんな気分になるんです。外食してサラダや料理にもしアスパラガスが入っていたらそれを除けて食べるあるいはアスパラガスが入っていそうな料理はなるべく頼まないようにしているんです。ああ、こ

うしてアスパラガスという言葉を口にするのも寒気がします。ほら、黒板を爪で引っ掻くと耳に不快でしょ？　今そんな気分です。それで、ここ最近、食事の中にアスパラガスが入っていることが非常に多いんですよ。レストランで注文したスープの中に入っていまして。それが細かく刻んであって見ただけでは気が付かないんですよ。しかし、私は口に含んだ瞬間すぐに分かりました。アスパラのあの独特の匂いがもう駄目なんですね。あと定食屋で注文したカキフライ定食に付いていたサラダにもアスパラが入っていました。そんなことがここ最近それこそ夢を見るようになってからよくあるんです。確立でいえば、六、七割といったところでしょうか」

渋埼は頭の中で緑色をしていて枝のような容姿をしたアスパラガスを思い浮かべていた。それはこの日照りのせいで弱っていた鳥が、同じように弱っていた木の枝の上で体を休めようとしたが根本から折れてしまい、枝は主を失い地面へと叩きつけられた。そんな枝のようにどうしようもないほど痩せ細ったアスパラだった。あるいはそれはアスパラと呼ぶには貧相すぎるほどだった。

「小さい頃から嫌いなのか？」

渋埼がそう質問すると小田は「それがあまり覚えていないんです」

「覚えていない？」

「ええ、たぶん小さい頃は普通に食べていたと思うんですよ。しかし何かのきっかけで嫌いになった。ただそのきっかけが覚えていないんです」

「なるほど。もしかするとその嫌いになったきっかけというのが夢と関係しているのかもしれないな」

「まさか。そんなことありえませんよ」

「なぜそう言いきれる？　夢というものはそんな日常のちょっとした思いだとか行動が原因となって見ることが多いんだ。お前が何故アスパラを嫌いになったか。実は幼少の頃にトラウマになるような衝撃的なことがあった。もちろんアスパラが関係している。そのせいでアスパラが嫌いになった。その嫌っていたアスパラがここ最近

よく目の前に出てくるようになった。そのせいで幼少の頃のトラウマが蘇ったんだ。お前の中に眠っていた、いや無理矢理眠らせていたトラウマが目を覚まし、それが夢の中に現れた」
「そんなことあるわけないでしょ。アスパラが嫌いになるような衝撃的なことってなんですか？ぐしゃぐしゃに踏み潰された大量のアスパラを見てしまった？それともいっぺんにアスパラを食べてしまったせいで吐き出してしまった？」
「そんなことではない。もっと衝撃的ななにかだ。それを子供の頃のお前は心の中に閉じ込めてしまっているんだ。二度と思い出さないようにと」
「そんなことあるわけないですよ」
「それでは何故アスパラが嫌いになった理由が分からない。元々は好きだったんだろ？」
「きっとたいしたことじゃないんですよ。子供はちょっとしたことで好きになったり嫌いになったりします。その嫌いになったものを大人になって克服できるかできないかなんです」
「そうとは限らない。よく考えてみろ。なにか原因があるはずなんだ」
　しかし小田は顔をしかめたまま考えようとはしなかった。
「何も考えるつもりがないのなら」
　渋埼はそう言って小田の額に人差し指を押し当てる。
「なんの真似です？」
「私はある特別な能力を持っている」
「能力？　ちょっとまさか夢の中に入れるなんてこと言わないですよね？　随分と馬鹿げてます」
「その通りだよ」
　小田の表情が固まる。目を細め渋埼を見る。それは明らかに渋埼を変人としてあるいは何か特殊な生物として見ている目だった。しかし渋埼は冗談を言っているようにもましてや気が狂ったようにも見えない。小田は渋埼の指を振り払おうとしていた手を引っ込める

と、彼の次の行動あるいは次の言葉を待った。また喉が水分を欲していることに気付く。まるで砂を飲み込んだかのように、体中の水分を全て抜かれてしまったかのように、喉が渇いている。
「冗談ですよね？」
小田は念のためそう聞いてみる。しかし渋埼はそれを否定する。そして「普段は仕事以外ではこの能力を使うことは滅多にない。というか、まずない。しかし、私は君の夢にひどく関心を持っている。こんなこと今までなかったし、私も自分で驚いているんだ。なにも心配することはない。ただ私に身を預ければいいんだ」
「とても信じられない。そんな非現実的なことがあってなるもんですか。ああ、やっぱりあなたに話すんじゃなかった。こんなふざけた仕打ちをされるとは不愉快ですよ」
小田はそう言って渋埼の指を振り払った。後悔の溜め息を吐きながら、ひどい乾きを潤そうと麦茶の入ったタンクへ向かう。しかし向かった先にタンクはなかった。
「ここは……？」
そこは見慣れたはずのしかしありえない場所であり、小田は首を何度も振り頬を平手で殴り、目頭を目玉が飛び出るくらいに指で強く押さえつけた。しかしそこに見えたのは、ベッド、テーブル（煙草が山盛りになった灰皿と缶ビールがある）点けっ放しのテレビ、ソファー、グレイのカーペット、数匹のグッピーが泳ぐ水槽、つまり自分が住んでいる部屋の中だった。ベッドの上にはついさっきまでまだ自分が寝ていた温もりがある。テーブルの上の灰皿には消し損ねた煙草がある。そしてそのテーブルの横に女が立っている。もっと正確にいえば夢の中で小田が殺している女。ナイフを突き立てている女。女は夢の中と同様に生きているのか分からないほど、あるいはマネキンかと思うほど身動きをしない。しかし肩がわずかに上下に揺れているので生きている、つまりちゃんと血の通った自分と同じ人間であることが分かる。
「少し手荒い真似をしたが許してくれ」

振り返るとそこにはまるで小田の見る悪夢を象徴して生まれてきたかのような、あるいは小田の苦しみをそこへ吐き出したかのような全身真っ黒な服を着た男が立っていた。
「渋埼さんですか……？」
小田がそう尋ねると黒ずくめの男はそんな分かりきった質問に答える気にもならないといった様子で小田の方へ近付き「まだ私の言うことが信じられないか？」
「本当に……ここは私の夢の中なのですか……？」
「もちろん。見覚えがあるだろ？　ほら、そこにいる女だっていつも見ているはずだ」
渋埼が指差す先には女が間違いなくいて、そして小田の手にはいつの間にかナイフが握られていて、小田はそのナイフを慌てて投げ捨てようとしたが、ナイフはまるで小田の体の一部であるかのように、あるいは強力な磁石であるかのように離れようとしない。
「こんなことがあるなんて……」
目の前の光景がどうしても信じられなかった。というより信じたくなかった。あるいは自分は気が狂ってしまったのだと思いたかった。
渋埼はテレビに目を向ける。そこには見かけない顔のニュースキャスターが神妙な面持ちで原稿を読んでいる。まるで私は今、重大な事実をみなさんに教えているんですよといった表情で原稿を読んでいるが、実際は海岸に打ち上げられた鯨が無事に海へと帰ったという、誰もが聞き流すようなそんなどうでもいいニュースだった。渋埼の一日のスケジュールの中にはテレビを見る時間、つまりニュース番組を見る時間があるのだが（夜の十時から始まる報道番組だ。特にお気に入りの番組ということではなく、ただスケジュールの関係上その時間に見るしかないのだ）見たこともないキャスターだったから、恐らくは渋埼がテレビを見ていない時間帯の番組にでも出ているのだろう。
「さあどうする？　お前が見続ける悪夢を私は取り払うことが出来

る。もちろん私が勝手に取り払うことは出来ない。お前の許可が必要だし、もし嫌ならこのまま私を夢の中から追い出してくれてもいい。ここはお前の夢の中つまりお前が支配する世界なのだから。私は例えるなら邪魔者だ。他人の家に勝手に上がりこんだ泥棒だ。お前が私を邪魔者だと思うのなら私も諦める」

渋埼はそれだけ言ってしまうと煙草を取り出し吸った。山盛りの灰皿の上へ灰を落とす。そして腕時計を見る。その仕草は時間を気にしているというのではなく、いつもの癖でついついそこへ目がいってしまったというかんじに見えた。

「あなたが夢の中に入れるというのは分かりました」

渋埼が煙草を吸い終え、次の一本に火を点けようとした時、小田が言った。

「本当にあなたは私の悪夢を取り払ってくれるんですよね？」

「その保障はできない。しかし心配するな。私は夢の中においては神そのものなのだ。神にできないことはない」

「信用していいんですか？」

「信用するかしないかはお前の勝手だ。ただ私は神だと言っているだけだ」

「神に背く人間などどこにいます？」

「存在しない。いや存在してはならない」

渋埼はそう返すと頬を緩め、くわえていた二本目の煙草を口から放した。そしてテーブルの横に立つ女へ歩み寄る。女の正面に立ちその顔をまじまじと見つめる。綺麗な二重瞼をしている。まつ毛が長く、鼻がすっと通っていて口が小さい。つまり随分と整った顔立ちだ。ピンクのアンダーシャツに青のパンツを穿いる。髪は肩まであって少しだけ茶色が入っている。その目は何処か遠くを見ているようでもあったし、ただぼんやりしているようにも見えた。

いつの間にか小田も女の正面に立ちその顔をじっくりと眺めていた。

「本当に見たことない奴か？」

渋埼が尋ねると小田は「ええ」と女の顔を見たまま答えた。

「確かに見たことのない顔なんですが……なんでしょう、そんな気がしないんですよ」
「やはりどこかで」
「そうなのでしょうか……分からなくなってきました」
「まあいい。さあ、続けてくれ」
「続けるって何を？」
「夢の続きを見せてくれという意味だよ。さあ、この女を刺し殺せ」
小田はそんなこと出来るわけがないでしょうと言いかけたのだが、その前に体が勝手に女の方へ吸い寄せられ手に持ったナイフを女のわき腹に突き立てていた。声を上げることももちろん抵抗することも出来なかった。まるで体が一連の動作を覚えているかのように、小田の意思から離れていくみたいに、動いていた。ようやく声を上げた時には、女はそこに倒れていて腹からは血を流し、わずかながら小さな呻き声を漏らしていた。
渋埼は倒れた女に近付くと「おい、お前は何者なんだ？　くたばる前に答えろ」と女の頬を叩きながらそう言ったのだが、女は少しもしないうちに白目を向いてしまった。
「どうなっているんですか」
床に座り込んでしまった小田は大声を上げると、女を刺し殺したナイフを投げ捨て（今度はすんなりと手から離れた）まるで生まれたての子羊のように手足をばたつかせながら立ち上がった。
「どうもなっていないよ。ここは君の夢の中だ。夢の中の出来事がそのまま起きているだけのことじゃないか」
渋埼は冷静にそう返すと、指を鳴らした。場面が変わる。バスルーム。小さな浴槽がある。水は入っていない。その代わり女がその中に入っている。目は閉じられているが死んではいないようだ。眠っているのかもしれない。手足を外へ放り出し、操り人形が高い所から放られて地面に叩きつけられたらそうなるのではないかという格好だ。浴槽の横には洗面台と壁にはめ込まれた小さな鏡。洗面台には歯ブラシと髭剃り。それにハンドソープ。

小田は浴槽に寝そべる女の首へ手を添えそのまま力いっぱいに締め上げる。蛙の鳴き声のような、排水溝に何か詰まった時のような、短くて低い声が女から漏れる。
「やめろ。やめてくれ」
小田が首を絞めながらそう叫んでいる。女の肌の温もりが、喉を押さえる感触が、細い首の感覚が、小田の手に伝わる。それは今まで経験したことのない恐怖。自分は人を殺している、なんの抵抗もしない女を殺している。その罪悪だけが体中を支配していく。力を弱めようとしても、手を離そうとしても、その気持ちとは反対に力は強まり手は張り付いたように離れない。
「渋埼さん、止めて、止めてください」
渋埼にそう懇願するのだが、渋埼は無駄だといった様子で首を横に振ると「ここはお前の夢の中だ。私がどうこうできるものではない。身を任せるんだ」
「そんなこと言わないで、お願いしますよ。私をこの女から引き剥がせばいいんです」
「断る。それは君の夢を代えるということだ。そんなこと決してあってはならない」
そう渋埼が返すのだが、小田は懇願を続けた。しかし首を絞められた女は泡と血と汚物を口から大量に流し、白目を向き、ようやく手の自由が利くようになった小田が首から手を離した時には、もちろんすでに女は息をしておらず、小田は再び叫び声を上げた。
その場に座り込む小田。震える手。その手には大量の血が付いている。まるで女の生気であるかのように大量にそしてあらゆる赤をそこへぶちまけたかのように美しいくらいに真っ赤。爪の中まで真っ赤に染まっている。女の生皮が血に混じって爪の中にこびり付いている。
「さあ、次だ」
渋埼はそんな小田を気にもせず指を鳴らす。今度はビルの屋上。汚れたコンクリートの地面。錆び付いた手すりが周りを取り囲む。

その手すりの前に男は立っている。空は雲一つない晴れ模様でそれは現実で見た夏の蒸し暑い景色とは違う、どちらかというと夏の終わりを告げるかのような爽やかな空だった。男はこちらに背を向けてつまり手すりと向かい合って立っている。グレイの背広、綺麗に後ろで撫で付けられた髪、黒の革靴。後ろ向きでは表情が読み取れなかったが、その背中は何かを思い詰めているかのようなあるいは何か決意を固めるために意識を集中させているように見える。

小田がゆっくりと男に近付く。そして背後に立ち男の肩を押す。いや、押したというよりも肩に手を添えただけのように見えた。しかし男は手すりを超え勢いよく空へと飛び立つ。すぐに男が落ちたと思われる鈍いどすんという音。先程の二人の時と同様に小田はその場に座り込みしばらく呆然とする。そして「こんなこと意味があるんですか？」と渋埼に問い掛ける。

「あらゆる物事にはなにかしらの意味がある。そしてお前が見ているこの夢にもなんらかの意味があるんだ。その意味を探るため今行っていることは非常に重要なんだ。理解してくれ」

渋埼はそう答えるとまた指を鳴らす。今度はコンビニ。小田はすでにナイフで店員の胸元を突き刺していた。レジのカウンターを挟んで、小田が身を乗り出すような格好でナイフを持った手を伸ばし、店員がまるでそのナイフに吸い寄せられたかのような格好で（つまり体を前へ突き出すような格好で）胸元を血で染めている。

「もういやだ。体が言うことを聞かないんだ。誰かに操られているかのように体が勝手に動いているんです。殺したくなんかないのに」

小田はそう言ってまたその場に座り込む。

「さあ、最後の一人を見せてもらおうか」

やはり渋埼は気にもせず指を鳴らす。

小田は車を運転している。いつも自分が乗っているパジェロミニ。ブレーキの踏み心地、シートの座り心地、ハンドルを握った感触、すべてがいつも乗っている車と一緒。

これも走りなれた道。外は真っ暗で街灯一つない。わずかに建つ民

家からの明かりが頼りだったが、それだけでは心細いのでアップライトで走らせる。緩やかな坂道を登りきると、今度は真っ直ぐな道が五百メートルくらい続く。気付かないうちにアクセルを踏む力が強くなる。スピードがある程度上がってきたところで慌ててアクセルを緩める。

「田舎道なのか、ここは？」

助手席に乗っていた渋埼がそう問い掛ける。しかし小田はそれに答えようとはせず、ただ前だけを見て運転している。わずかながら目が血走り表情は強張り、それはまさしく今から人を殺す時のような表情で、渋埼が声を掛け続けるのだが小田はやはり答えようとはせず、鬼気迫るようなあるいは吹っ切れたような様子の小田は、アクセルを全快に踏みスピードを上げる。

「おい、どうした？　大丈夫なのか？」

渋埼が小田の頬を張りながらそう言うと、小田は始めて声を上げる。しかしその声は小田とは思えぬ、少なくとも渋埼がこの数分で接してきた小田ではなく別人といっていいほどの声だった。

「黙ってろ」

小田はそれだけ言ってしまうとまた前を見て走る。渋埼は何も返す言葉が無かった。まるで人が変わってしまったかのように、あるいは運転しているのは小田ではないのかもしれないと思うほどだった。しかし間違いなくそこにいるのは小田で、もしかすると夢を連続で移動してしまったせいで頭がおかしくなってしまったのかとも思ったが、性格が変わってしまうなんていう依頼者に出会ったことはないし、今回以上に夢を連続で移動したこともあるが、相手が少し乗り物酔い的な症状をみせたことはあったにせよ、ここまで酷くましてや今まで落ち着いていた者がいきなり怒鳴るなんて始めてのことだった。

車は更にスピードを上げる。渋埼はあえて何も言わず小田の行動を見守ることにした。あるいはこういう症状をみせる者が今までいなかっただけで、人格が変わってしまうのはもしかするとありえる

のかもしれないと思ったからだ。それならばそうなった者がどのようにして正気を取り戻すのか、あるいはそのままなのか是非見たくなったのだ。

しばらく走っているとライトに照らされて一人の老人が現れる。まだ遠くの方にいるのでそれが老人であるということが、その腰の曲がり具合から辛うじて分かる。杖を突いて歩きにくそうにしている。ライトに照らされているというのに、老人は気付く様子もなく、こちらに背を向けた格好で歩き、車がすぐそこに迫ってきた時に始めてこちらに体を向け、そしてまるで車を待っていたかのように、迎え入れるかのように両手を広げた。車はブレーキを踏むことなく老人の体を凄まじいスピードで貫く。思っていた以上に軽い音がして、それは猫や犬を轢いてしまった時の衝撃よりも随分と軽く、空き缶を踏み潰した時のようなそんな小さなものだった。

老人を轢いた後も車は更にスピードを上げる。外の景色が見えないほどに。そのうち遠くの方に小さな光りを見つける。それはトンネルだった。トンネルの中に入るとライトが辺りを照らして、すっかり闇の世界に慣れてしまっていた目を何度か細めたり、閉ざしたりしなければならなかった。そしてそれは夢の終わりを示していた。

アスパラガスの微笑み3

気が付くと小田は図書館にいた。これは現実なのかまだ夢なのか、あるいは自分の妄想なのか、しばらく天井を見上げまるで自分のものとは思えないしかし確実に自分のものでしかない頭の中を整理していた。

「ここは現実だ。調子はどうだ？」

渋埼がそう言うと小田はしばらく考えてから大丈夫ですと答えた。そして首をゆっくり揉んでから、まるで寝ているところを無理矢理起こされたみたいに、深夜に目が覚めたかのように、欠伸を何度かした。実際、夢の中にいたのだから寝ていたということになるのだろうか。そんなことを考えていると、渋埼が額に指先を向けていた。また夢の中へ連れ戻されるのだと思い、小田は慌ててその指を払い除けると、額を手で隠しながら立ち上がり、渋埼から遠ざかった。

「どうした？　大丈夫ならまた夢の中へいくぞ」

渋埼が不思議そうな顔で小田を見ている。小田はやはり額を隠しながら「冗談じゃない。もうたくさんだ。私はもう帰ります」

「おいおい、別に冗談でやっているわけじゃない。君のためにやっているんだよ」

「もう嫌なんですよ。いくら夢の中とはいえ、人を殺すのはたくさんだ。それにあんなにリアルに殺してる感触があるなんて……ほら、まだあの女の首の温もりがこの手に残っているんですよ。見てください、震えている」

「そんなことは今ここでは何の関係もない。お前は実際には誰も殺していなし、誰にも触れていない。あくまで夢の中だ。何の心配もいらないし、怖がる必要もない。私がいるから安心だ」

渋埼がそう言うものの小田はやはり首を横に振り続け、「もうけっこうです」と言って外へ出て行こうとした。渋埼は後を追い掛け、「大丈夫だと言っているだろ。何をそんなに怖がっているんだ？」

「怖いに決まっているでしょ？　それならあんたが私の代わりに殺してくれよ」
小田が大声でそう言ったものだから、館内にいた者達の目が一斉に二人の方へ向けられる。訝しげなそして迷惑そうな目付き。
渋埼は咳払いを一つしてから小田の耳元で「とにかく席に戻れ」と言った。小田は頷き渋埼と共に席へと戻る。
「とにかくもう夢の中に入るのは嫌なんです。あなたは夢の中に入るという特殊な能力をお持ちのようですが、それをむやみに使うのはどうかと思いますよ」
席に座り少しだけ落ち着いた小田は渋埼をまるで前世からの仇であるかのようなあるいはそれ以上の存在というように睨み付けながら言った。渋埼としては非常に心外だった。ついついむきになって返す。
「おいおい失礼だな。私は決してむやみに使ってなどいない。君を助けたいがためなんだ」
「助けたい？　私がこんなに嫌がっているのに？」
「おい、よく聞け。例えば病気の子供がいたとして、その子供を治すために注射を打つ必要があったとする。もちろん子供は嫌だという。だからといって嫌ならしょうがないと注射を打つのをやめるか？　そうじゃないだろ？　つまり君が言っていることは、子供が注射を嫌がっているのと全く同じなんだよ」
「なにも注射を打つ必要なんかない。もっと他の治療法があるはずです」
「面倒臭い奴だな。何も心配ないと言っているだろ」
「嫌なんです」
「どうしてそんなに嫌なんだ？」
「だからさっきから言っているでしょ、例え夢の中だったとしても人を殺すのは気持ちのいいもんじゃない。あんな体験もう二度としたくない」
「本当にそれだけか？」

渋埼のその質問に小田の表情が固まる。
「どういうことですか？」
「そういう意味だよ」
小田の声が震えている。それは自身でも分かるくらいだったので、もちろん渋埼がそれに気付かないはずはなかった。震え上がるほどの眼光を小田に向け、小田はそれを正面から受け入れることが出来ず顔を伏せ、しかし渋埼はそんな小田に対して更に質問を重ねる。
「夢の中で何か見たんだな？」
「何も……何も見ていませんよ」
「何故隠す必要があるんだ？　お前は夢を消し去って欲しいのではなかったのか？　それともまたこれから先も悪夢を見続けていたいというのか？何度でも何度でも人を殺すんだ。それはお前の精神そして肉体をも蝕んでいく。それでいいのか」
小田が顔を上げる。目はひどく虚ろで、頬の肉が誰かに削ぎ落とされたかのように痩せ細っている。唇は青白い。いや、顔が全体的に青白い。
「あんたはもう分かっているんだろ？」
小田が言った。壊れかけのレコードプレイヤーみたいな声。どこか遠くで喋っているように聞こえたし、近くで口を塞ぎながら喋っているようにも聞こえる。
小田の言っている意味が理解出来ない渋埼は耳に手を当てて「何を言っている？もう一度」と言ってみたが小田はそれっきり何も話そうとはしなかった。渋埼を見ているのか、違う所を見ているのか、小田の目はやはり虚ろ。そして渋埼は目の前にいるのは小田ではないと気付く。小田であって小田ではない。小田の肉体を持った違う誰か。
浴槽に体を横たえる女。その女の首を絞める小田。そして洗面所の鏡に映る小田の顔。いや、そこに映っていたのは小田ではなく、女の顔だった。首を絞められている女の顔。自分で自分の首を絞め

ている。それは狂気なのか悲しみなのか、あるいは喜びなのか、女はそんな複雑な表情をしている。
老人を轢き殺そうとする小田。運転しているのはやはり小田ではなく、その老人の顔。隣でうるさい渋埼に黙っていろと大声を上げる。

小田は多重人格者だった。小田の中に眠る幾つもの人格が自分達を殺してくれと小田に懇願する。
「何故死にたいんだ？」
渋埼がそう質問すると、目の前の相手（それは恐らくビルの屋上にいたサラリーマン）はゆっくりと答えた。それは言葉を覚えた赤ん坊が始めて他人に話し掛けるかのような、そんなぎこちなくて覚束ないものだった。
「もういいんだ。複数の人格が一つの肉体を共有するなんて最初から無理だったんだ。確かにここ最近までそうやって俺達は生きてきた。しかしそれも限界がきた。それで俺達は話し合って、元々の彼の人格一つだけにしてやろうと決めたんだ。そうすることが一番いいと思った。というよりも人間は本来そうあるべきであるし、そうでなければならないんだ。そうだろ？　俺達は存在してはならない、生き続けることを許されないんだ」
「小田は自分の中で幾つも人格が存在していることに気付いているのか？」
「気付いちゃいないさ。時々、俺らの中の誰かが外に出てしまって、彼自身の記憶が飛ぶことがあっても、彼は特に気にはしていなかったよ」
「何故、夢の中で彼を苦しめる」
「苦しめちゃいないさ。あれは彼に対して俺達が出来る精一杯のメッセージなんだ。俺達を消せるのは彼しかいないし、かといって彼にどうやって俺達の思いを伝えるかっていう問題がある。俺達に出来ることといえば彼の頭の中に入ることくらいだ。それも彼が意識

的に頭の中をからっぽにしてなくちゃならない。そうなると夢の中が一番やりやすいし、彼にも伝えやすい。ただそれだけのことだ」
渋埼は汗のせいですっかり臭くなってしまった自分の体を、顔を歪ませながら嗅いだ。それから、着ていたトレンチコートの裾をクーラーの風が中へと入るように何度もはためかせた。
「本当に死にたいのか」
渋埼は裾をはためかせたまま問う。小田は（しかし目の前にいるのは小田であって小田ではないから、この場合どういう呼び方が相応しいのか、あるいは間違いなくそこにいるのは小田なのだから、そのまま小田と呼ぶこともまた正しいはずである）少しだけ考えてから答える。
「何故、彼の中で多くの人格が生まれてしまったのか。その原因を俺達はよく知っている。何故なら原因があってこその俺達だからだ。分かるだろ？原因がなければ全ての物事は成立しない。そして原因を突き止めることが人類の目的であり、だからといって人類は原因だけを追い求めてしまってはいけない。原因があるということは結果があるということだ。その結果を変えることもまた大事なことであり、結果を変えるということはつまり原因を変えてしまうということだ」
「何が言いたい？」
「彼はアスパラガスが嫌いだという話をしなかったか？」
渋埼が首を縦に振ると、小田は溜め息をまるで魂を体から抜き取ろうとしているかのように深くそして大きく吐いた。
「アスパラガスに何か原因があるのか？」
渋埼の質問に小田は「彼は大量のアスパラガスを見たんだよ」とまるで自分自身に話し掛けているみたいにとても小さな声で喋った。渋埼がもう一度言うように促すと、やはり小田は同じように小さな声で答えた。
「お前は誰だ？」
渋埼が問う。人格が入れ替わっている。何の前触れもなく、何の

きっかけもなく。それぞれ一つの人格には決められた時間があってその時間が過ぎてしまうと、強制的に次の人格へと移ってしまう、そんなふうに思えた。

「私は誰なんだろう？　名前なんて聞かれたことがなかったから、自分の名前のことなんて考えもしなかった。なんだか名前を聞かれるなんて不思議な感じ」

その話し方からして、どうやら今度は女が小田の人格を乗っ取ったようだ。女といえば、脇腹をナイフで刺される女と、首を絞めて殺される女、この二人のどちらかのはずだ。

「アスパラの話を聞かせてくれないか」

相手が誰かなど渋埼にはあまり関係のないことだった。それよりも興味を引いたのは先ほどの人格から聞いた「アスパラ」という言葉。なんの変哲もない日常的に使うその「アスパラ」という言葉が、この場面では非常に似つかわしくない場違いな言葉に思えて仕方がなかった。

「たくさんのアスパラを彼は見てしまったの」

彼女は言った。

「それはまだ彼が小さい頃。彼は小さな村に両親と共に暮らしていた。村自体が貧乏で、それでも皆で助け合って生きていた。もちろん彼と彼の家族もそうだった。

ある日彼が外で遊んでいると、畑に大きな何かの塊を見つけたの。彼は最初それをアスパラだと思って見ていたの。たくさんのアスパラガスが落ちている。それは想像を超える量。まるで世界中のアスパラガス畑をほり返して、アスパラガスをそこに集めたみたいに。そして彼はもっとそのアスパラガスを近くで見たいと思うの。そっとまるでこれから悪いことをするみたいに忍び脚で近付いて行く。そして随分と近くに寄ったところで彼はそれがアスパラガスではないことに気付く。それは緑色をしていたし細長かったし、誰がどう見てもアスパラガスだった。しかし彼はそれが偽りのアスパラガスだということを知ってしまった」

「偽りのアスパラガス？」
「ええ、そう。偽りのアスパラガス。アスパラガスの中には大量の白い粉が詰め込まれていた。中を綺麗にくり抜いてからっぽにして、その中に白い粉が詰め込まれていたの。その時の彼はそれがなんであるかなんて分からなかったけれど、なにかいけないものだということはなんとなく察知した。一本のアスパラガスにはそんなにたいした量の粉は入っていないけれど、それが何千本いや、何万本とある。それは圧倒的な量であり彼の恐怖心をあおった。恐らく彼の村ではそうやってアスパラに麻薬を入れて密売していた。どういうルートでそしてどんな奴らが売人で、いつからその村で行われているのか、何故このようなことが行われているのかまでは分からないけれど、彼はとても危険な物を見たと思う。逃げ出したくても逃げ出せなかった。もちろん大人に見付かってしまう。そしてその大人は彼の顔を見て言った。何も見てないよな？　と。彼は何も見ていないと答えるしかなかったし、それ以外の答えを言ってしまえばどうなるのかも予測できたから、そう答えることが一番正しいと思った。そして彼は今見たことを全て忘れてしまおうとしたの。何もなかった。いつも通りだったと。しかし抹消された記憶は、まるで消されたことを恨みに思っているみたいに、最後の悪あがきみたいに、彼に深い爪痕を残していった。一つはアスパラガスがとてつもなく嫌いになったということ、そしてもう一つが彼の中で幾つもの人格が生まれてしまったということよ。自らを守るために、そして悪い記憶を忘れるためにたくさんの人格を彼は創り出した。それが私達なの。彼はアスパラガスの記憶が蘇る度に、私達を頼った。もちろん無意識のうちに。その度に私達は彼の代わりに外へ出て行った。それが私達の役目であり生まれてきた理由でもあるから」
　彼女は話し終えると、ゆっくりと目を閉じた。まるで自分が見逃してしまった罪を懺悔するかのように。
「これからどうするつもりだ？」
　渋埼がそう質問すると彼は少し寂しげな顔をしてから「皆で死の

うと思ってね」と答えた。
「どうやって死ぬつもりだ？」
「簡単なことさ。彼の中から消えてしまえばいいんだ。本当は彼に我々の存在を知ってもらって、そのうえで彼に消してもらうのが一番いいと思ったんだが、そうもいかないようだね。彼を随分と悩ませてしまったようだ。申し訳なく思ってる。それと同時に我々という存在を生み出してくれたことに深く感謝しているんだ。もちろん君にも感謝している。君のような才能の持ち主はもっと世の中に認められるべきだし、そのうえで人々は君を尊敬するべきだと思う」
「ああ、そうだな。ところで」と渋埼は言った。
「ところで、お前達以外にも彼の中に人格は存在しているのか？つまり、夢の中にいた五人以外にもいるのか？」
小田は少しだけ考えていた。それはどう応えたらいいか分からないといったように見える。あるいは正しい答えが自分でも分かっていないといったようにも。しばらくそのようななんともいえない顔をしていた小田だったが、「恐らくいると思う」ときわめて簡単にそう応えた。
「何人いるのかまでは理解できない。あと一人だけなのかもしれないし、もっと大勢いるかもしれない。あるいは本当に我々だけなのかもしれない」
「つまりお前達にもうまく理解できていないということか」
「ああ、言ってしまえばそういうことだ。ただ、我々五人だけはうまく意思の疎通をとることができた。もちろん自分が偽りの人格、つまり創られた人格であることを充分に理解もしていた。我々五人だけは全てを理解していたし、理解し合っていた。だからこそこの選択に至ったのだ」
「もし他にも小田が創りだした人格が存在するとしたら、お前達だけが消えても意味がないのではないか？　彼の中には幾つかは分からないが人格がまだ存在していることになる」
「ああ、そうだ。だからこれから彼の心の中を入念に探ってみなく

てはならない。そして他にも人格が存在していた場合は、そいつ（あるいはそいつら）をうまく説得して一緒に消えなくてはならない」
「うまくいくのか？」
「分からない。けれどやならなくてはならない」
「そうか」
渋埼はそう一言だけ返すと席を立った。もう小田は悪夢を見ることはないだろうと思ったからだ。これでもしかすると嫌いだったアスパラも食べられるようになるかもしれない。
恐怖の対象でしかなったものが急に好きになったりあるいは愛しくなったりするのは不思議なことではない。過程はあくまで過程でしかなく、人は過程など求めてはおらず、結果が全てでしかなく、それでも過程を大事にしたがる。つまりどんなに素晴らしい死を迎えたとしても、人はその死という瞬間よりも自分が歩んできた過程がどれだけ素晴らしかったか、どれだけ深い人生を歩んできたかを重んじる。またそれが逆でもいけない。どれだけ充実した人生だったとしても、死は決して苦しいものであってはいけない。結果が全てではなく、かといって過程が全てではない。また始まりが全てでもない。それら全てが満足のいくものでなくてはならない。そうでなければならないと人は考える。
渋埼は図書館を出ると、太陽の光を全身で浴びた。紫外線に肌が焼かれているのを感じる。そして夏は嫌いだと渋埼は声に出して言った。その声は夏の日差しに溶け、蜃気楼となって空へと消えていった。

なにかがおかしいと渋埼は思った。なんだかすっきりしない気分だった。そして図書館で起きた出来事をゆっくりと最初から思い返した。小田に会うまでなにがあったか、そして会ってからなにがあったのか。なんだか首を寝違えたかのような不快感があったのだ。それがなんであるのかは分からない。渋埼の前に姿を現したのは五人。しかし、その五人以外にも誰かがいたような気がしないでなら

なかった。
　女性の叫び声が聞こえた。図書館の方からだ。渋埼が振り返ると、血まみれの小田が中から出てきた。顔が真っ赤に染まっている。それは人間の血だった。まるで刷毛に赤ペンキを付けてそれを顔に塗りたくったように、血は奇妙なほど美しく光っていた。小田の顔は夏の日差しに照らされひどく歪んでいるように見え、実際彼の顔は般若のように恐ろしいもので、渋埼がどうかしたのか？と声を掛けると小田は腹の底からまったくこんなにおもしろいことがあるものだといった様子で、大声で笑った。手にはナイフを持っている。もっと詳しくいえば、血まみれのナイフを持っている。
そしてそのナイフを空へ掲げる。血まみれのナイフは太陽に照らされ鋭く光り、渋埼の目を刺激する。
小田の顔が徐々に変形していくのが分かった。まるでゴムのように顔が縮んだり伸びたりし、それは太陽によって顔が溶けているかのように見え、遂には元が顔であったのかどうかも分からないほどに歪んでしまった。
それは小田の人格を乗っ取った別の人格。小田の夢に出てきたのは五人の人格。それは自分自身がどういう存在なのかを充分に理解していた五人の人格。しかし理解していた人物はもう一人いた。それは決して表へは出ない、しかし常に小田の人格を奪い取ろうといていた非常に危険で凶悪な人格。
その人格は小田の夢の中に既に存在していた。小田の部屋にあったテレビの中に彼はいた。渋埼が見たこともないキャスターだと思ったのは当然であり、その時点で渋埼は気付くべきだった。ブラウン管に映っていたのは、キャスターでもましてや芸能人でもない。小田の中にいたもう一つの人格。
「中の人達を殺したのか？」
　渋埼がそう聞くと、小田は笑いを止め「ああ、俺が殺した」とまるでこれから他愛もない世間話が始まるのではないかと思うほど自然に、そして当たり前のように言った。

「何故殺す必要があったんだ？」
「必要なんかないよ。ただ人を殺したいだけだ。ずっと俺はこの体の中で我慢していた。そしてこの時を待っていた。楽しくて仕方ないんだよ、分かるだろこの気持ち？　ずっとこらえていた欲求が満たされた時の開放感そしてこの充実感。まるで天に召されるみたいだ」
「他の者はどうした？」
「他の者？」
「他の人格のことだよ。お前以外にもいたのを知っているだろう？」
「ああ、あいつらか。あいつら俺がいるのに気付かず、どこかに消えてったぞ」
「そうか」
彼らは自分達以外にも人格が存在するかもと言っていた。そしてその通り、彼ら五人以外にも存在していた。しかし、一番消さなくてはならない人格、一番存在してはならない人格を見逃してしまっていた。
渋埼は小さく舌打ちをした。
遠くで少年野球の練習の声が聞こえる。空は相変わらず青くそして遠い。生ぬるい風が体を舐め回すようにして通り過ぎる。夏は当然ながらこれからも続いていく。そして今日という日はそんな夏の暑さの一部として存在している。
渋埼は帰って冷たいアイスコーヒーを作って飲もうと思った。

夢の中で恋をして1

彼は石橋の上に立っていた。五十メートルくらいのさほど長くない橋の始まりの場所に立っている。しかしその場所は向こう側から見たら終わりの場所だともいえた。橋の先端同士が全ての始まりでもあったし終わりでもあった。橋の下には川が流れ、時折小型船が通過していった。川は底が見えるくらいの澄んだ水で、その中をあらゆる魚が泳いでいくのが見えた。この橋の下の川を通ることが、魚として生きていくための試練なのではないかと思うほど、見たこともない魚が何匹も通っていく。

彼はゆっくりとその川を見下しながら、石橋を歩いた。川の流れの音がまるで自分がその川で泳いでいるのではと錯覚するほど鮮明に聞こえてくる。その音に意識を集中させると彼は本当に川で泳ぐことができた。あまり泳ぎは得意ではなかったが、泳ぐことなど考えなくてもいいくらいに、その川では泳ぐことはあまり重要ではないかのように、スムーズにそして気持ちよく川を進んでいくことができた。泳ぎながら空を見上げるとそこにはさっきまで自分がいた石橋があった。その石橋の上に白いワンピースを着た女の子が立っていた。まるでその中の素肌が見えるのではないかと思うほど透き通った白だ。

麦わら帽子を目深に被っているのと、真っ直ぐに伸びた前髪のせいで顔はよく見えなかったが、彼はその女の子が何か特別な理由でそこに立っているのだと思った。黒い髪が腰の辺りまで伸びている。どうやら自分の方を見ているらしいが、こちらから声を掛けていいものかどうか迷ってしまう。小さな風が吹いて女の子の髪が静かに揺れる。そのせいで髪に隠れた女の子の顔があらわになる。女の子は泣いていた。遠くからでも分かるほどその表情は悲しみに満ちていて、頬を幾筋もの涙が伝っていた。すぐに風は収まり、また女の子の顔は隠れてしまうが、彼の脳裏にはその女の子の表情が焼きつ

いていて、ひどく胸が痛んだ。何故、女の子が泣いているのかという理由よりも、自分がいけないものを見てしまったかのような罪悪感からくる胸の痛みだった。

彼は川から上がり少女の元へと向かう。しかし彼が石橋の上へ辿り着く頃には、もうそこには誰もいなかった。彼はただの見間違いだったのかもしれないと思う。

石橋の真ん中まで歩いてみて、少女がいた付近に立つ。確かに足元から少女の温もりが、あるいは少女が流した悲しみの涙が伝わってきて、あの少女は見間違いでもましてや幻覚でもないのだと知る。そして彼はまた少女に会ってみたいと思う。ひどく悲しみに満ちた顔だったが、それでも美しい顔だった。ワンピースが霞んで見えるくらいの白い肌にそれとは対照的な真っ黒な長い髪。風が吹くとまるでこれから特別な舞台が始まるのかのように、黒い髪が女の子の顔をあらわにする。大きな幕が開かれ舞台にスポットライトが当たる。それはまさしく舞台女優のような美しさ。しかも彼のためだけに用意された舞台女優。その女優の表情に彼は心を打たれ、胸をときめかせ唾を何度も飲み込む。

彼は映画館にいた。客席が五十席もない小さな映画館だ。スクリーンでは二人の男女が出会い、恋に落ちるシーンを演じている。客は彼一人だけだった。ちょうど真ん中の一番スクリーンが見やすい場所に座り、手にはポップコーンとチェリオを持っている。

その映画はひどく古い映画のようで、時々、映像が乱れたり音が聞こえなくなったり、途切れたりして、普通だったらとても集中できないような映像だった。フィルムが痛んでいるのかあるいはそれ以前の問題なのか、白黒で映し出される世界はまるで誰かが二人の恋仲を裂くかのように歪んで見える。

彼はそんな歪みなど気にならないくらい映画に集中していた。いくら映像が乱れてもあるいは消えても、彼の目にはスクリーンに映る女がずっと焼き付いていた。それは目を閉じても事細かに（皺の

数やほくろの数まで）思い描けるくらい鮮明だった。スクリーンの女は三十代半ばといった年齢だったが、彼にはその女が誰であるかは分かっていた。
石橋で出会ったあの少女だ。歳は取っているが、あの少女に間違いなかった。スクリーンの彼女は目の前の男の手を取り、瞳を潤ませ、何かを言おうと必死に口を動かしている。あの瞳は間違いなく少女であり、彼はもっと近くで見たいと手にしたポップコーンとチェリオを隣の席に置き、スクリーンへと近付いて行く。
大画面に映る彼女は少女の幼さを残しつつも、大人の妖艶さをも兼ね備えた非常に魅力的な顔だった。大人になった彼女もまた素敵だと彼は思う。
　そのうち映画は終わってしまい、映像は途切れ照明も消され、彼は暗闇の中にいた。彼は目の前のスクリーンに触れ、もしかしたらこの中に彼女がいるのではないかと考える。そしてそっとスクリーンを押してみる。すると彼はいつの間にか港に立っている。オレンジ色の太陽が眩しい。波の音が耳に入ってくる。
大きな船が目の前にあって、甲板から多くの人が港に向かって手を振っている。港ではやはり同じように多くの人が船に向かって手を振っている。笑顔も見せている者もいれば、泣き崩れている者もいる。
　彼も人々に倣い船に向かって手を振る。すると船の甲板に彼女を見付ける。彼女は彼に手を振っている。彼は彼女に見えるように大きく手を振り上げ、そして何度も飛び跳ねた。その姿が可笑しかったのか、彼女は口に手を当てて頬を緩ませる。彼はその彼女の表情がすごく嬉しくて、まるで餌をもらうために芸をするイルカのように、何度も手を振りながら飛び跳ねた。
　そのうち汽笛が鳴って船の出発を告げる。彼は彼女と話してみたい、手を取り合ってみたい、もっと近くでその瞳を見てみたいと考え、船に向かって走り出すのだが、何処から入っていいか分からず、ましてや多くの人が港にいたのでそれを掻き分けるのに苦労し、そ

うこうしているうちに船は走り出してしまった。彼は船に向かって、つまり彼女に向かって大声で叫んだ。しかしその声は船のモーターの音と波の音そして人々の声によって掻き消され、彼女に届くことはなかったが、それでも彼女は彼の言葉を受け取ったかのようにより一層の笑顔を浮かべ、彼がそうしたように大きく手を振りながら何度も飛び跳ねた。

波がまるで船を飲み込んでしまうかのように大きい。アホウドリが、走る船の後を追い掛けるように飛んでいる。船は沈みかけだった夕日よりも早く見えなくなり、港にいた人々は人生の全てを終えたかのような疲れきった顔で散らばっていく。

もしかしたら船が戻ってくるのではないかと思っていた彼は、人々がいなくなった後もしばらくそこにいたが、辺りが暗くなって外灯が顔を照らす頃になると、諦めて港から離れた。

アホウドリが彼の頭上を飛んでいる。レンガ造りの家の煙突に止まり彼に向かって「君は彼女のことを諦めるのかい？」と尋ねる。彼はどう答えていいのか分からず黙ったままでいる。

「諦めることが間違いだとは思わないけれど、諦めずに何も得ないのと諦めて多くを失うのはどっちがいいと思う？」

アホウドリがそう尋ねると彼は「分からない」と返す。

「僕も確かに諦めることが間違った選択だとは思わない。けれど諦めずに多くを失い、諦めて何も得ないこともあるんじゃないのかい？」

彼がそう言うとアホウドリは隣の家の屋根に飛び移り「そういう考え方もある」と言った。

「しかし答えは実行することにあるんじゃないのかな？　やっぱり。実行することが素敵な未来になる。もしかすると最悪の（それは君が考えたこともないくらい最悪なもの）結果が実行した先に待っているのかもしれない。けれどそれで君は一つ強くなれるんだ。ほんのちょっと前までの君とは比べものにならないくらいに、あるいは君とは分からないくらいにね。凄いことじゃないか。人っていうの

はそうそう自分を変えられるものじゃない。物心がついて自分の意思をしっかりと持つようになってしまえば尚更だ。もちろん完全に変われないというわけではない。むしろ少しの勇気さえあればすぐにでも変われることが出来るんだ。しかし人々はそうなることを恐れ拒む。何故なら、そうすることで今までの自分を否定するあるいは存在しなかったことにするわけだからね。ただ変わろうとしないだけなんだ」

彼はアホウドリの声に耳を傾けながら、そこに本当に船が泊まっていたのかも疑わしいくらいに静かな海を眺めていた。波の音がまるで時の流れを取り込んでしまったかのように緩やかに聞こえてくる。彼はその波の音に合わせて小刻みに体を揺らしながら口笛を吹いた。単調に聞こえるけれどもわずかに変わっていく波の音に、彼は敏感に反応しながら口笛を吹く。それは彼が聞いたこともない音楽だった。まるで唇を尖らせればそのメロディーが自然に出てくるよう記憶させられたかのように、しかし彼は誰かに教えられたという記憶は無いのだけれど、その音楽は彼の唇から当然のように奏でられた。

非常に落ち着く音楽だ。本当に海の上を漂っているかのような気持ちにさせてくれる。自然と涙が流れ落ちてくる。それはただの感情の高ぶりによるものなのか、彼女にもう会えないという悲しみからなのか、彼には分からなかったけれど、このメロディーが涙腺を緩めたことには間違いなかった。

涙を手の甲で拭う。何かの気配を感じて顔を上げると、そこに見知らぬ男が立っていた。男は夜の一部を切り取って作られたのではないかと思うほど、全身黒ずくめだった。最初そこに人が立っていると分からなかったくらい闇と同化している。黒のトレンチコートに黒のズボン、そしてもちろん靴も黒の革靴を履いている。両手を広げながら彼に向かって深いお辞儀をする。そのお辞儀は彼を崇拝しているあるいは敬っているからというものではなく、形式的にそうしなければならないからそうしたといった風に見えた。男は獲物

を詮索するかのようなあるいは睨み殺してしまうのではないかというほど鋭く恐ろしい目をしている。
「あなたは誰ですか？」
彼がそう質問すると男はそれには答えず「君が探している子は、君のすぐ目の前にいる」と言った。彼が戸惑っていると男は「来い」と言って彼の手を取った。すごく冷たい手だ。彼は男に導かれるままに、闇の中を歩いた。いつの間にか外灯もなくなり、周りに何があるのかも何が潜んでいるのかも見えない状態で、そのうち歩いているのか止まっているのかも分からなくなり、ただ男の冷たい手だけが彼の感覚を刺激していた。
気が付くと彼は最初の場所、石橋の上にいた。いつの間にか男の姿はなかった。そこで彼は息を呑む。目の前にあの少女が立っている。まるで彼が来るのを待っていたかのように、曇り空を一気に払拭するくらいの満面の笑みを零した。彼も笑顔で返したかったのだが、頬が引き攣りそれは笑顔と呼ぶにはひどく不恰好なもので、彼は胸の奥から恥ずかしさが込み上げてくるのを感じていた。しかし少女はそんなことよりも彼に会えたことがなによりも嬉しいようで、頬を緩ませたままでいる。そして彼にゆっくりと近付き、彼の手を取る。先程の男とは比べものにならないくらい冷たかった。まるで熱を帯びていないし、あるいは血が通っていないのではとさえ思った。
しかし今の彼にとってみればそんなことよりも少女にまた会えたという胸の高鳴りのほうが勝っていた。彼は何か話そうと口を開くのだがうまく言葉が出てこなかった。
少女は頬を緩めたまま彼の腕を引っ張る。まるでその表情はこれから素敵な場所に案内しますと言っているようだった。
石橋を渡りきると、目の前には森があった。森の中はひどく暗かった。見上げると首が痛くなるくらい高いたくさんの木が、互いの体を支えあうように立っている。ある木は隣の木にもたれ掛かるように立ち、またある木は両隣にある今にも倒れそうな木を支えなが

ら立っている。一本でも欠けてしまうとここは森としては成立せず、また一本でも多い場合も森としては成立しない。例えば一本の木が何らかの拍子で倒れてしまったとして（小さな動物が齧り続けたせいだとか、木こりが切り倒しただとか）そのせいで全ての木が倒れてしまう。そんな森だった。彼にはその森の中がとても素敵な場所に思えた。中に入ればきっと特別なことが起きる、それはもちろん今まで彼が経験したこともないあるいは見たこともないものであり、喜びが沸き上がってくるのが少女にも伝わったのか、少女は彼の手を握ったまま振り返り「もうすぐよ」とやはり笑顔のまま言った。

森を抜けると、今までの真っ暗な光景が嘘だったのではと思うほどそこは輝いて見えた。目を閉じても浮かんでくるほど鮮やかで美しい黄色の花びらを咲かせた菜の花が、そこら中に生えている。見渡せる限り黄色一色。もうこの世には黄色という色しか存在しないのではないかと思えるほどだ。その数え切れないほどの菜の花が風に吹かれ、まるで何かのリズムを刻んでいるかのように右に揺れたり左に揺れたりして、それは完成されたダンスを見ているかのように素晴らしく美しかった。菜の花の上を蜂や蝶が飛び回っている。その蜂や蝶もまた踊っているように見える。

彼はしばしの間その光景に見惚れていた。そのままこの空間に吸い込まれ、自身もまた菜の花の一部として存在してしまうのではと思うほどだった。花の香りが鼻腔をくすぐる。

少女がいないことに気付く。見渡すが何処にもいない。大声を出して少女を呼ぶのだが返事はなく、何処かこの菜の花の中に隠れているのかと思って近くを掻き分けてみたが、目に入ってくるのは蜜を吸い取る仕事を邪魔されて苛立った様子で飛び立つ蜂の姿だけだった。

彼は菜の花の中を歩いてみることにした。少女を見付けることはもちろんだったが、この美しい世界を歩き回ってみたいという思いがあったからだ。菜の花を手で払い除けながら進んで行くと目の前に川が現れた。まるで黄色いキャンパスを引き裂くかのように、そ

の川は菜の花の中を長く横断している。川を挟んだ向こう側にも、もちろん菜の花は咲いているが、あちらの菜の花はこちらの菜の花とはまた違った色に見えた。それは川から発せられる光り（太陽の光を浴びて反射しているあの光り）のせいなのかもしれない。そして向こう岸に少女は立っていた。船の上でそうしたように、彼に大きく手を振りながら何度も飛び跳ねている。

彼は少女の元へ行こうと川に足を入れるのだが、随分と深い。しかも一見、緩やかな川に見えるがまるで大雨が降った後みたいにひどく流れが速い。危うく川に足を持っていかれるところだった。

「そこに行きたいんだけど川の流れが速すぎて行けそうもない。きっと下流の方は緩やかだと思うからそっちへ行ってみるよ」

彼がそう言うと少女は「この川に終わりはないわ。終わりがないってことは下流なんてものも、もちろん上流なんてものもない。川はこの世界を一周しているの。まるで包み込むように。この川は例えるなら世界の象徴みたいなもの。その象徴に常識は通用しないし、ましてや自力で渡るなんてこと無理なの」

「それじゃあ君はどうやってこの川を渡ったんだい？　さっきまで僕のところにいたじゃないか」

「もう少し川に沿って歩いてみて。そしたらある人に出会うはずだから」

「ある人？」

「そう、ある人。行ってみたら分かるわ」

彼は言われた通りに川に沿って歩き出した。終わりのない黄色の世界に彼は少しばかり不安を感じていた。もしかするとここは自分の想像するような素敵な世界ではないのではないかと思った。もしかするとここは……。

老人が、菜の花に埋もれるようにして座っているのが見えた。彼が近付くと老人はまるで何年かぶりにそこから立ち上がるのではないかと思うほど、ゆっくりと慎重に腰を上げた。ひどく汚れた布のような物を羽織っている。髪は真っ白。皺が顔中を覆い、もちろん

布から覗く手も同じように皺だらけだった。ちょっと後ろからおどかせば、そのままひっくり返って甲羅を裏返された亀のように起き上がれなくなるのではないかと思うほど衰弱して見えた。
「待っていたよ」
老人が彼に向かってそう言う。声は随分とはっきりとしていて、声帯だけはまだ若いままなのではないかと思った。
「この舟に乗れば向こう岸まで渡ることが出来るよ」
老人はそう言いながら河岸にある小船を指差す。木で出来た人一人がようやく乗れそうな小さな船だ。
「この舟は沈んだりしないの？」
彼がそう尋ねると老人は、そんなこと考えたこともないといった表情で首を横に振ると「決して沈むことはないよ。安心しなさい」と言った。
「向こう岸に行けばあの子に会える？」
彼は続けて質問する。
「ああ、もちろんだ。会えるよ」
「それじゃあこの舟は沈まないと言ったけど、川に流されたりはしない？」
「流されたりはしないよ。この舟は君が思っている以上に頑丈にできている。これまでたくさんの人を乗せてきたが沈んだことも流されたことも、もちろん壊れたりしたこともない。それは私が保証する。だから早く乗りなさい」
老人はそう言って彼を舟へと導こうとした。
「向こうに行けば僕はもう帰って来れなくなるんじゃないの？」
老人は答えない。答えない代わりに彼の手を引っ張り舟へ乗せようとする。
「やっぱり向こうへは行かない」
彼がそう言うと老人は顔を強張らせ「あの子に会いたくないのかい？」
「会いたいけど、向こうへは行っちゃいけない気がするんだ」

そう言うと彼は老人の手を振り払い駆け出した。老人が呼び止めているのが聞こえたが、後ろを振り返ることなく走った。菜の花を何本も踏み潰しながら走った。茎の折れる音あるいは花びらが舞い上がる悲惨な姿が目に飛び込んできたが、今の彼にとってそんなことどうでもよかった。僕は逃げなくちゃならない。ここから逃げ出さなくちゃならない。

永延に広がる黄色の世界。先程まではその素晴らしさと美しさに見惚れていた彼だったが、それがだんだんと異常な世界に見えてきたのだ。現に世界は彼を取り囲むかのようにあるいは逃がさないように徐々にその規模を広げているのが分かる。そして今頃になって自分はここにいてはいけないんだと気付く。

ここは黄泉の世界の一歩手前。あの川を渡ってしまえばもう二度と帰っては来れない、つまり自分は死んでしまうのだと悟る。早くここから逃げなくちゃ。

少女の声が聞こえる。彼のことを必死で呼んでいる。その声が非常に切羽詰ったものに聞こえてならない。彼女はもうこの世の者ではないのだ。彼女は僕をあの世に連れて行こうとしているに違いない。だから彼女の言うことを聞いては行けないんだ。そう自分に言い聞かせる。

振り返っては駄目だ、振り返っては駄目だ、振り返っては・・・・。

しばらく行くと徐々に黄色の世界が小さくなっていくのが分かった。ようやくここから抜け出せると思ったところで、今度は霧が辺りを包みだした。黄色に慣れてしまっていた彼の目は突然現れた真っ白で冷たい霧に驚き、瞼を閉ざしてしまった。しばらくしてからゆっくりと瞼を開けると、数メートル先どころか自分の手の指先すらも分からないくらいに霧が広がっている。思わず手を広げて道の頼りを探っていた。

大きな門が見えた。霧がまるでそこだけは包まないよう気を使っているかのように、門の周りは綺麗に晴れている。その門は空まで伸びていて、てっぺんが雲に隠れて見えない。門の横幅も先が見えな

いくらいに長く、それを門と呼ぶにはあまりにも大きすぎるし、だからといってこれを何と呼ぶのが相応しいのかは分からなかった。
この門を抜ければ現実へ戻れるに違いないと思った彼は、さっそく門を両手で押してみる。しかし門は全く動かない。というかこれだけ大きいのだから、彼一人の力ではどうにもなりそうもない。そんなことはもちろん彼も分かっていたのだが、それでも早く元の世界へ戻りたい思いがあったので門を力任せに押し続け、しかし返ってくるのはまるで大木を一人で動かそうとしているかのような、あるいは果てしない大地を一人で揺るがそうとしているかのような手応えのないもの。
しばらくそうやって押し続けていると後ろからまた少女の声が聞こえた。霧の中を掻い潜ってその少女の声は彼の耳へと届けられる。その門を開けては駄目だと言っている。しかし彼は押し続ける。力いっぱいに押し続ける。
「その門の中へ行きたいのかい？」
後ろから声がした。それは少女のものとは全く違う声。それも近くで聞こえる。振り向くとそこに人影があった。霧に隠れてうまく見えなかったが、その声質から女だと分かる。少女よりも遥かに年上の大人の女性の声だ。あとは何も分からない。何の服を着ているのかもどういう表情でいるのかも。しかし彼はその女性をどこかで見たことがあるような気がした。何処でいつあったのかもわからなかったが、女性の声は彼をひどく安心させた。きっとこの人が助けてくれる。何故だか分からないがそう思った。
彼が中へ行きたいと答えると女性は右腕を上げた。（実際は霧に隠れて見えなかったが、彼には女性がそうしたように見えた）すると門がゆっくりと開いた。こんなに大きな門だからとてつもなくひどい轟音を響かせながら開くのではと思ったが、まるで誰かがそっとふすまを開けたかのような小さな音だった。まるで紙で作られた偽者の門のようだと彼は思った。
「さあ、行きなさい」

女性はそう言って彼の背中を押した。彼は女性の顔を見ようと振り返ったが、すでに門は閉ざされていた。まるで門など最初から開いていなかったかのように。彼が門をすり抜けたかのように。

門の奥からさっきの女性の声がする。「リョウちゃん。さあ、行きなさい」

そこで彼は女性が誰であったのかを理解する。そして自分が誰であるのかも理解する。

彼の名は良平。そして彼のことを「リョウちゃん」と呼ぶのは一人しかいない。何年か前に亡くなった妹の律子だ。きっと妹が自分を助けてくれたのだ。あの世に行きかけた僕を救ってくれたのだと思う。そしてありがとうと言う。

真っ白な世界だ。先程の霧のようなうっすらとした白ではない。完全なる白の世界だ。彼はその白の世界に向かって歩き出した。この先にきっと幸せな何かが待っていると彼は思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8753w/

夢処刑人

2011年10月9日03時18分発行